

---

# Cruel garden ~ 刻残りの季節 ~

白田マコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C r u e l   g a r d e n 刻残りの季節

### 【Nコード】

N 2 6 6 3 K

### 【作者名】

白田マコ

### 【あらすじ】

賢王と呼ばれた赤毛の青年王、歌姫と呼ばれた薄紅の少女、そして魔女と呼ばれた藍色の少女。黄金色の吟遊詩人の語る、三人の悲劇。

恋した歌姫のために多くの国を滅ぼした王、病をえた歌姫、王を思うが故に歌姫を殺した魔女。歌物語の中の彼らは果たして一体何を思っていたのか。

それぞれの視点で進む、それは残酷な愛の物語。

これは「或る詩謡い人形の記録」という楽曲から一応の着想を得ましたが、キャラクター造形を始め二次創作というにはあまりに原曲との乖離が激しいため、3月30日“原作有り”カテゴリから外させていただきます。

これに関して御意見があるかたはどうぞご一報下さい。

## 【序章】黄金色の髪の吟遊詩人は語る

秋収：黄金色の髪の吟遊詩人は語る

歓声、嬌声、歌声。ざわざわとにぎやかな人の声が高く澄んだ秋の空へ昇ってゆく。

憂愁など感じようもないほどにかき鳴らされる弦楽器、高らかに吹き鳴らされる羊追いの笛、空になった樽を逆さにしただけの打楽器、それぞれの音を掻き分け踏み越え混ぜ合わせ、夕焼けの麦畑に男が女が老人が子供が踊る。大地を踏み鳴らす即興の舞踊はそれ自体がリズムを生み出す楽器でもある。彼らの血の奥深くに流れる大地への感謝の律動。

実りの秋を祝う、それはありふれた民衆の祭りだった。

「おお、また今年もきやがったか詩人様！！」

その、一角。酒杯を手ですでに上機嫌に顔を赤らめた髭面の男が、一人の青年に声をかけた。

「どうも、御主人。今年も豊作のようだなによりだね。」

踊る女のスカートや駆け回る子供たちを器用に避けながら、飴色の弦楽器を抱えた青年がやってくる。彼のために酒場の主人である男が酒樽を一つ置いてやる。屋外に設置されたそれらが宴会の席であり、板をわたせばテーブルにもなる。

「おや、御主人。これはまだ中身が入ってるじゃないか。」  
ふと、己が腰掛けようとしたその重さに気付いて青年が問えば

「なに、それは今年一番の上物でな。

祭りでへべれけのやつらにがぶがぶ飲まれちまうにやもつたいない。あんたの樂の加護で守ってくれよ、詩人様。」

そうつって笑う男の手の酒杯自体、ゆれる身体にあわせて零れている。そんな陽気な酔っ払いの様子に苦笑を零しながら、青年は答えた。

「了解。でも、守りきつた暁には一口くらいその上物を味あわせてくれるんだろうね？」

「おうともさ。と、言いたいところだが、あんたの一口は十分でかいからなあ。」

渋い顔をする男に、良い歌を歌うためには佳い酒がいる、とすました顔で青年は答える。

「飲兵衛め。吟遊詩人でなく吟遊“酒人”でも名乗るといいさ。」

「おや、歌を“風の酒”と称するのをご存知ない？」

それに歌うには喉が渴くんだよ。」

ひよい、と笑顔と共に差し出された手は、弦を弾くために硬く変質している。紛れもない奏者の手だ。

それに主人はなみなみと葡萄酒の注がれた杯を押し付けた。おっと、という嬉しそうな青年の声と共に紅い葡萄酒が夕日にきらめく。

「あー、しじんだー！しじんだー！！」

「やった、今年も来たんだ！」

「やーい、ひまじんー。」

「うたつて、うたつて！今年はどんな曲をおぼえてきたの？」

樽に腰掛けた青年に、頭に花冠や麦の穂をつけた子供たちがまわり付く。

よしよし、と子供たちにかまう青年も、卓を倒すなよガキ共、と小言を言う男も、共に目元がすっかりゆるんでいる。

「いいよなー、しじんつてもてるんだよなー。こないだもリーナ姉ちゃんに告られてたじゃん。

てかやつぱ旅とか男のロマンじゃん！

おれもぎんゆうしじんになろうかなー。」

「あら、だめよ。一時の恋ならともかく、麦畑のひとつももっていない男なんて！」

うらやむような男の子の裾を掴んで言った少女の一言に、吟遊詩人の青年は酒場の主人と目を合わせて一つ苦笑した。

「言われたな、甲斐性なし。」

「まあ、ねえ。」

見れば、年に一度の風物詩である青年の存在に気付いたのか、村の人々が彼らを囲むように集まりつつあった。

夕焼けの光が燃え移っていくかのように、かがり火や吊るされたランプに明かりが灯され始める。そして人々の瞳にはなお一層明るい期待と好奇のきらめき。

頃合いかな、と心地好いざわめきに微笑をもらした青年は、杯の葡萄酒で喉を湿らせると、自慢のキタラを高らかに爪弾いた。

「さて、さて、それでは語らせていただきますでしょうか。  
わたくしの樂と声に乗せまして、めでたき祝いの日に言葉の酒を、  
愉快的祭りの日に異国の語りを！」

本日語らせて頂くのは遙か北方、恋に狂った賢王と麗しの花の歌姫、  
雪の魔女と呼ばれた戦乙女の物語でございます！」

金色の翳りゆく秋の空。

夕焼けの光に、吟遊詩人の黄金の髪が麦の穂と同じ色に輝いた。

響く、弦楽。

黄金色の吟遊詩人は高らかに謳う。

「遙か北方 春を愛し 夏を尊び 秋を礎 冬に守られた白き国

統べるは賢王 尊き聡き赤金あかがねの瞳 凍える国の火色ひいろの王

侍るはべは名将 玲瓏たる青藍、氷の刃 冬の国の戦乙女

花開け賢王の国よ！

雪に抱かれようと人々の火は消えず その庭園に花は咲き乱れ

偉大なる王の下 葡萄酒は酌まれ 蜜は流れ 人々は詩を歌う

そして栄華の世に咲く至高の花

歌姫  
春の歌姫！ 花の貌<sup>かんはせ</sup> 天上の歌声 その御心すら麗し清し花の

花咲き花舞う賢王の世に

響く

歌姫の歌 薄紅の唇に刻む微笑 あたたかな瞳に慈愛の光

花唇から紡がれるは愛の歌

王は恋うた！ 花の歌姫

しかし彼女がその手をとる事はなく

嗚呼、彼女は冷たい死の病に侵された身

苦しげな吐息 正に花の如き儚さに王は耐え切れず

王は乞うた 癒しの術

万病の薬、異国の秘薬、ただただ歌姫を生かす術を

求めた 多くの命を犠牲にしても ただ一人のその温もりを

南の国へ攻め入り 西の国を焼き 東の国を滅ぼし

至誠たる戦乙女の言もききいれず

雪と火の粉に混じり響く怨嗟

「ああ、彼はもはや賢王ではない！」

嘆く戦乙女 恋に狂った王 彼と彼の王国に捧げた剣を手に

叫ぶ

「歌姫に死を！！」

凍えた瞳にもはや涙は流れず かの人の為にと滅ぼした国々  
その血塗れた刃で

哀しい歌だけを歌う歌姫 その華奢な喉首を 貫いて

…

散った歌姫 その花唇には微笑

狂王の怒り どれほどの功績 どれほどの献身も意味はなく

叫ぶ

「魔女に死を！！」

囚われた戦乙女 歌姫を呪い醒めぬ眠りを与えた魔女

歌姫の血に塗れ牢の中 凍りついた瞳にもはや涙は流れず

処刑は氷雪の散るさ中

きらめく銀無垢 振り下ろされた白刃

白い白い真白き世界に

咲く 一輪の 紅い花

貫かれたのは しかし魔女にあらず

散る 鮮赤 至尊の血の色

「狂王に死を！！」

人々が叫ぶ 紅い怒号 冷えた怨嗟

そしてその全てを押し

響く

魔女の慟哭 凍りついた瞳には血の涙

蒼白の唇からは哀の歌

彼女は叫んだ 彼女は哭いた

“魔女”は謡った もはや目覚めぬ人に 彼の王の国に永遠の  
眠りを

「この王国に死を！！」

吹雪は吹き荒れ 城は凍り付き 庭園の花は枯れ朽ちぬまま永  
遠の色

今も城は雪に呪われたまま

火色の王の罪咎まで白く覆いつくし

今の世に至るとも 藍の魔女の涙が溶けることはない

はるけき古 二人の乙女の歌によって滅びた王国の

語られるべき これは残酷な愛と哀の歌  
『

N  
e  
x  
t  
『冬の娘』

## 【序章】黄金色の髪の吟遊詩人は語る（後書き）

初投稿ですお願いします。そして多分すごく長いですごめんなさい（汗）

物語の語り部が好きです。でも書くの難しいよ！私詩人じゃないから歌とか前口上とかよくわかんないですよ！まあある意味ポエマーだなー！！（やけくそ）

吟遊詩人さんの歌の場面、これから先の話を全て圧縮してあらずじ丸分かりという暴挙にでましたがいかがでしょうか。個別の視点によつて色々伏線とかどんでん返しとか入れていきたいなあと思うわけですが、とりあえずシナリオはあんな感じです。ハッピーエンド以外駄目だと言う方には致命傷かと。とりあえず以下、

賢王アルヴィド

戦乙女（魔女）イルヴァ

歌姫フレイア

で完璧なる三角関係を目指してゆきたい所存です。吟遊詩人くんはしばらく蚊帳の外です。

そんなわけで！！

これはVOCALOID/KAITOを使ったオリジナル曲、青磁（即興電）P様の「或る詩謡い人形の記録」（五部構成）から着想をえています。が、なんといいいますか童話パラレルのような感じでほぼ物語の“外觀”しか共通点はありません。

既存のVOCALOIDキャラの二次作品だと思って読むとがっかりされることうけあいです。（そもそもカラーからして違いますし某双子や夫婦等も出ませんので。）

“北の国の賢帝が病をえた歌姫のために多くの国を滅ぼし賢帝を思う魔女が歌姫を殺した”という粗筋の一部のみが共通したオリジナルだと思っています。

そんな私はこの曲が大好きです。KAIKO可愛いよKAIKOハアハア

## 【冬の娘】 - 1 藍色の少女

ただ触れてほしかったのだ、その大きな温かな手で。

慈しまれた事などなくただ雪の中とり残された私の手を引いたその手で

守ってなどくれなくて良い。

ただ、撫でて。ほめて。私の なで 愛し子よ、と。

厳冬：藍の瞳の魔女は嘆く

私が産まれたのは冬だった。私の王が、「お前はきつと冬に産まれ出でたのだろうな」と言ったから。そして、彼が私の手を引いたのもまた、冬だったからだ。

物心ついた時には私は独りだった。私が魔女だからだ。

そう、私は魔女だ。魂の嘆く声を聞き、人の生気を読み、何より私の言葉には魔が宿る。

人に あら 非ざる者達の中にあつて“言霊使い”と呼ばれる系譜、それに連なるおそらく最後の一人。それが、私。突き刺すような言葉、静止の言葉、狂気の絶叫、全てが人と世界を縛る。

今でこそ名将よ、王国の刃よと讃えられる身だが、それとて全てはこの身に流れる忌まわしい血の力の故に他ならない。青藍 せいらんの戦乙女が聞いて呆れる。

物心ついた時には私は独りだった。そして十になるかならないかの頃、本当に一人になった。

山間の小さな村。雪に埋もれるようにあった其処をわざわざ野盗が襲った理由など、単に冬の山中に手っ取り早く暖をとりたかった、という程度のものだったのかもしれない。

端的に言えば。

野盗共は小さな私の村を殺し尽くし。

そして、私は“彼ら”を全て殺し尽くした。私の異能が世に露わになることがないようにと、念入りに。

雪中、そして本当にただ一人ぼんやりと村だった場所の真ん中に座りこんだ私に、その手は差し出されたのだ。

真白い世界に、鮮烈な赤。まだ幼い　　と言っても、当時の私と

あまり変わらない年の頃と思われたが

男の子。

朱の髪、<sup>あかがね</sup>赤金の瞳。この北の地で、短い夏に輝く太陽のような。

眼を見開いたままの私に彼は言った。「来い。一人は、寒いだろう？」。

凍えきつた手は動かすこともできず。震えるそれに気付いたのか、彼はわざわざ仕立ての良い手袋をはずすと、私の手を取った。

感覚の失せた手にじんわりと染み入るあたたかさ。泣くな、と少し慌てたような彼の言葉に、私は初めて自分が涙をこぼしている事に気がついた。はじめて、涙を流すことができる気が付いた。

幼い、けれど全てを包み込むような手が、私の冷たい色の髪を撫で

てくれた事を私は忘れない。

彼が次期にこの国を継ぐ立場にある者だとはすぐに知れた。国を荒らしまわる野盗の討伐。それに無理矢理、こんな辺境の地まで付いてきたのだと。

何故、ときいた私に彼は言った。いずれこの国は全て自分のものになるのだと。全て自身が守ることになるのだと。

守りたかった。そして、守りきれなかったものがどうなるかを見ておきたかったのだ、と。

彼の小さな手は真っ赤になっていた。野盗に、私に、殺された人々の骸に雪をかけてきたのだと知っている。

私は彼を守りたいと思った。

『連れて行つて』。

縫りつき、言霊を囁いた私に、彼はそして大きく頷いた。

「わかった。お前はオレが守る。お前は、オレのものだ！」

その言葉が違えられることはなく、私は彼の側仕えとなつた。

王や側近らはずいぶんと困惑したようだが、彼が頑なに自分の言を曲げなかったのと、私が幼くいかにも弱々しい外見をしていたこと

そして私の言霊の力で、どうにでもなった。

義務として庇護を与えられるだけかと覚悟したが、彼は同じ年ごろの相手ができたことをいたく喜んでくれたようだった。イルヴァ、イルヴァ、と屈託のない声で私の名を呼び、どこへゆくにも私を連れて行ってくれる。

そう時間がたたないうちに私は彼の一番近い存在となった。面倒臭い儀礼の話、父王陛下の愚痴、離宮の料理人の作る美味しいおやつの話、宴席での異国の客人の話　　いずれ王となる彼の苦悩。

なんでも話した。冬の長い国で、王城自慢の常に花の咲き乱れる庭で。

やがて私は彼の為に剣技を習い始めた。文武を修めねばならない彼の相手を務められるよう、彼にもっとついていけるよう、王となる彼を守るために。藍色の髪は肩にも届かないほどに切った。元から冷たい色合いは気に入っていなかったし、何より手入れができず見苦しい長髪を彼に晒すくらいなら、短くとも切り整えられ艶やかな毛色でいたかった。

剣は、私に向いていた。私は相手の呼気を読むことができ、人の肉体を貫くことに躊躇いをおぼえない。なにより、静止の“言霊”の前に　　私に勝てる人間など、いなかった。

出会って八年、彼が王国の宝冠を戴くと同時に、私は女として初めて近衛隊長の位を得た。

女であっても、私は彼の傍にいられる。ふくらんできた胸に、いまだに細いままの腕に不安を覚えていた私は歓喜した。そしてそれどころか、彼はその日さらなる幸せを私に贈ってくれたのだ。

「お前が傷つくことがないように。」

何より、お前に似合う

無邪気な、照れたような笑顔で贈られたそれは、特注の女物の鎧だった。深い藍色に繊細な銀の飾り。勿忘草色わすれなぐさの絹の外套マントと相まって、まるでドレスと見紛う優美さの軍装。それは、私に、女であることを棄てなくても良いと言っているかのようにだった。

同じく優美な、氷の精を模かたどった銀の剣を手に、私は跪き、一切の悲哀を含まぬ涙を浮かべた眼で太陽のような彼を見上げた。

『 国王アルヴィド・マグヌス・ティセリウス陛下。  
イルヴァは貴方と貴方の王国に、心よりの忠誠を。』

やがて私は、“青藍の戦乙女”の名で呼ばれるようになる。

【冬の娘】 - 1 藍色の少女（後書き）

個別視点その1、まずは藍色ショートカット少女、イルヴァからま  
いります。ある意味彼女が一番まっすぐで分かりやすいシナリオか  
と。悲劇まっしぐらですがそれでもおkという方はどうぞよろしく  
お願いします。

## 【冬の娘】 - 2 花祭

彼が国王になろうとも、私が近衛隊長になろうとも、彼と私の関係は変わらなかった。

当たり前だ、その様に私が仕向けたのだ。

傍に。

ただひたすら傍に。

彼をこの手で守れる位置、そして功を為せば「よくやったな」、と彼に頭を撫でてもらえる位置に。

殿下から陛下へと呼び名が変わっても、人払いがすんだところでは私は彼をアルヴィド “アル” と呼ぶことができたし、彼は変わらず私をただイルヴァと呼ぶ。

どこへゆくにも連れていつてくれるのも同じ たとえそれ

がお忍びの外出でも。

「花祭、ですか？」

聞き返した私の言葉に、彼は鷹揚に「そうだ」、と答えた。

先代国王の病死により若くして王位を継いだ青年王。王家の純血を引くただ一人の後継者として文武を良く修めた彼は、すでに若輩などとは言わせない落ち着きを持ち、明朗さと快活さという若さの美德だけを引き出しているように見える。

即位して三年のうちに、国境防衛の見直し、東国オースティンとの許可制交易の創始、穀物の流通路と税制の整備、官吏の再編成、野盗の取り締まり。様々な改革を行った“賢王アルヴィド”。

完璧な王様。

けれど、私の前ではただの“アル”だ。

手にしたお忍び用の古びた外套、その他の小物を揃える手の楽しそうなおこときたら！

「花祭なら、毎年ご覧になってらっしゃるでしょう。」

そう、言葉を継ぎながらも私は色褪せた庶民の装束を取りだす。彼の行動を止める気などさらさらない。なぜなら、彼は私も共に連れて行ってくれるのだから。

「毎年、と言っても王城から見下ろすのと祝辞をあげるくらいじゃないか。」

戴冠前ならそれでも教会までの道程を楽しむくらいはできたが、父王は玉座か、設えられた宴席から一步も動く事はなかったぞ。私も三年間は我慢した。

が、そろそろ限界だ！あの浮かれた陽気の中で、何が楽しくて石像のように笑っていないければならない！！」

一人称がオレから私に変わっても、私にだけみせるその拗ねたような眼差しは変わらない。

くすり、と笑いを噛み殺した時に、ふとその声のトーンが明るくなった。

「それに、“歌姫”だ。」

「歌姫？」

鸚鵡返しに聞き返せば、楽しそうに彼は窓の外を見やった。

「そう、最近評判の歌姫がいるらしい。どこの者とも知れないが、とにかく素晴らしい歌声と可憐な花のような風情の持ち主だとか。花の歌姫だか春の女神の娘だか、すでに民らに随分と愛されているらしい。花祭が終わるまで、広場で歌っているときいた。是非とも一度見てみたい。」

春の柔らかさをおびた蒼穹を見上げながら、同じ年ごろのごく普通の青年がもつような無邪気な憧憬をこめて語る。

“春のような、花のような”。

暗く冷えた色彩の私とは真逆の印象の娘に、私は胸の奥が冷たく凍えるのを感じた。

けれど

「ほら、手伝ってくれ、イルヴァ。」

彼が私に目を向ける、それだけでそんな暗い感情は溶け消えてしまふのだ。

「はい、アル。すぐに。」

櫛と色粉を手に笑う。

彼の前で浮かべる笑顔は、いつも本物だった。

### 【冬の娘】 - 3 花冠と歌姫

城下は常に人でにぎわっているが、それでも春の近づくこの一時は格別だ。

北方に位置する国。年のほぼ半分を雪に閉ざされるこの国では、人々は春を殊更愛す。

春の美しさを賛美し、夏を敬愛し、秋の実りを慶び、そして冬を畏怖する。

異国や異民族の侵入を防ぎ続けてきたこの国の厳寒だが、それは雪がこの国民よりも侵入者の方をより多く殺すというだけにすぎない。戦禍にあっても平和の折であつても、寒さは人を殺す。

冬の終わった安堵と春を迎える喜びが、活気となつてこの国を覆っているのだ。

「相変わらず見事なものだな。」

私の隣で灰色がかつた茶髪 of 青年が楽しげにささやく。

鮮やかな朱の髪に灰と色粉を混ぜたものを巻き付け、垢じみてはいないが古びた外套をまとっている。ごまかしようのない赤金の瞳で、はそうそう顔をあげることもできないが、今は祭りの時期だ。顔の上半分を覆う祝祭の道化の仮面の奥で、忙しげに楽しげに立ち働く民を見る目には慈愛が宿っている。

「そうですね。花に埋もれるような街のなんて綺麗なこと。」  
家々の窓辺には花が咲き乱れ、街頭には色とりどりの布がひるがえる。数十歩ごとに花束を売る花車が並び、そのどれもに人が群がっていた。街頭で焼き菓子<sup>かし</sup>を焼く甘い匂いが漂い、中には鳥籠を並べ、小鳥の歌をきかせる屋台もある。  
気の早い誰かがまき散らした紙吹雪の混じった春風に、私は長い金髪<sup>かみ</sup>の鬢<sup>かん</sup>を抑えた。

ふと、くすり、と小さな笑い声。

「イルヴァ、ついてるぞ。」

とんとん、と自身の頭を指し示す動き。

慌てて頭に手をやるが、常とは違う柔らかな感触に戸惑っていると、すつと大きな手のひらが差し出された。

そのまま、撫でるように色紙の欠片を落とされる。

「そのままでも似合っていたがな。」

そうだ、後で花冠でも買ってやろうか？」

上機嫌で言うのに、

「……昔は、花祭で買うものと言ったら甘菓子くらいのものでしたのね。」

などと誤魔化し答えることくらいしかできなかった。

彼が再び歩きだしたのを追って上げた眼に映る街は、やはりひどく美しかった。

例え彼がすれ違いざまの旅装の男の袖口へ何かを滑り込ませ、代わりに巻いた羊皮紙の破片を受け取る場面を目撃しても。

それが官吏を監視させるために彼が密かに雇った間者だと知っている。

わけ隔てのない態度や太陽のような笑顔とは裏腹に、彼は自分以外の誰も信じていない。

そしてそれこそが若くして彼を真に“賢王”と呼ばせしめている所以だ。

最も、例外が一つ。“彼自身”の持つ剣である私は、その王者の猜疑心からは唯一除外されている。

私以外の誰も気づかない取引に、ふと振り返って悪戯っぽく笑ったのがその証拠だ。

私もまた、苦みのほとんどない苦笑を返す。

そうだ、考えてみれば噂の歌姫とやらの為だけに多忙な彼が城下へ降りることなど、あるわけがないではないか。

（城へ帰る時には、さりげなく花冠を売る屋台の傍を通ってみよう。）

そんな浮かれたことを思いながら、私は彼に付き従い広場へ向かった。

そして私は、花冠を得る機会を永遠に失うことになる。

… 響いているのは、歌だった。

柔らかく、可憐に。花の香が匂うように春風にのってどこまでも広がってゆく美しい歌。

時に小鳥のように高く、泉のように透明に。春の花を全て集めて作った花束のような華麗さで。

白亜で作られ、すり鉢状になった広場。花と人で埋め尽くされたそこで、まさに花の精のような少女が歌っていた。

薄紅色の髪に、同じ青でも私とはまったく違う、春の湖のような青翠色の双眸。華奢でいかにも柔らかそうな身体を質素な衣装が包み、それが少女の清楚さを一層引き立てていた。

違う。

冷たく硬い鎧を纏い、戦闘の号令を発し、藍色の眼差しを持った私とは、あまりにも違う。

私はその少女の在りざまに絶望すらした。

その凍りついた視界の中で、ふと、少女が此方に向いた。

心臓が跳ねる。何故。人々に囲まれた広場で、どうして此方を。

（ 見ないで、見ないで、見ないで、見ないで…！！ ）

こんな私を見ないで、彼を見ないで、彼の眼を引かないで…！

言霊の力を使おうとしたところで、この距離では彼女の歌にかき消

されて終わっただろう。

ただの心中の呪詛など、それこそ清廉な彼女に届くわけもなく。

彼女は、此方に顔を向けたまま、につこり笑った。

淡く上気した頬。そして、小さな花弁のような唇から紡がれたのは、“愛”の歌だった。

優しく、高らかに。春に花開く乙女の、愛の歌。

凍りついた身体のまま、視線だけ横に立つ彼に向ければ、赤金の瞳は一心に彼女を見つめている。

ああ、その視線の熱さときたら！私は悟らざるをえなかった。彼の

…

「イルヴァ。」

そつと囁かれた言葉に、小さく肩が跳ねた。一瞬訝いぶかしがられるかと思っただが、彼は歌姫から眼をそらすこともなくただ私の手のひらに冷たい硬貨を落とし

「花冠を。」

と続けただけだった。

そして、私は道化の仮面を付けた男が恭しく花冠を歌姫に捧げる場面を、呆然と見ていることしかできなかった。

【冬の娘】 - 3 花冠と歌姫（後書き）

いよいよ後味の悪いフラグが立ってきましたが。  
一応これで主要人物は出揃いました。次で顔合わせ？

## 【冬の娘】 - 4 差し出された花

花祭が終わると同時に、歌姫フレイアは正式に王城に迎え入れられた。

王を慰める楽師としてだ。父王からの重臣は幾分眉をしかめたが、彼女はその微笑一つで彼らの心を溶かしてしまった。

私のような言霊の異能を使わずに、だ。

そして王はこれまで以上に熱心に政を執り行っている。どれほど面倒な事が起こっても、彼女の歌をきけば疲れが吹き飛んでしまうのだと笑う。

私は変わらず彼の傍に控えていたが、彼が私を顧みる機会は明らかに減っていった。

「なあ、イルヴァ。」

そして、久方ぶりに。国境へ送る交代の軍の編成を終えて、ようやく二人きりで私に向き合ってくれたと思えば。

「女には、何を送れば喜ぶのだろうか。」

真面目な顔で、私にこんなことを問うのだ。

「“陛下”からの贈り物であれば、なんであれ喜ぶでしょう、彼女は。」

あえてアルとは呼ばず、ただ臣下として事務的な答えを返す。

そんな私の声の硬質さに気づくこともせず、彼はさらに眉根を寄せ続ける。

「だから、困っているのではないか。

金銀細工も、絹織物も、喜んでくれるが必ず『私には勿体ないものです』、と続けるのだぞ。私はただ彼女に笑ってほしいだけなのに。」

ああ、そんな本心など聞きたくありません。

胸の奥に凝り固まる氷塊をなだめつつ、私は歌姫フレイアを思い浮かべる。

全ての人に愛されるために産まれてきたような娘。

王の身边に侍る近衛隊長として紹介された時、私の纏う不吉な藍色を綺麗だと本心から告げたその純真な瞳。屈託のない微笑。剣を扱い硬く変質した手を包んだ掌の柔らかさ。

彼女を憎んですらいる私の眼にも、彼女は確かに美しいのだ。

花の歌姫フレイア。

「女性に贈るものと言えば、“花”ではありませんか？」

ぽつり、と呟けば、初めて彼が私に目を向けた。

「そうか…花か。失念していたな。」

「女性に贈るものと言ったら、真つ先に思い浮かぶもののように。」

言って、茶化すように苦笑する。

ああ、かつてあなたの前で浮かべる笑顔は、常に本物だったのに。

「いや、当たり前すぎてだな。

そうか、花か…」

そう呟き、再び黙考する。その頭の中では、すでにどんな花が彼女に似合うか、すさまじい速度で取捨選択が行われているのだろう。

微かな溜息と共に決済を終えた書類を揃え始めた時、ふと

「お前は、花をもらえば嬉しいか？イルヴァ。」

何気ないそんな一言。しかし予想もしていなかった言に、一瞬声が詰まった。

「ッ、は、はい……。」

「そうか。……。」

そして再び沈思に浸る。

些細な一言に跳ねた心音をそのまま、私は一礼するとその場を辞した。

翌日、日の差す渡り廊下で彼が花を携えているのを見た時は、気が重くなった。

薄紅の、彼女の髪の色にも似た可憐な花。  
だから、それを私に向かって

「お前にやろう、イルヴァ。」

そう差し出したのには心底驚愕したのだ。

もちろん受け取らないわけがない。しかし、素直に喜ぶには彼の不機嫌そうな表情が気になった。

「ありがとうございます……アル？」

躊躇いがちな声を遮る様に

「フレイアには、不要なものようだ。」

言い放たれた言葉に、心ごと身体が凍りつくのを感じた。

「花は、いずれ枯れ朽ちるもの。それでも、ひとつの命を私などのために手折り散らせることを私は望みません」と。まったくあの慈悲の深さと優しさには感嘆させられるばかりだ。」

言う声は柔らかい。私に向ける眼差しとは裏腹に。

「だから、それはお前にやる。」

お前は、花をもらえば嬉しいのだろう？イルヴァ。」

「陛下、下……」

身を擦じらせようとして、剣帯に吊った剣がガチャリと揺れた。なんの躊躇いもなく幾つもの命を刈り取ってきた刃が。

彼はそれに一瞬眼を向けると、そのまま王城の奥へと去って行った。私には、ただ美しい、あとは枯れるのを待つだけの一輪の花。それでも私がそれを手放すことはできず。

…そうです、それでも私は欲しかったのです。

命を手折る罪深い行為だとしても、慈悲など知らぬ身だとしても、ただ貴方のくれる花が。  
貴方が笑って差し出してくれる花が！

交代の警吏の足音が聞こえてくるまで、私はずっと春の日の差す回廊に立ち尽くしていた。

【冬の娘】 - 4 差し出された花（後書き）

痛々しい展開が嫌いな人にはごめんなさい。

先に見せた友人に“まるでダメな王様”略してマダオと評判の賢王様。腹が立つたら「このマダオが！！」と罵ってやってください。まあ、一番不幸な人なんですがね。

御察しの通り銀／魂も好きです。

【冬の娘】 - 5 枯死の言霊

その後、「手折られる命が忍びないのなら」と、王が王城の庭園を丸ごと歌姫に捧げたという話を伝え聞いた。

北の国にあつて常に花の咲き乱れる王家自慢の庭園。一緒に家庭教師から逃げ回つて、王妃様の命日の時には涙ぐんで、毎日他愛のない話をした思い出の庭園。

ああ、それすらも貴方は彼女に捧げてしまつたんですね。そこで彼女は、王の為だけに歌を歌うという。

その歌を聞くときは、近衛の私すら王から庭園の薄い扉一つを隔てた場所へ離された。

何かあつては、と言つたところで彼の不興を買うだけなのは明らかだった。何より歌姫フレイアに紙切りの小刀すら扱えるわけがない、というのが多勢の意見だった。

私は黙々と銀の剣の手入れをする。鎧の隙間を貫き、首筋を掻き切る、鋭利な細身のものだ。

王は歌姫をまさしく掌中の珠のごとく慈しんでいたが、視察などでどうしても王城を離れなければならない時は必ず私を歌姫の傍へ侍らせた。

歌姫の身を案じているのだろう。女でありながらその武を認められた者として、その信頼に未だ応えられるのだと思うと哀しくも嬉しい。だが、彼に付いてゆけないことが、その要因となつた歌姫が憎らしくもあつた。

そんな私の醜い心も知らず、フレイアは常に嬉しげに私を訪ねた。丈夫な卓と来客用の長椅子、本の詰まった書棚の他に、私の部屋には彼女のために柔らかなクッションと茶会のセットが用意されるようになった。

幸いなことに彼女は私と共にいるときに彼についての事柄を口にすることはなく、ただ他愛のないおしゃべりや小鳥のような歌を口にしていたが、ある日、私の卓の上にある一輪の花に気がついた。

「この花は、随分と長い間活けられていますのね。」

無邪気に、零れそうな瞳で見つめる先には、あの日アルから贈られた花があった。

歌姫に拒まれたが故に私にめぐまれた花。

それでも、『枯れないで』、と言霊の力まで使って未練たらしくこの手に留め置いている花。歌姫の長く柔らかな髪と同じ色。

「それは……」

何を言えというのか。怒りと憎しみと哀しみ、情けなさに唇を噛んだ私に

「あなたの傍ならば、花さえも永らえようとするのですね。イルヴァ様。」

向けられた言葉と笑顔は、あまりにも清廉すぎた。その先にある薄紅の花さえ色褪せるほどに。

“また、来ても良いでしょうか。今度はこのような理由もなしに。”  
そんな言葉と共に彼女が部屋を出て行くまで、私は自分がどういった受け答えをしていたのかほとんど記憶にない。

それでも、彼女が去った後、私は薄紅の花に向かって囁いた。

『 枯れてしまえ。 』

忌まわしき“言霊”。無理矢理にながら存えさせていた花は、一瞬で萎れ朽ち。

そして、歌姫フレイアが私の元を訪れることは、二度となかった。

【冬の娘】 - 5 枯死の言霊（後書き）

自分では王道をいつているつもりです。

明日からちよつとネット環境のないところへ行くのでいっぺんに上げようと思ったのですが、これは果たして切りがいいのか悪いのか。

【冬の娘】 - 6 大戦、悲壮、

彼女が倒れたのは盛夏の折だった。

緑が生い茂り、天に君臨する太陽に向かい立ち昇る。

寒さの厳しいこの国において実りをもたらす太陽の恩恵は王の徳に  
喩<sup>たと</sup>えられる。

そんな季節にも関わらず、その悲報は王城を、王都を全て暗幕で覆  
ったような嘆きをもたらした。

“歌姫フレイアは病をえていた！！”

人々は沈痛な面持ちで囁き交わし、楽師たちの弦が鳴ることもなく、  
小鳥たちさえどこかへ姿を消したようだった。

ことに彼の嘆きようはすさまじく、国中から医師を集め薬師を募り、  
ついには流れの錬金術師や妖術師といった怪しい輩 最も、  
魔女である私からすればそれはら全てただの詐欺師に過ぎなかった  
が すら片端から王城へ入れる始末。

何を言ったところで彼は聞き入れはしなかった。だから、私は王城  
の警備を念入りにし、不審な動きをした輩を捕らえ、飛び交う流言  
飛語に耳を澄ませた。彼の悲嘆に付け込んだ盗賊や間者共は、処刑  
した人数が両手両足の指を越える頃にはようやく収まったようだっ  
たが。

そうこうする間に秋が過ぎ、忌まわしい冬が来る。

身体の芯まで凍えさせるような厳しい冬。花祭の折には花では埋も  
れていた街が、冷たい白一色に染まる。

それは確実に花のような彼女の身を蝕んだ。

見舞いの果実籠を持たされ、一度だけ病をえた彼女を見たことがある。

細い腕はさらに細くなり、頬は熱に上気し、可憐な歌の紡がれていた唇からは苦しげな呼気がもれていた。

温かい毛皮に埋もれながらも震える身体。それにも関わらず訪れた私に心底嬉しそうに微笑んだ、そんな様が何より痛々しい。

まさかあの花への言霊が聞こえたわけではあるまいが、彼女の病が私によるわけではあるまいが、それでも胸の奥が痛むのを覚えた。もつとも、そんなものも私の目の前で恭しく彼女の手を取る、彼の姿を見るだけで嫉妬と悲憤という浅ましい思いに塗り替えられてしまふのだが。

そして、彼と私は沈痛な医師の言葉をきいた。

「次の冬は、越せないでしょう。」

と。

その日から彼は変わった。

治療の術を探し魔術師、魔女、異教徒をかり集め、一方で歌姫を呪詛したと囁かれた異民族の集落を滅ぼし。

遠く異国にまで兵を遣わし、医師達をさらった。それを見かねた南国の寄越した使者を、彼は顔色一つ変えず斬り捨てさせた。勿論斬ったのは私の刃だ。

流石に色めきたった重臣たちに、彼は肩を竦め「騒ぐな」と言い捨てた。そしてそれだけでなく、こう続けたのだ。

「向こうから仕掛けてくるなら好都合だろう？」と。

王位が変わったばかりの南の国。堅固で閉ざされたこの国とは裏腹に、温暖で平野が続く穀倉地帯。それを手に入れることは父王の代からの密かな悲願。

医師達を攫うために派遣した兵に、地形の調査を命じていたことを私は知っている。

そして 南の王家に伝わるという、全ての病を治癒するという真珠の伝説も。

彼の真意も知らず、重臣たちはあつさり口車に乗った。

“我らが賢王よ！！”と。

その礼賛を浴びる彼の、凍えた微笑にも気付かずに。

平穏と柔らかな日和に馴れた人々が、厳寒に鍛えられ賢王が策を弄し戦乙女という名の魔女が率いる軍勢に抗えるものか。

春も終わらぬ間に南の国は落ちた。しかしそこに、真に国王の求めるものはなく。

祝宴に浮かれ酔い痴れる重臣たちに、彼は顔色一つ変えず告げる。

「次は西だ。」

教会の総本山を戴く国。かつて北の国の王を、破門を盾に跪かせた仇敵。

「教皇冠を手に入れば、数百年ぶりに我らが正統の座を名乗ることができますな！！」

そんな愚にもつかないことを捲まし立てる大臣。この城にはこんなに

愚者が多かっただろうか？

彼が欲しているのはただ、教会総本山に収められているという聖杯、聖布、秘跡の品々。歌姫の病を癒す奇蹟だけだろう。

そして西の国へ。教皇派と旧教皇派、貴族連合を仲違いさせる策はすでに南を落とす前から弄していた。

「動くな、教皇マルティヌス！！」

神の信徒だろうがなんだろうが、私の言霊の前に抗える人間がいるものか。

教皇さえ人質にとれば後は利害だけで寄り集まっている小規模連合体、潰していくのは難しくなかった。

そして我が王を背教者よばわりした西の連合国は、教会を中心に盛大な篝火となることとなる。西を焼いた本当の理由が、聖遺物と呼ばれる教会の至宝のどれもが歌姫の病に効を為さなかったからだ。私は知っている。

この頃から、彼は事あるごとに呟くようになった。

「あるはずだ、必ずどこかにあるはずだ、万病の秘薬、生命の秘宝、彼女を永らえさせるための術が！！」

...

「次は東だ。」

夏も過ぎ去り、矢継ぎ早に口にする。

その時になりようやく皆が彼の抱える焦燥に気付いたが、その狂気に燃える赤金の瞳に逆らえる者など、もはや誰一人としていなかった。

東国オースティン。この国をはじめ、海の方この国とも交易を行う富に満ちた国。

勇猛な異民族を抱え込み外つ国からの武器を駆使し海を自在に駆け巡る船団を持つ。

内憂を抱えた二国とは違う。今までにない苦しい戦いになるだろう。もたもたしては、南と西の残党も蜂起しかねない。けれど。

「東の国を滅ぼせ！！

先陣を切るのはお前だ、私の戦乙女、私の剣

イルヴァ

！！」

誰がその言葉に逆らえるでしょうか。こんなに烈しく私の名を呼んでくれたことが、かつてあっただろうか。

だから、私は答えるのだ。

「　　畏まりました、我が王アルヴィド・マグヌス・ティセリウス陛下。

イルヴァの剣は貴方と貴方の王国にのみ捧げられております。」

例えどれほどの血を浴びることになっても。滅ぼした国

の民から、傷つき死んでいった兵たちから、“雪の魔女”の忌名で呼ばれようとも。

ただただ私は貴方のために。

……例え、貴方があの歌姫のためだけに動いていようとも。

【冬の娘】 - 6 大戦ゝ悲壮ゝ（後書き）

今後の展開のためにスピーディーに三国ほど滅んでいただきましたが。

一応速攻陥落のために幾つかそれっぽい理由づけもいたしましたが、リアリティより物語重視ということで御容赦願いたい。

## 【冬の娘】 - 7 病身の王都

南、西、東。主だった国は全て滅びた。

流石に兵達も疲弊しきっている。けれど、例え周囲三方の国の残党が結束したところで、この国に攻め入ることはできない。

なぜなら冬だ。冬がくるのだ。

十万の兵も及ばぬ盾。全てを凍てつかせ重く降り積もり、この国を世界から隔絶させる冬が。

そう、冬が来てしまう。

病ですでに弱り切った歌姫を、蝕む氷の季節が。

久々に帰還した王都は、それこそまるで半死半生の病人のようだった。

花祭の折の活気は、かつては雪に埋もれてもそこにランプが下がり人々が笑いながら行き交っていた街は、どこへいったのか。

王都を囲む灰色の石壁には、錆びた赤い色が残っていた。息子が全て先の戦で戦死した事を嘆いた女が、見せしめに処断されたのだと言っ。

立て続けの戦勝は大きな富をもたらしたはずだが、拙速にすぎたそれは失ったものの大きさのみを民の眼に焼きつけているようだ。

閉ざされた家々の鎧戸の中では、困惑と悲嘆と怨嗟が渦巻いている。

そして戦地より帰還した私を迎えたのは、空ろな賛美の声。

“青藍の戦乙女よ！” “我らが名将よ！！” “王の猛き剣よ！”

口ぐちに言えど、その声には侮蔑にも似た冷たさが宿っている。私がよく知っている声。人あらざる者に向ける、恐怖と嫌悪の混じった声だ。

そんなものはどうでも良かった。実際に三つの戦で自分がどれほど殺したかなど覚えてもいない。

何より私を落胆させたのは、彼の出迎えがなかったことだ。おそらく、王は歌姫につきっきりでいるのだろうが。

溜息を飲み込む。かつてはささいな功を成すたびに「よくやった」と髪を撫でてくれた手が、いまはもうこんなに遠い。

（私の成したことに、意味はあったのだろうか？）

王城の自室に戻り、久方ぶりに鎧を外した。

冬の近づくこの地で、金属の鎧はひどく冷たい。あるいはこの冷た

さは私自身から滲み出たものかもしれないと自嘲した時、ふと部屋の扉が叩かれる音をきいた。

「何事か。」

顔を向けないまま問う。外した剣帯から少しだけ剣を引き抜く。幾度血に塗れても、濯ぎ清めた剣は何度でも曇りない白銀を取り戻す。

「……………」

扉の向こうから、躊躇いの気配。

問いなおすのは少々面倒な気分だった。私も疲れている。

抜剣。鋭い金属の音に驚いたのか、ようやく相手が口を開いた。

「あの、夜分に申し訳ありません、わっ、わたしはフレイア様の使いで……………」

細い女官の声をききながら、私は、ああ、軍装を解いてよかったなとぼんやり思った。

彼女の身边に剣を持ち込んでしまえば、今の私はなにをするかわからない。

【冬の娘】 - 7 病身の王都（後書き）

なんだか毎回投稿する量がまちまちな気が…  
でもきりが悪いのもなあ。

【冬の娘】 - 8 薄紅

「お久しゅうございます、ね。イルヴァ様……」

寝台に身を横たえたまま微笑んだ彼女は、ひどく儚げだった。

戦地を転々とし王城へ戻れなかったのはお前の所為だと、そんな言葉で封じ込めてしまうほど。

「…お加減はいかがですか。フレイア殿。」

言わずもがなのことを淡々と問う。それくらいしか、私には次ぐ言葉がない。

その言葉に、歌姫はほわりと微笑んだ。微かに上気する頬。夜にも関わらず唇にさした薄紅は、血色の悪さを誤魔化すためだろう。だから、私は小鳥のような声が、甘く優しい虚構を紡ぐことを予想した、のに。

「もう、今年の冬は越せないでしょうね。」

返ってきたのは、凜とした断定だった。

思わず眼を見開いた私に、歌姫は微かに首を傾げ、苦笑した。

「そのような……」

「わかっています。自分の身体ですもの。むしろ、今までよくもつたと。」

吐息に掠れながらもその声の透明さは失われない。この王国――と謳われた歌姫の声。

「そのような、気の弱いことを。

きっとすぐに快くなりま<sup>よ</sup>す。…今も、陛下が様々な治癒の術を探しておいででしょう。」

そのために私は血を浴び、傷を負い、戦地を駆けずり回ったのだと歌姫への憐みが、言いようのない苛立ちに変わってゆく。

「……随分と、歌も歌えていません。」

その細い喉を見る。呼気を歌として奏でる至上の楽器。剣などなくとも、この手で簡単に、へし折れそうな

…

「陛下に、何も返せない。

こんなわたしがいる意味は、あるのでしょうか？」

続いた言葉に、私は震える手を力の限り握りしめた。

「あります。何故なら陛下はあなたを未だ必要としている。」

それだけは真実だった。彼が、狂うほどに乞う存在。だからこそ私は、目の前の少女を傷つけられない。彼に嫌われるのが怖いから。

「……お優しいイルヴァ様。」

ぽつり、呟かれた言葉は微かな哀しみの色を帯びていた。

「…… 申し訳ありません、戦地より戻ったばかりのあなたに、こんな弱音など。」

末尾に咳がかぶる。苦しげな様子に、私は彼女に背を向けた。

「長居いたしてしまったようですね。私のように外から冬の冷気を連れてくるものはお体に障りましょう。」

今夜はこれにて。どうぞ、ご自愛下さいますよう。」

扉の横に控えていた侍女に目線で水差しをさし、持っていくように促したところで、咳にやや乱れた彼女の声が追ってきた。

「あり、がとう、イルヴァ様……っ、ごめんなさい……  
わたし、わたしっ、もう一度、あなた、の……っ」

扉を閉める。

握りしめた手のひらには、血が滲んでいた。

【冬の娘】 - 8 薄紅（後書き）

章分けなどしていなかったなので毎回サブタイに迷います…

【冬の娘】  
- 9  
初雪と断絶

ふと、眼を覚ました。

窓の外は奇妙に薄暗い。未明にしては、仄明いのだ。

二度目の瞬きで、私は薄闇にちらちらと降る白い輝きに気付いた。

雪だ。今年初めての雪。

例年よりは幾分遅い。けれど。

( ついに )

人々は、知るだろう。本格的な冬の訪れを。

そして何よりそれを恐れていた彼は

「イルヴァ。」

小さな声に、私は跳ね起きた。

幻聴だと思うわけもない。扉越しの囁きだろうと、私が彼の声を選べるものか！

「アル!？」

履物に足をつっこむことすらせず、裸足のまま扉へ駆け寄る。口から漏れ出たのは、本当に久しぶりの彼の愛称。幼いころは、私にだけ許されていた呼び名。

重いオーク櫥の扉を開ければ、そこにはたして赤い色彩がいた。暗がりには沈み込むような朱色の髪。常に強い光を放っていた赤金の瞳は、今は俯きまるで今にも消えそうな蠟燭の灯りのようにゆらめいている。

父王の崩御の際にも見せたことのない憔悴しきった様子。

「アル、どうぞ、中へ。」

今日は冷えます、という言葉を読み込んで、私は彼を部屋の中へいざなった。

彼も私も、薄い夜着のままだ。

暖炉へ火を灯そうと彼に背を向けたのを遮るように、彼は再び

「イルヴァ」

と私の名を呼んだ。

なんの感情もこもらない、どんな声をあげていいのかわからない、泣けない子供の声。

「はい、アル。私はここに。」

ここにいます、あなたの傍に。あなたの手の届く傍に！

私は彼に寄り添うと、柔らかな長椅子へ腰かけさせた。長身が沈み込む。頭ひとつ分あいてしまった身長も、座れば少しは差が縮まる。できたら、心の距離も縮まってほしい。

しばらくは無言が続いた。

身を切るような冷えた静謐。はらはら降る初雪の音すらきこえるような静寂の中で、私が微かに震えた時。

「フレイアに、会ったそうだな……」

口に出された名に、私は小さく頷く。動揺などない。はじめから分かっていたことだ。

「はい。」

「あれは、なんと。」

「今もわたしがあるのは陛下のおかげです」と。

自分の死期をはっきりと悟っていた歌姫。

その言を、私は曲解して伝えた。

私が口にしたのは真実ではなく、彼の為の言葉だった。

彼は吐息を抑えるように唇を噛んだ。

赤金の瞳が瞼に隠される。

狂気も、焦燥も、一時隠される。それでもその胸の内で渦巻いているだろう苦悩を鎮めたくて、私は続けた。

「……変わリませんね。」

彼女は      変わらず、美しいのですね。」

ぽつり、と。

今度は本心からの言葉だった。病に苦しみ、痩せ衰え、けれど確かに彼女は美しい。

その言葉に、彼は眼を開いた。

ふ、と淡く笑う。たとえ少し苦しげでも、哀しみをたたえていても、それは久方ぶりの穏やかな  
私に向けられた笑顔だった。

「アル……」

痩せて鋭さを増した貌を見上げる。冷えきった部屋の中。

今なら、今なら彼の手を取ることできるかもしれない。かつて彼が私に差し出してくれたようには温かくはなくとも、それでも

…

「歌ってくれ、イルヴァ。」

しかしそんな穏やかな空気も、次に彼の発した言葉によって砕け散った。

身体が凍りつくのが分かる。

「……ア、ル」

「歌ってくれないか？イルヴァ。」

変わらず穏やかな声。愛しい愛しい声。それが、胸に突き刺さるほど痛い。  
辛い。  
苦しい。

「でき……ません……」

そう答えることしかできないことが。

「イルヴア？」

尋常でない私の様子に気づいたのか、彼が困惑の声をあげる。

初めての拒絶。彼と出会って十年間。初めて、彼の要求に応えられない。

「歌え、ません……私、わたし、は……」

だって、私は魔女なのです。忌まわしい言霊使いなのです！

ただの人でさえ人の心を揺り動かすことのできる“歌”。そんなものを言霊の魔女たる私が歌ってしまえば、どうなることでしょう。

それは絶対の禁忌。純血の異形たる父祖すら怖れた絶対の理。歌えない、歌ってはならない、魔女はあな<sup>わたし</sup>たの心を慰めることすらできない。

「ごめん、なさい……！」

「イルヴァ。」

聞き苦しく掠れた声を遮ったのは、私の名だった。  
続く、嘆息。

「もういい。」

そして、息の根を止めるような一言。  
冷たく硬質な狂王の声。寒々しいこの部屋よりも冷えた、私をあの  
雪の原に放り出す声。

「ッ、陛下……！」

彼が立ち上がり、背を向ける。私は動くこともできず、掠れた声は  
叫びにもならない。

「陛下、アルヴィド、待って……っ

ッ『アル』……！」

言葉は、重たい扉に遮られ、消えた。



【冬の娘】 - 10 剣と言霊

国王が全ての将官と重臣を招集したのはその日の昼だった。  
石造りの広間に君臨する赤。

アルヴィド・マグヌス・ティセリウス。

北の宝冠を戴くだけでなく、今や彼は教皇の錫杖を持ち、南の真珠の鏤められた帯を付け、東の玉鋼の剣を帯びている。

纏う豪華な王衣の真紅は滅ぼした国々の血の色だろうか。厳然たる王者の姿。

それでもその中で最も眼を引くのは、彼自身の炯炯<sup>けいけい</sup>たる赤金の双眸だった。

知性に裏打ちされた狂気の輝き。

「南のエルス、西のラヴェスタ、東のオースティン。  
大陸の全ては私の前に膝を屈した。」

厳寒の大气に響き渡る言葉。誰をも平伏させる威力を持った、それはまるで言霊。

しわぶき一つ聞こえぬ静寂の中、そして彼は淡々とその一言を口にした。

「次は外<sup>と</sup>つ国だ。」

“海の彼方へ。”

その言葉に、流石に居並ぶ人々の間にざわめきが走った。

続けざまの大戦、それとて暴走に近い無茶なものあったというのに、今、彼が口にしたのは間違いなく狂気の沙汰だ。

“賢王”たる彼が決して口にしてはいけな一言。愚かな“狂王”の証明。

……そう。王の狂気に、今の不安定な状況に薄々気づいていた大臣連中も高を括っていたのだ。いくら拡大戦争が行われようと、それはこの大陸内で終わることだろうと。

思いつきもしなかった。海の彼方の事など。

それは、私も同じ。                    いや、この場で一番動揺しているのは、私。

（海の方こうへ                    ）

吐息が止まる。

私は、あなたと同じ大地に立つことすらできなくなるのですか？  
あなたの狂気は、あなたの歌姫への想いはこの大陸にすら収まりきらず、海をも越えるというのですか？

「陛下、それはあまりにも無茶な……！」

言い掛けた父王の代からの重臣      彼の家庭教師を務めたこと  
もある老人は、しかし彼の一瞥のみで呼気ごと言葉を飲み込んだ。

他の者として同じようなものだ。それぞれ横に立つ者と囁き合えど、  
誰も真っ向から王に対して意見などできはしない。

そしてそのざわめきすら、すぐに彼の一言によって殺される。

「將軍。 “ 青藍の戦乙女 ” よ。」

冷たい声が降る。私の名さえ呼ばず、私を呼ぶ。

ただ一人、広間で沈黙を守ったままの私は彼の前に進み出で、跪い  
た。

「行け。此度も先陣を切るのは、お前だ。」

事務的な命令。それに

「はい、ティセリウス陛下。」

そう、声が返ることを誰もが予想しただろう。勿論、目  
の前の王を含めて、だ。

だから。

「いいえ、ティセリウス陛下。  
その御命令には従いかねます。」

俯いたまま、それでもはつきりと口にした私に、周囲がざわめきを通り越して啞然とするのを私は感じた。  
そして、王の表情に初めて苦々しい色が混じるのも。

「…… 將軍。」

お前は、この三つの戦で最も功を立てた。だからこそ、一度は赦そう。

外つ国へ渡れ。彼の国を我が物とせよ。」

「あの歌姫の為にですか。」

「イルヴァー!!」

初めて、この広間で私の名前を呼んでくれた。  
怒声よりもその事実涙を堪えながら、私は俯いたまま続ける。

「お聞かせ下さい。海を越えた外つ国へ攻め入る理由。  
エルスのような豊かな土地もなく、ラヴェスタのような遺恨と威もなく、オースティンのような利もない。ほとんど知りもしない国へ攻め入る理由を。」

歌姫の延命の術を探すという理由以外で!!

『賢王アルヴィド』よー！」

届いて、届いて、私の言葉。私の言霊！！  
かえってきて、私の王様、私の……！

「知れたことを……！フレイアの命以上に大切なものなど、あるものか……！」

……アル。

ああ。嗚呼。

彼の狂気は、恋慕は、私の懇願の言霊など跳ね返して。

「……て、しまった……っ」  
無様に掠れた声が零れた。

「あなたは……狂われてしまったのですね……アルヴィド……  
あの、歌姫の所為で……ッ」

「ツフレイアを侮辱するか……！赦さんぞイルヴァ……！」

「歌姫フレイア　　全てはあの娘が……ッ……！」

「イルヴァー!!」

私の怨嗟がこもった声に、彼が激昂する。  
顔をあげ、立ち上がり今にも抜剣しようとする彼を藍色の双眸にしっかりと映すと、私は叫んだ。

『動くな！アルヴィド・マグヌス・ティセリウス!!』

静止の言霊。歌姫への憎悪、報われぬ哀惜、私から“アル”を奪った狂王への怒り全てを込めて。  
忌まわしき呪いの言霊!!

それでも。

「…ッ!？」

化け、物…。おのれ、忌々しい、魔女め……ッ!!」

それでも。

「……………あなたにだけ、は、そう呼ばれたくなかったな。」

我ながら女々しい自嘲。

唇の端を無理矢理に吊りあげた私は、彼に背を向けると抜剣した。

彼が私のためにあつらえた剣。

私が彼と彼の王国のために捧げた剣。

人殺しの道具。

「歌姫に死を！！」

城中に響き渡るほどの号令を。  
言霊など使わずとも、私の行く先を阻む近衛など誰一人として存在しなかった。

【冬の娘】 - 11 歌姫の微笑

そして辿り着いた歌姫の離れ。

王城の庭園を臨む位置に造られたそこからは、雪に埋もれてゆく花々がよく見えた。戦続きの中、庭師も庭に硝子の天蓋をかけることを忘れたのだろうか。

まるでこの先の彼女の運命を眼にしているようだ。

口角が醜く上がる。

雪に殺される花。

私に殺される彼女。

その、夢を覚ますように、私は冷えた空気に微かな声が響くのをきいた。

掠れて、それでも透明な。雪に埋もれようとする世界の中で、唯一温かく柔らかく咲き誇るような旋律。

言葉はすでになく“La”の音だけで構成されたそれは、それでも人の心を揺り動かす。

歌。

彼を慰め、彼を狂わせた、歌姫フレイアの歌！！

旋律を辿り、私は駆ける。一步ごとに明瞭さを増し、音勢を増し、近づいてゆく歌声。近づいてくる彼女。

一際精緻な、美しい蔦の彫り物が施された扉を、叩き壊す勢いで乱暴に開け放った。

冬と私の冷気が容赦なく押し寄せ、寝台の天蓋幕を揺らす。

その、白く薄い紗幕の向こうに

「……イルヴア様」

歌が止む。

彼女は、いた。

変わらぬ薄紅色の髪を綺麗に梳かして、小さな唇に花弁の色を乗せて。

精緻な刺繍を施されたクッションに寄り掛かるように、それでもしっかりと半身を起こしこちらを見て

……  
心底うれしそうに、笑うのだ。

不治の病に冒された身でありながら、そして今、明確な殺意と凶器を手にした人間に相對して。

どうして、そんな風に在れるのか。

怒りのあまり眩暈すらした。彼女の美しさは私に自分の醜さばかりを見せつける。

「  
宮廷歌手フレイア。

王を惑わしこの国に混乱をもたらした罪により、お前を処刑する

！！」

「イルヴァ様……」

私の名を呼ぶ、その声さえ歌うようだ。

私には歌えない歌で、彼に愛された少女。

長い髪、柔らかな身体、清い心、春の微笑。私にはないものを全て  
持っていた少女。

たった一つの、私の欲しかった愛<sup>もの</sup>さえ手に入れた女。

軍靴の音を響かせて彼女に歩み寄る間にも、彼女の双眸に恐怖はな  
い。困惑もない。

ただ、微笑だけがある。

それが、不愉快だ。

（泣き叫べばいい。）

泣いて、喚いて、無様に逃げ回って、へつらい懇願して。

花のような姿は上辺だけで、本当は醜い人間なのだと。完璧な者な  
どいないのだと、示して欲しかった。本当は彼に愛される価値など  
ないのだと。

だから、剣を振り上げた刹那、彼女が唇を開いたのに、刃を止めた  
のだ。

命乞いの言葉の一つも口にしてくれるのではないかと。

「……ずっと、苦しかったのです。」

「……？」

付き付けた刃の先で、喉が苦しげに震える。

潤んだ瞳は熱のためか、他に理由にあるのか、私にはわからない。

「くるしく、て、息をするのも苦しくて、ひどく熱く、っ凍えるように寒く、

むねが、胸の奥が痛くて痛くてたまらなくて

「！！」

これは、確か泣き言だ。

歌姫フレイアの、おそらく誰にも漏らしたことのない弱い部分。けれど、それは私が望んだ醜さとはほど遠く、ただ、ただ痛々しいだけで、そして

「わたしを、救って下さるのですね、イルヴァ様。」

ふわり、上気した頬での微笑。

それは、私の罪を雪ぐ<sup>そそ</sup>ためのものであると、いかに私が愚かであれ理解できることで。

「……ッ！！」

一息に、私はその華奢な喉首を剣で刺し貫いた。

首を落とすには忍びなく、一気に引き抜けば出血で彼女は即座に死に至るだろう。病の苦しみと死の冷たさでは、どちらが辛いかかわらぬが。

綺麗な綺麗なフレイア、優しいフレイア。

彼が大切にした、彼が愛した……

（ごめんなさい、ごめんなさい、アルが大事にした人だったのに！）

柄を握る手に震えるほど力を込めた刹那、ふと、喉首に突き立った刀身に白い手が伸びた。

眼を見開く。

変わらぬ薄紅色の唇で、彼女は困ったように囁いた。声は剣に縫いとめられてでないから、唇の形だけで

“泣かないで”

と。

そして私は、初めて自分が涙を流していることに気付く。涙など、とうに凍りついてしまったかと思っていたのに。

たおやかな手が刀身から離れ、私の頬に触れた。

温かい指先。涙が溢れる。

青翠色の双眸に私を映したまま、彼女は微笑<sup>わら</sup>った。

“ ありがとう ”

ああ、ああ、嗚呼！！

『 おやすみなさい、フレイア。 』

せめて、苦しくないように。

私の言霊にフレイアは安らかに眼を閉じた。

そして、引き抜く剣。

しぶく鮮血。彼の髪にも似た鮮やかな赤。

彼女の白いドレスを彼の色に染めて、私の藍色の鎧を醜い黒に染めて。

彼女の亡骸が完全に雪と同じ温度になるまで、私はその場に座り込

んでいた。

【冬の娘】 - 12 雪の牢獄の魔女

寒さには、慣れている。

山間の小さな村の中。

小さな石造りの家はそのまま雪の冷たさを伝えてきたし、排除すべき異端である私達に満足な薪や毛皮、食糧が与えられることはなかった。共に暮らした薄い血縁の者は、私を抱きしめることもなかった。

常に飢えていて寒かった。たまに迷い込んだ狼を殺して皮を剥ぎ、食べた。彼に会うまでの十年間、ずっとそうして生きてきた。

彼に会ってからの十年間がむしる異常だったのだ。隙間風の入らない部屋、上等な衣服、温かく生臭くない食事。

彼の密命で北方部隊に紛れ込んだこともある。鎧の冷たさ、かじかむ手で振るう剣。

そんなもの辛くもなともなかった。

初めて人を殺したあの日、あの雪の原で独り座り込んでいたのを思えば、そんなもの。

…寒さには慣れてしまえる。手足の動きと引き換えに。手足の感覚と引き換えに。

いずれそれが進めば手足を失うはめになるかもしれないが。

（でも、それが何だっていうの？）

冷たさが過ぎて突き刺すような痛みを覚える身体を他人事のように眺めながら、私は座り込んでいた。

陰鬱な灰色の石造りの部屋。ざらつく石は雪のように冷たく、眼の前にはさらに冷たい金属の格子。

それは見慣れた王城の牢獄だった。私自身、幾人もの裏切り者や盗賊達をこの檻の中に追いやったことがある。そして、今度は私が閉じ込められる側だ。

その末路など知りすぎるほど知っている。

鎧も剣も取り上げられ、彼女の血を浴びた衣のまま私はここにいる。

“ 歌姫を殺した魔女 ”

まったくもって申し開きの仕様のない罪状によって、私は大罪人としてここにいる。

ならば、この手足が凍り腐れ落ちようと、何の意味があるだろう？ もはや彼の為に剣を振るうこともないこの両手足に、どれほどの価値がある？

（ ああ、もしかしたら、火刑台に張り付けるのに手足がないのは不便かもしれない。）

浮かんだのはそんなことくらいだった。

それでも、手のひらをわずかに開閉させる気にはなった。最後まで

彼の手を煩わせるのも申し訳がない。

そしてその微かな動作に、見張りの兵がびくりと身体を震わせるのが視界の端に映った。かつて私が率いたこともあったかも知れない、若い兵士。それでも、今はもうそんなことはどうでもいい。注がれる恐怖の視線とて当然のこと。

戦に名を馳せた人殺しにして王の最大の不興を被った大罪人、そして異能の力を持った魔女。

温かかった彼女の血はどす黒く変色し、罪と共にこの身に纏わりついている。

ぼんやりと、唯一の明かり取りである石牢の天窓を見上げた。分厚い雪雲に覆われた曇天に、太陽の姿は見えない。

光の代わりに、はらはらりと白い氷の結晶が舞い込んできた。

雪だ。嗚呼、雪が降る。冷たい雪が降る。  
彼が忌み、彼女を殺した、私の季節。

「つぶ、ふふ…ふふふ……あはははは……！」

あの雪の原で抱えていた以上の絶望を抱いて、私は笑った。

もう、手を取ってくれる人はいない。涙を零させてくれる人はいな

い。

彼が私をこの極寒の地へ追いやったのだ。

「あは、は、は……っは

……！」

零れ続ける無様な笑声。

兵士達の怯える気配。魔女という囁き声。そんなものはもうどこでもいい。

罅割れた唇から血が流れても、私の瞳から涙が流れることはなかった。

【冬の娘】 - 12 雪の牢獄の魔女（後書き）

あと一話でイルヴァ編、【冬の娘】は完結です。

## 【冬の娘】 - 終 藍の瞳の魔女は嘆く

そして一面真つ白い雪の中、私は裸足で立つ。

雪が降っていた。止むことなど知らぬような深々たる雪。

真つ白い光景に真つ白い装束、真つ白い氷が降る中で、私の冷たい藍色の色彩はさぞ毒々しく映えるに違いない。

血の染みた装束は取り上げられた。温情などではない。歌姫の血の一滴たりとて、彼は人に渡したくなかったというだけ。

彼女の亡骸は今城の庭園に安置され、教皇冠を得た彼によって聖別されるのを待っているという。

花が咲き乱れる其処が丸々彼女の墓所であり、彼女は死して“聖女”となり、私は“魔女”として処刑される。なるほど、『かくあれかしamen』。相応しい処遇だ。

両手首に嵌められた鎖は冷たく重く、むりやり外そうとすれば確実に私の皮を剥ぐだろう。もとよりそんな真似をするつもりもないが。

設えられた処刑台に、立つ。

私に下されたのは火刑ではなく斬首の刑であるらしい。

温情などではない。私など、凍えて終わるのがお似合いということか。私が何より雪の冷たさを厭うことを、彼はよく知っていたはずだから。

「これより“魔女イルヴァ”。  
忌まわしい異能の者、王に刃向かい歌姫を弑した大逆人の処刑を  
執り行う。」

金細工の鎧を付けた巨漢が宣言する。教皇領にあつたという、聖別  
された鎧か。“魔女”である私を殺すために、わざわざ引つ張り出  
してきたらしい。  
そんなもの、単にそれらしく贅をこらしただけの鎧に過ぎないとい  
うのに。

釈明などありはしない。

私は無言で歩を進める。白銀の剣　やはり聖印が刻まれている  
を携えた処刑人の前、処刑台の中央へ。  
“彼”が最もよく見える位置へ。

白一色の世界で、彼の赤は鮮やかに映えた。  
思い出すのはあの日の光景。白く埋もれた雪の原で、唯一の温かい  
色彩。命の色。

処刑台を取り囲む兵も、ざわめく民衆も、みな雪の白に埋もれる。  
在るのは、ただ、彼の赤。

バルコニー  
露台に設えられた玉座の上。かつて私が侍っていたその斜め後ろに  
は、白銀の鎧の兵士を従えている。思い知る。私の居場所は、もう  
ない。

私の視線に気づいたのか、彼は玉座より立ちあがると、歩を進め、

バルコニーの手摺に近づいた。  
そして、赤金の双眸で確かに私を見据えると、彼は朗々たる声で命じたのだ。

「魔女に死を！！」

振り下ろされる、白銀の刃。

そして、白い世界に、一際鮮やかな赤い華が咲いて

……

咲いて。

私は、それを見ていることしか出来なくて。

でも、おかしい。私は、ただ彼しか見ていなかったのに。忌まわしい私自身など欠片も視界にいれていなかったのに。

なんで、わたしには赤い華がみえるの？

なんで、わたしの身体には刃が突き立っていないの？

何で、なんで、あの華は、彼を、裂いて、咲いているの？

彼の身体に刃を突き立てたあの兵士は何！！？

兵士達から一斉に上がる怒号のような関の声。  
それを裂いて、彼の心臓に剣を突き立てた無礼者の声が響く。

「狂王に死を！！」

ああ、世界が揺れる、歪む。

なに？これはなに？

赤い、赤い色。流されるべきではない至尊の血が流れている。彼が傷ついている。あつてはならないことだ。赦されてはならないことだ！ああ、なぜ私はあそこにいない！？彼の傍にいない！？彼を守ることが、私の役目だったというのに！！

「ああ、おいたわしい、イルヴァ様……」

聖印の鎧の男が、何事が言っている。でも、そんなことはどうでもいい。

「なに、これはなんなの。私、私の処刑を、アル、陛下、は……！！」

途切れ途切れの言葉の合間にも、男は馴れ馴れしい仕草で私の両手首に嵌った枷を取り払おうとする。彼が、私に課したものなのに。

「ご安心召されませ。皆、知っているのです。

この場で誰が一番死の報いを受けるべきか。

女に狂い、狂気に墜ち、政道を外れ、三度の大战を引き起こし、忠臣であつた貴殿にこのような汚名を着せ殺そうとした。

果たして、真に罪深いのは何者か！」

男が芝居がかつた仕草で広場の周囲を指し示す。

頭が痛い。満ち満ちる負の感情。

最初に白銀の兵が口にした不敬な言葉は、大合唱になり、街中に響いていた。

「死を！！」「狂王に死を！！」「狂える王に死を！！」

「彼こそ真の罪人だ！！」

叫ぶ、人々。それこそまるで狂気に冒されたように。

そして、私は確かに見た。バルコニーに掲げられた、彼の

……

“首”。

「ア、 あ、 ああ、 アアア嗚呼ああアアアア・・・!!」

喉からほとばしる異音が己の叫びだと、最初は気付かなかった。  
口々に勝手なことをほざく塵芥共の讒言を引き裂き、天へ昇る慟哭。  
私の絶叫。

（ アル、 アル、 アル、 アル、 アルヴィド!! ）

どうして、 どうして死んでしまったの! どうして殺されなければならなかったの!  
どうして殺したの!!

彼がいなくなったら、私は本当にひとりぼっちだ。  
誰にも愛されることなく、顧みられることなく、この雪の原にひとりぼっちだ。

（ いや、 いや、 いや、 独りはもうイヤ!! ）

私の王様、私のアル。  
撫でてくれた。ほめてくれた。私の手を引いてくれた。一緒に来い  
と言ってくれたのに！！

赦さない。

手枷を奪い取った男を力任せに薙ぎ倒し、私は再び吠えた。  
報いを受けろ、罪人共。アルに生かされていた、アルに護られてい  
ただけの存在のくせに、そのアルを殺した報いを受けるがいい。私  
からアルを奪った、その罪の重さを思い知るがいい！！

絶叫に切り裂かれ静寂を取り戻した城に、街に、私は宣言する。  
私の全ての絶望をこめた禍言霊を。  
響け、魔女の呪い。

『 この王国に死を！！ 』

……  
そして、私は歌う。初めて歌う。  
言霊使い最大の禁忌。最悪の呪い。

かつて歌姫は歌った。全てを祝福する春の歌を。愛の歌を。  
花よ降れ、花よ咲け、唇に微笑を、心に平穩を、そして人に愛しむ  
べき生を、と。

魔女<sup>わたし</sup>は謡う。全てを凍てつかせる冬の歌を。嘆きの歌を。  
雪よ降れ、空よ裂けろ、唇に絶叫を、心に絶望を、そして人に哀れ  
な死を、と。

空が白く渦巻き、凄まじい吹雪が押し寄せる。  
人々の悲鳴すら遮って、逃げようとする足を捕らえ、鼓動を止める。

それは、王城を、街を、国を全て包み込んで。

白く埋もれる。

歌姫の亡骸を抱いたままの庭園も、鮮やかな彼の赤も全て。

白が降り積もれば降り積もるほど、私の嘆きはいや増し、絶望は限  
りなく。涙は凍りつき流れない。

もはやこの国に春は訪れないだろう。  
そして、その先の夏もまた。

自身の手で永遠に亡くしたものを思って、私はまた叫んだ。

（ 触れて                      ただふれてほしかったの、その大きな温かな  
手で。

誰にも慈しまれたことなどなかった、ひとりぼっちで取り残された。  
守ってなんて言わないから。

ただ、撫でて。 ほめて。

愛して！！

）

冷たい冷たい雪の原に、ひとり。

私の嘆きは、私の呪いは

私の涙は、溶けない。

N  
e  
x  
t  
『  
春の女  
』

&

E  
n  
d

【冬の娘】 - 終 藍の瞳の魔女は嘆く（後書き）

これにて最も吟遊詩人の語りに近いお話、全ての根幹となるショートカット一途少女（雪と孤独がトラウマ）イルヴァ編は終わりです。

なんとも救いのないお話ですが、これはイルヴァ一人の目線から見たのお話。

麗しい歌姫や狂った王は一体何を思っていたのか？

：イルヴァはイルヴァで最後見ての通り、ただ可哀想というには実は割かし人間的に問題があるような気がします。他二人は…うん、まあ、読んでいただければわかるかと。

というわけで、次からはフレイア編【春の女】です。

他二人目線を読んでからだと言後感が大幅に変わることが当初の目標。

お付き合いいただければ幸いです。

【春の女】 - 1 薄紅の少女

さわらないで、汚らわしい。生温かい眼差しも誘うような腕も気持ち悪いだけ。

わたしに触れるな、わたしを見るな。その欲望でわたしを穢さないで。

守られなければ生きられないことくらい知っている。それでも。死に絶えてしまえ、わたしを花と呼んだ全て。

芳春：花色の唇の女は歌う

わたしの母は花売りだった。

そしてその娘であるわたしは、“花売りの娘”だ。

“色を売る” “春をひさぐ” “花を売る”。

どう言い方を変えてもやることは同じ。足を開いて糧を得る、それだけ。

場末の娼婦が望まぬ子を身籠った。そんなことはよくある話。

女はあらゆる手を使って腹の中の子を墮ろそうとした。それもまた当たり前の話。

産んだところで助けしてくれる夫もなく、むしろそれは男を遠ざける。そもそも産んではならないのが娼館の掟。本来なら孕んだ時点で折檻が待っている。

女も多分に漏れず腹の中の子のために随分と酷い目にあつた。

毒薬とほとんど変わらぬ墮胎薬を飲み、冷たい川に半日身を浸し、もつと單純に腹部を殴打し。

それでも、産み月までしぶとく腹の子は流れなかった。

墮胎術を教える流浪民も娼館の女将も、女自身もついには諦め、とりあえず産み落とした後、子を絞め殺すか売り飛ばすか考えようと決めた。

そして、春。

散々腹の中で受けた仕打ちに報復するように、母を殺して産まれたのがわたしだった。

産褥で母を死にいたらしめたわたしは、結局殺されることはなかった。

母を　　商売道具の女を一つ失つた女将は、赤子をただ殺すだけでは採算が取れないと計算したのだ。地味でぱつとしない母から産まれたわたしは、稀有な薄紅色の髪を持っていた。

女将はわたしを売り付ける　　わたしの身が金になった、初めての瞬間だ　　もつとも、売ると言っても教会やまっとうな里親になど売るわけがない。

蛙の子は蛙。花売りの娘は花売り。

わたしが買われたのは、やはり娼館だった。場末の、日銭を稼ぐために厚化粧でこけた頬を誤魔化す女達が相手をするような物よりはるかに上等とされる館。それでも、行われることなど本質的には同

じ。

赤子のうちに顔形の美醜などそうそう分らない。わたしが相場よりも少しだけ高い値段で売れたのは、花のような色をしたわたしの髪のおかげだった。

「成長して不細工だったら、その髪を切って鬘かつらをこさえて売ろうと思っていたんだよ。」

数年後、その娼館の主はそう言って笑った。このくらい強欲で薄情でなければこんな商売はやれないのだろう、と感心したのを覚えている。

わたしが育ったそこは、まさしく娼“館”という呼称に偽りのない建物だった。

貴族が通うのに不満を覚えない豪奢な屋敷。広大な庭には蔓薔薇のアーチが飾られ、女達の香水とまじわり甘い香りがただよう。

物心つき顔立ちもその将来の展望が見えてくるようになって、わたしの待遇はどんどんとよくなっていた。

「なんて愛らしい」「可愛い子だね」「まるで妖精さん」「おいで、お菓子をあげよう」

降ってくるそんな声と伸ばされる腕。

本能のままに微笑を浮かべながら、その頃にはわたしは悟っていた。わたしのこの容姿は、自分を生かす術になる。

そして、この容姿だけがわたしが生かされる唯一の理由。

娼館の主も娼婦たちも、もちろんその客たちもわたしは大嫌いだった。

わたしを商品としてしか見ていない強欲な老人。訪なう客を心中で嘲笑い嫌悪しつつ、彼らの袖を引きわたしの容姿を妬む女達。そして欲望のためだけに此処を訪れ、彼女達に触れわたしに目を細める男共。

ああ、汚らわしい、汚らわしい。

何が“花々の咲き乱れる園”だ。誰が“春の貴婦人”だ。どれだけ言葉を繕い外面を絹や宝石で飾り、詩や会話に教養をこめようと、欲しているものは動物と同じじゃないか。

さらに性質が悪いのは、動物と同じ行為を求めるにもかかわらずその先の生殖は望まないということだ。

子を望むだけ、春にだけ発情するだけ、動物の方がまだましだと思えた。

欲望のための園、欲望のための女達。一時の気紛れで愛<sup>め</sup>で、手折られる花。

そこに咲く花の一つとなる近い未来を思うだけで、わたしは鳥肌がたった。

孕みたくない。

自分の胎の中に異物が発生し、それがわたしの血肉と生気を吸って膨張し蠢き他人になつていくなど吐き気がする。

老いたくない。

醜く萎れ枯れた花の行く末などみなが知っている。ただ、無造作に屑籠へ放り棄てられるのだ。

触れられたくない！！

あんな汚れた手で。

そう、至上の美花と称された指折り

の娼婦が、瘡毒により手足を腐らせ、老婆よりも醜く萎れ苦しみに  
いて死んでいったのを眼にしたことがある。

生きながら腐臭を発し、美しいと褒め称えられた相貌を骸骨のよう  
にこけさせて、憐憫と嫌悪の眼差しを浴びながら、ああ、なんて無  
残な、なんて惨めな、なんて残酷な。

（ 枯らされた。殺された。その、汚れた手で！！ ）

その手が何時かわたしにも触れるということが、わたしは何よりも  
恐ろしかった。

【春の女】 - 1 薄紅の少女（後書き）

しよっぱなっから「みんなしねばいいのに」とかかっ飛ばしているフレイアさん（言ってるじゃない）。清纯派？なにそれ美味しいの？いやある意味乙女全開ではありますが。

まあピンク髪＋歌姫イコール電波というのは世間様のお約束なのでしかたがない。

要するにアレ、「男子って不潔だから嫌いよ！！」という小学生女子をえぐいトラウマで煮詰めた感じのがフレイアさん。瘡毒ってのはあれだ、いわゆる梅毒っていうか性病ね。

そんなわけで微妙に生々しい御伽噺、フレイア編始動です。

## 【春の女】 - 2 唄歌いカティア

飢えることもなく上等な衣を纏い微笑む日々。

必死で吐き気をこらえる、そんな日々に唯一わたしを救ってくれたのは、わたしより八つほど年上の少女の存在だった。

麦の色をした髪に、りんごのような頬。

決して器量はよくないが、闊達で明るい女の子。

娼館付きの医師であつた母と共に居着き、そしてその母が死に身寄りがなくなったその子は娼館の雑用係兼わたしの守り役となった。わたしを育てた、姉のような、母のような存在。

カティア。歌の上手い、歌を愛する少女だった。

手首に巻き付けた金色の小さな鐘は流浪の民である彼女の血族に伝わるもの。ぐずった時もわたしはその音色をきけば機嫌を直したし、彼女が歌い踊るときに鳴らすその鐘の陽気さは本当にわたしを元気づけた。

あの強欲な娼館の主が彼女に娼婦の役を割り振らなかつたのは、その身体に流浪民として追われた傷が残っている所為だと、女達の陰口から漏れ聞いた。けれどそんなことはどうでもいい。

大好きなカティア。優しい優しいカティア。

たまにお菓子にくすねてくれる、歌と踊りがとても上手な、でも叱る時はずっと怖い、わたしのカティア。

泣けば頬をぬぐってくれ、不安になれば抱きしめてくれた。母に抱

かれたことのないわたしは彼女に、抱きしめられることの柔らかさと温もりを教えられた。そして、歌の優しさも。

彼女のようになりたくて、彼女のように歌いたくて、わたしは歌を覚えた。

眠れない子をあやす歌、柵に入らない羊を追う歌、旅の空に自身を励ます歌、ひたすら陽気に踊るための歌、そして哀しい別れの歌。すぐにわたしはどんな歌も歌えるようになったけれど、たったひとつ、どうしても“愛の歌”だけは歌えなかった。

春に花開く乙女の恋の歌。貴方が恋しい、愛しい、と切なさや幸福感到に満たされて歌う歌。

わたしには歌えなかった。

この徒花の咲き乱れる庭では、愛など汚らわしいものにしか思えなかった。

わたしには、ただ彼女が大切だという気持ちだけで十分だったのだ。

「小鳥がね、何故鳴くか知っている？」

ある日、わたしの髪を機嫌よく梳かしながら、彼女は言った。

「あなたが好きよ、って鳴いてるのよ。」

わたしは目線だけで鳥籠を見た。わたしたち以外誰もいないテラスには、娼婦の誰かが気紛れで飼い始めた小鳥の鳥籠は置き去りになっていた。

虚空に向かって、それでも澄んだ声で囀る小鳥。その侘しい姿に眉を寄せたわたしに気付いたのか、彼女はふとわたしの耳元に唇を寄せると、囁いた。

「それからね、“自分はここにいる”、って鳴いているのよ。」

今でも覚えている、真剣な声。

思えば、彼女ら流浪の民が、そして彼女が歌と舞踊を殊更好むのは、そのためなのかもしれない。

土地も持たず、家ももたず、明日も知れず、それでも歌う。  
わたしたちは此処にいる！と。

その日彼女が教えてくれたことは、わたしの心の宝箱に大切に仕舞われた。

ただ彼女の真似をしたがっていただけのわたしが歌い続けようと決めたのは、その時だ。

歌う、歌い続ける。わたしは此処にいと高らかに。

なにより、自分のために。

歌が誰かの慰めになることは、よく知っている。わたしは彼女の歌に随分救われたから。

けれど、わたしの歌は自分のためのものだった。例え誰かに歌うとしても、それはカティアのためだけだった。

勝手に漏れ聴いた人がわたしの歌声を褒めちぎろうと、わたしはただ曖昧に微笑するだけだった。

そしてカティアを失ってから、わたしは本当に“誰かのために歌う”ということを忘れた。

彼女を失わせたのは、わたしの傲慢。わたしの幼稚さ。

林檎の木の枝の上で歌っていた彼女。

いつになく美しい、嬉しげな、そしてどこか切ない歌声。

彼女を探していたわたしは、そして見た。彼女の手の中にある花冠。庭園に咲き乱れる薔薇ではなく、野に咲く目立たないが愛らしい白と紅の花で編まれたそれ。

誰かからの贈り物だろうということはずぐ知れた。勿論、気取った娼館の客が持ってきたものであるわけもない。素朴だが美しいそれは彼女になによりも似合うだろうと思われた。

わたしは、彼女の手からそれを叩き落としたかった。

今になれば分かる。それは幼稚で醜い嫉妬であったのだと。

わたしの母、わたしの姉、わたしの家族、わたしのカティア！！

わたしには彼女だけだったのに、彼女がわたしの全てだったのに。彼女には、わたしが全てではなかったのだ！

だって、見たことがなかった。あんな夢見るような眼差し、物憂げな溜息。

わたしに見せるはずもなかった。恋する乙女表情。それは確かに美しく、同時にわたしの嫌悪を煽ってやまないものだった。

幼く愚かな自分には理解できない衝動のまま、カティアが危ないと止めるのも聞かずわたしは林檎の木をよじ登った。彼女に近づきたかった。自分の手で触れられる存在だと、遙か遠い存在ではないと確かめさせて欲しかった。

その花冠を叩き落としたかった。

柔らかく弱い髪が枝に絡み、伸びきらぬ手足がバランスを崩し。

結果、叩き落とされたのはわたしの身体だった。

ああ、あれほど危ないからダメ、とカティアが必死に叫んでいたのに。

落ちる刹那に見たのは、必死に手を伸ばすカティア、放り投げられ墜ちる花冠。

わたしは覚えている。その刹那、確かに自分が微笑<sup>わら</sup>ったことを。

…  
わたしが目を覚ましたのは、なんとそれから三日がたつてからだった。

春の若草がわたしを救った。頭部に負った傷は、髪に隠れてまったく見えない。

よかったと 見える位置に傷がつかないで本当に良かったと

泣く娼館の主に、わたしはカティアはどこかと尋ねた。

いつも目を覚ませばいるはずの彼女が、いない。これは相当怒っているのだろうか。前に彼女の一张羅を香水まみれにしてしまった時は、丸一日口をきいてくれなかった。

これから受けねばならない無言の怒りに思わずクッションを抱きしめたわたしに、主は不機嫌そうに言い捨てた。

『ああ、あの流浪民か。まったく、女として役立ちもしないのを温情で雇ってやれば、幼子の世話もできない役立たず。野蛮人の血統め！フレイアに万一のことがあったら縊り殺していたところだ！！結局、売り払ったところで碌なものにはならなかったしな。』

卓に乗せられた小さな小さな革袋を弄う。

ジャラリ、軽薄な音。ちっぽけで冷たい革袋。

いくら幼いわたしでも、悟らざるを得なかった。

あの、優しい彼女が。明るい彼女が。温かい彼女が。

そんな、そんなちっぽけで冷たいものになり替わってしまったのか

！！

自分の引き起こした取り返しのつかない現実には、わたしは泣くことも忘れてただ呆然としていた。

【春の女】 - 3 “青藍の戦乙女”

彼女がいなくなっても、季節は巡る。

やがてわたしの髪はさらに伸び、手足も伸びきり、胸はふくらむ。  
なめらかな曲線だけで構成された“女”の身体。

絹や宝石、何より花でわたしを飾り立て、満足そうに目を細めた老人は言う。

『そろそろ頃合いだな。』  
と。

貼りついた微笑の下でわたしは嘆息した。ついにこの時がきてしまったかと。

毎年春が来るのが厭わしかった。年を重ねるのが。それは成長であり老化でありどちらにしろわたしを絶望へ近づけるだけのものになさない。

花売りの娘。

自身を花に見立てて切り売りする生。

けれど、身の内の焦燥とは裏腹に、すぐにわたしが店に並ぶことはなかった。

「ああ、花のようなフレイア、私の自慢の子！お前なら幾らでも高く売れる。

売値はできるだけ高く吊り上げねばな、その美しさに見合うように！！」

その言葉の意味はすぐにわかった。  
産まれて十七回目の春、わたしは“歌姫”となった。

娼館育ちの過去も隠して、娼館の主子飼いの男女を養父母とし、歌を歌いながら北の王都へ向かう。

春の花祭の訪れと同時にあらわれ、微笑みを振り撒きながら、歌う。養父という名の男は口癖のように囁<sup>ささ</sup>った。

「美しいフレイア、お前のためなら男は幾らでも金や宝石や花を積み上げるだろう！

庶民や豪商どころではない、お前を眼にしたなら、大貴族や大司教この国の王だって、お前に愛を乞うだろうさ！」

どうでもいいと思った。貴族だろうが王だろうが平民だろうが聖職者だろうが、金さえ持っていれば同じ。

わたしを守り生かしてくれるなら同じだった。どうせその手の汚さには違いはない。  
けれど

「ああ、“賢王”アルヴィド陛下  
：

けど、あの王さまの傍には常にべつたりの女がいるんだろう？イルヴァだったかな？

“青藍<sup>せいらん</sup>の戦乙女”だかなんちゃら。女だてらに国一番の剣の使い手だとか。藍色の髪に瞳の、そりゃあ目の覚めるような美人らしいよ。陛下が殿下だったところからの付き合いで、今でも随分仲むつまじいらしいじゃないか。

流石に王さまは無理なんじゃないかねえ。」

何気ない女の一言。それに、男が不機嫌そうに続ける。

「ふん、青藍の戦乙女だと？所詮は剣を振り回す野蛮な女戦士だ。アマソネス  
おお、フレイア。この手のやわらかなこと、たおやかなこと！  
蝶だろうが小鳥だろうが王だろうが、その手を差し出されて口付け  
ずにいれる者があるものか！！」

男の賛美の言葉に、わたしは少し眉根を寄せて微笑んだ。

「お義父さま……」

いつもの困ったような、純粹さを装った、微笑。けれどわたしの内  
心はついぞないほどに荒れ狂っていた。

貴族だろうが平民だろうが屠殺屋だろうが異民族だろうがなんでも  
いい。  
けれど。

（イルヴァ

“青藍の戦乙女”。）

わたしは、初めて女というものに敵意を持った。

わたしには、この容姿と声しかないのに。か細い身体と媚びる微笑  
しかないのに。

彼女は、剣を振るい、どんな男よりも強い、どんな男も斬り殺せる  
力を持つ彼女は、それに加え人の口の端にのぼるほどの美しさも持  
っているという。

（……ずるい。）

わたしは端的にそう思った。会いもしない女に嫉妬するなど愚かに過ぎる。それでも。

「ほら、気にするなフレイア。

なに、お前の美しさに敵う女などいやしないさ。自信をお持ち。いつだって、女の勝敗はその“美しさ”で決まるんだ……!!」

お前なら、“歌姫”などでなく“王姫”にだってなれるさ

……

気持ち悪いだけの賛美の言葉も、今は心地よかった。

皆が褒め称える、やわらかな花色の髪をゆっくりと梳く。

アルヴィド・マグヌス・ティセリウス。

この北の国ノルヴィークの頂点に立つ男。赤い髪と瞳の青年王。

（ “賢王アルヴィド”。

絶対、手に入れて見せる

……!!  
）

誰もが褒め称える、わたしのこの容姿で、この美しさで！

心の中で固く誓いつつ、わたしの心中を占めているのは見も知らぬ藍色の色彩だけだった。



## 【春の女】 - 4 愛の歌

石造りの壁で囲まれた王都の春はそれは絢爛なものだった。

通りは色とりどりの布で飾られ、揃いの石で造られた家々の窓辺には花が咲き誇る。

楽師や道化が集まり、甘い焼き菓子売られ、花々を売る小さな車がそこらに点々としている。

わたしの存在は、その道化達と同じだ。祭を盛り上げ、人々の好奇心を満たし退屈を殺す異物。

わたしは歌った。

眠れない子をあやす歌、柵に入らない羊を追う歌、旅の空に自身を励ます歌、ひたすら陽気に踊るための歌、そして愉快的祭の歌。

歌っているときだけは何もかも忘れることができた。

“自身こそ自身の奏者たれ”、わたしを奏するのはわたし自身以外ではありえないと、歌は実感させてくれた。

そして、カティア。幼いわたしが自身の手により失わせた唯一の宝物。

もしかしたら、わたしが歌えばこの声は彼女に届くのではないかと。もう彼女はわたしの顔など見たくもないかもしれない。それでも。

わたしは、歌わずにはいれなかった。だから、歌った。どこかにいる彼女の心に届くように、と。

歌い始めれば数日もしないうちに、“歌姫”の座はわたしのものとなった。

“春と共に訪れた娘”。“花のようなフレイア”。

すぐに、王城の者にもわたしの名は伝わるだろう。耳敏いという、王にも。

すり鉢状になった白亜の大広場、噴水に腰かけ、一際花に満ち溢れたそこでわたしは歌う。

春の女神の歌、咲き乱れる花の歌。

花卉をちぎってつくられた華吹雪が、春風にのってわたしの髪に、衣に纏わる。街中に溢れる花々。

…  
ただ刹那、街を人を飾るためだけに育てられ、摘み取られる花々。

祭が終われば捨てられるだけ。

この国の人々は、花を愛するという。

その愛した果てが、それなのだろうか。わたしは喉の奥で嘲笑した。

ああ、それが愛だというのなら、やはりわたしには“愛の歌”は歌えない。

今日もまた歌う。花祭が終わる、その日まで。

三日後には国王が祝辞をあげ、最後の盛大な宴会が開かれ、そうしてやっと人々はこのひと月あまりの祭に満足する。

国王アルヴィドはお忍びで城下を訪れる事もあるらしいと王都ではもっぱらの噂だったが、もしそうだった事がなくとも三日後のその

日には彼の姿を見ることもあるだろう。

彼がわたしの姿を眼にすることもあるだろう。

目にしたなら、それまで。わたしは必ず王を虜にしてみせる。

（ さあ、来なさい。わたしは此处よ。此处にいるの！！ ）

よく晴れた春の空の下。

微笑みを零しながら、“小鳥の歌”を歌っていたとき。

ふと、巡らせた視線の先。  
その人を眼にした刹那。

鼓動が跳ねた。頬が上気した。胸が苦しくてたまらなくて、でもそれがひどく幸せで。

唇から零れ出たのは、“愛の歌”だった。

歌う。歌う。溢れ出る。

先刻まで考えることすら厭わしかった、歌えるはずなんてないと思  
っていた春の乙女の歌。

『 花よ降れ 花よ咲いて

唇に微笑を 心に平穩を そして人に愛しむべき生を  
！  
』

今なら、心からそう思えた。

花よ咲け、あなたのために。どうか微笑<sup>わい</sup>って、心安らかに。  
どうかきいて、わたしの愛の歌。

目に焼き付いたのは玲瓏たる “ 藍色 ”      ！！

凍りつき生物も住めないほど清浄な冬の湖のような、銀月を抱く宵  
闇のような。

深い深い藍色の眼差し。どこか哀しげなその清冽さ、高潔さ。

発情と蠢きの季節である春とは正反対の、どこまでも静謐で清らか  
な、痛いほどに綺麗な冬の印象。

枯れ萎びる花からは遠い、朽ちず曇らず至銀に輝く剣のような美し  
さ。

ああ。

（ 違う。 ）

脆弱な肉と衣を纏い、籠の小鳥のように囀り、花の醜さを持ったわたしとは、あまりにも違う。

わたしはその少女の在りざまに一目で恋に落ちた。

いいや、それは恋すら越えて、もはや愛であつた。

全てを許容できる、全てを捧げることのできる感情。

わたしはもう自分のためにすら歌うことはできないだろう。

この声は、この歌は、ただひたすら貴女のためだけに――！

たとえ、貴女がそれを受け取らずとも。

わたしを見詰める藍色の眼差しの隣で、ふと灰色がかつた茶の髪の男が動いた。

褪せた外套、花祭の道化の仮面。

男が彼女に何か握らせると、彼女はありふれた金髪を微かに揺らめかせ、稀有な藍色の双眸をわたしから外し、広場の外へ去って行った。

その瞬間の、わたしの絶望、そして彼女が花冠を手に戻ってきた時のわたしの歓喜ときたら！

貴女を眼にした短い間に、わたしはときめきで天に昇り、絶望に胸を引き裂かれ、歓喜に破裂しそうなほど心臓を高鳴らせ  
ああ、すでに三度、わたしは死に、蘇ったのです。貴女のその一挙一動が故に。

白い手の中の花冠。

雪のような色をした指に触れられる花に、わたしは嫉妬した。  
わたしはそれがどうしても欲しかった。春に咲く花全てがまとめられた花冠。

彼女が触れ、差し出すものならわたしはそれが荊の冠であつたとて狂喜して受け取っただろう。

そう、それが道化の仮面の男の手を経たものであつてもだ。

『歌姫フレイア。この北の果てに咲いた至上の花よ！

春の女神の祝福が貴女の上にあらんことを。』

大仰な祝辞と共に恭しく捧げられる花冠。

王都を訪れてより、わたしは誰からも何も受け取らなかつた。  
花束も、衣装も、装身具も、甘菓子も。

なんと無欲な、と人々は褒め称えた。本当は触れたくもなかつただ

け。誰ともつかぬ者の手によるものなど。

その、わたしが初めて受け取る贈り物。受け入れる想い。  
周囲の人々がざわめくのが分かる。

そんな民衆を気にすることもなく掲げられた花冠に、わたしはドレスの裾をひき恭しく頭を垂れた。

まるで王宮の戴冠式でもあるかのように、厳かに道化はわたしの頭に花冠を載せ

……

そして、わたしは溢れ出る幸福感のまま微笑んだ。

道化の頬が紅潮する。人々が歓声を上げる。けれどそんなものはどうでもいい。

あの藍色の瞳の少女が触れたものが、彼女がわたしのために選んだものが、わたしの元にある。それだけがわたしの幸せ。

三日後。

花冠が萎れてしまい悲嘆に暮れていたわたしは、そして春空の下再びあの道化の祝辞の言葉をきくこととなる。

「歌姫フレイア。この北の果てに咲いた至上の花よ！  
春の女神の祝福が貴女の上にあらんことを。」

その時、道化の男は赤金の瞳の王として。

差し出される黄金の花飾りは王宮への招待状として。

真紅の玉座。

そのすぐ傍らに、藍色の瞳に藍色の髪、藍色の鎧の“彼女”を侍ら  
せて  
……

【春の女】 - 4 愛の歌（後書き）

つまりフレイア イルヴァ アルヴィド フレイアというパーフェクトトライアングルだったんだよ！！（な、なんだもて）

…って、最初の“ガールズラブ注意”の注意書きのせいでそんな割と最初っから丸分かりじゃねえかあああああ！！いや、まあ、苦手な人は本当に苦手でしょうから必要なんでしょうがね。

そんなわけで、まあ。この前提があるだけで【冬の娘】の読後感というか読んでる

間の何かが割と変わりそうな気がするんですが、いかんせんモロバレ風味：

花の歌姫は花は花でも百合の歌姫でしたっけいうね！！いや、イメージフラワーとしては薄紅のこう、ふわふわとした花なんです。牡丹と薔薇足して二で割ったような。

百合が好きです。薔薇も好きです。ヘテロも好きです。雑食です。微妙に人を選ぶ話でしょうが、この先もお付き合いいただける方がいれば幸いです。

【春の女】 - 5 優しい雪

花祭の終わりの日に、わたしは正式に王城へ迎え入れられた。王を慰める楽師としてだ。

白亜の王城、居並ぶ人々。厳しい顔をした大臣にも、困惑したような高官にも、好奇心丸出しの侍女達にも、わたしは心からの笑顔を振りまけた。

と、言うより、笑顔がこぼれてしまったと言った方が正しい。

だって、この城には彼女がいるのだ！同じ屋根の下、同じ床の上に彼女がいるというだけで、わたしはどこまでも舞い上がった。

藍色の瞳の少女

イルヴァ。

そう、“青藍の戦乙女”。

わたしが身勝手に妬み憎んだ存在こそ、わたしが一目で恋に落ち今また身勝手に愛する相手だった。

正式に国王への目通りが叶ったとき、歓待の言葉を述べた赤毛の王は真っ先に彼女をわたしに紹介した。

『イルヴァ。私と王城を守る近衛の長を務める者だ。

私が最も信頼する側仕え。そなたと顔を合わせる機会も多いだろう。』

役職よりも先に彼女の名を呼ぶ。常に傍に控えさせる距離感やその

親しげな様子に気分が沈みかけたのも、一瞬だった。

『 ノルヴィーク近衛隊隊長イルヴァと申します。

以後、お見知りおきを。フレイア殿。』

深く鮮やかな藍色の髪に藍色の瞳。どの貴婦人が纏うドレスよりも優美な藍色の鎧。腰には氷の精を模った銀の剣。

静かに瞳が伏せられ、流れるような礼の所作と共に透明な声が紡がれる。一切の不純物を含まぬ水晶のような声。その声で歌を歌ったら、どれほど美しい調べになるだろう。

『初めまして、イルヴァ様！お会いできて嬉しく思います。』

頬が、唇が薄紅色に染まってゆくのがわかる。どうしようもなく浮かれてしまう。

同時に、どうしようもなく緊張してしまう。今の声はうわずってはいなかっただろうか？仮にも歌い手たるものが！

それでも、この胸を満たす衝動は抑えることができません。

『なんて、綺麗な藍色でしょう……！髪も、瞳も。

わたしは、これまでこれほど美しいものを見たことはありません！』

静謐なその色に比べたら、わたしの薄紅などただ派手派手しいばかり。

わたしは思わず手を伸ばしていた。ただ柔いばかりの手を、藍色の手甲に覆われたすりとした手へ。

一瞬、彼女はぎくりと身を震わせたが、結局突然のわたしの成し様を咎めることはなかった。

冷たく鎧われた手を、両手に抱く。

ひんやりとした白い手は、剣を扱うためかところどころ硬くなっていた。強い手だ。そして、優しい手。

わたしに触れられるのが嫌なら、その手はいくらでもわたしの手を振り払うことができたのに。あるいはわたしの手が触れる前に、礼を解くこともできたのに。

王の御前とはいえ、彼女はわたしの手を、好意を拒みきることができなかった。

（ ……優しいひと。 ）

雪のような手はわたしの手の中で溶けることもなく、わたしはそのことに心からの微笑みを零した。

【春の女】 - 5 優しい雪（後書き）

本当に投稿量がまちまちすぎて申し訳ないかぎり。  
でも、きりがなあorz

【春の女】 - 6 白銀の兵士、血色の王

広大な王城においてわたしに与えられた部屋は南の一室。城内に個室を持てるだけでも庶出の、新人歌手には過ぎたものだというのに、それはわたし専用の離れができるまでの仮住まいだと言う。

案の定、楽師達や侍女達の嫉妬や不満もあつた。それでも、恋に浮かれたわたしの微笑が、歌声が、曇ることなど欠片もなかったが。結局彼らは早々に自身の中でわたしという存在に蹴りをつけ、棘を向けることもなくわたしを遠巻きに見守るようになった。それにはもしかしたら、わたしに付けられた護衛兵の存在の所為もあつたのかもしれない。

元は近衛の一人だという、白銀の鎧の兵士。

声をかけなければひたすら静かに立っているだけの、冷やかな眼差しの兵士。

けれどその媚びや羨望、生ぬるい好意を含まぬ視線が、わたしには好ましかった。敵意すら感じる存在感。彼がわたしに触れようとすることは、決してないだろう。

彼がわたしを嫌っているというその一点において、彼は皮肉にもわたしの唯一といっていい信頼を受ける羽目になったのだ。

名乗りすらしない彼を、わたしは勝手に“白”<sup>ヴァイト</sup>と呼んだ。

自分からは決して口を開かない彼は、それでもわたしが「お話して？」と“命令”すれば、応え得るかぎりの事を答えてくれた。

城の事、王の事、近衛の事、そして

彼女の事。

近衛隊長イルヴァ。

賢王の剣。青藍の戦乙女。

女でありながら王国一の剣士として名を馳せるその太刀筋がいかに美しいか。澄んだ号令が厳寒の大气にいかに明晰に響き渡るか。裏切りを許さぬその賛美すべき冷徹さ、いかな大貴族にも媚びぬその峻厳な公正さ。剣の腕と忠誠、そのみを尊び、幾人も貧農の子息が王に仕えるという栄誉を与えられ、無能な貴族の子弟は王城より追い払われた。

清廉潔白な武人。

厳しい藍色の眼差しに、兵達はすべからず畏怖と敬愛の念を覚えるという。

それは、彼女の副官を務めていたというヴィート自身にも当てはまる、と。彼は淡々とした声で告げた。

わたしは溜息をつく。

少しでも息を吐き出さねば、この想いで胸が破裂してしまうのではないかと危惧したからだ。

彼女はどこまでもわたしと対極であり、美しかった。募る恋情を抑え込みなんとか呼吸を取り戻すと、そしてわたしは「もっと」と、時の許す限り彼女についての話を強請るのだった。

と言って、わたしは王の歌い手として城に招かれたのだ。常にヴィートと話ばかりしているわけにはいかない。

王の前で歌わねばならない。

赤金の瞳を持つ赤毛の男は、まるで真綿で包むようにしてわたしを遇した。

アルヴィド・マグヌス・テイセリウス。ヴィートにどんな人物なのかと尋ねてみても、それには国中に流れる噂とそう変わらない答えが返ってくるだけだった。

曰く、“賢王”であると。

その業績くらい貴族の女に劣らぬ教養を求められる高級娼館に育ったわたしは知っていた。特に、先王が崩御してのちすぐに起こった東国オースティンとの緊張状態を即座に解消し、のみならず今まで考えることすらできなかった交易協定を結んでみせたのには、若輩の王と侮っていた人々の考えを完全に覆した。

けれど、彼女がその絶対の忠誠を捧げる所以は、そんな上辺の所にあるのだろうか？

… わたしが城に上がるに際し、“娘を溺愛している父母”という役割を演じる養父母には、莫大な金が支払われたらしい。それのほとんどは彼らを通じて娼館の主へと流れたのだろう。わたしはあの老人の期待通りの高値で“売れた”のだ。

当初それを漏れ聞いた時、何が“賢王”だ、と呆れた。「かように愛情深い二親から、可愛い娘を取り上げるのは忍びないが」などと言っていたようだ。果たして娼館の策略にすら気付かない男が国を率いていられるのか。

さらに金をせびろうとした養父母が“どこぞの物盗り”に殺された時も同じ。なんて短絡的なやり方。

その養父母殺害の犯人として娼館の主が訴えられた時、初めてわたしは目を見開いた。

裁判は迅速に。養父母の近辺を行き来していた主の使いが決め手と

なり、さらに父母を殺された“花の歌姫”

わたしの憐れさ

が民衆を煽り、強欲な老人は警吏に金を流す間もなく即座に処刑された。

子もなく遺産を譲り受ける後継者を持たなかった、しかも下賤な職である娼館の主の財産は、法に従い王家へと没収された。結局王は、わたしを買い取った丸々の金額とそれに並ぶ娼館の財を一気に得たことになる。

なるほど、娼館の老人では比べ物にならぬ機知　　そして悪辣さか。

「歌ってくれ、フレイア。お前の声をきくことが、私の一番の安らぎだ。」

そう言って無邪気な少年のように微笑む男の赤毛が、わたしには血の色にも見えた。

【春の女】 - 7 拒絶の花

それでも、わたしは王に招かれる時を日々心待ちにした。  
歌えることが嬉しいからではない。勿論王に会えるのが嬉しいので  
もない。

わたしが思い焦がれるのはただ一人、赤い男の斜め後ろ、静かに控  
える藍色の鎧姿。

わたしは歌う。

そよ風の歌、糸紡ぎの歌、若葉の歌、小鳥の歌      愛の歌。

ただ一人のために。 たった一人に伝わるように。 たった一人が安ら  
いってくれるように。

それでも、その憂いを帯びた藍色の眼差しは、ただ赤い姿にのみそ  
そがれていたけれど。

国王アルヴィドはわたしに何でも与えようとした。

宝石、精緻なレース飾り、異国の絹織物、季節外れの果物、蜜の酒、  
愛らしい菓子。そして庭園を臨む美しいわたしのための離宮。<sup>トリカゴ</sup>  
彼の庇護は絶対であり、わたしの寝台はこの上なく心地よかった。  
けれど、それだけ。

それはわたしに必要なものであって、わたしの“欲しいもの”では  
ない。

彼はわたしの欲しい唯一を持っている。

けれど、彼がわたしの欲しいものを与えることは絶対に不可能なの

だ。

ある日、彼がわたしに捧げたのは一輪の薄紅色の花だった。

「お前に、よく似ていると思った。」

と。柔らかい日差しの中で微笑む様に、わたしは目を見開いた。

「ありがとうございます、陛下。」

なるべく違和感がないように微笑み、けれどわたしはその差し出された手と花をそっと押し戻した。

「けれど、わたしには勿体ないものです。」

そつと、眼を伏せ首を振る。幾度も繰り返した言葉。それでも、王から差し出されたものをあえて拒むのは、これが初めてだったはずだ。

「フレイア？」

赤金色の瞳が微かに揺れる。その様に、わたしはすうっと一息を吸い込み、続けた。

「花は、いずれ枯れ朽ちるもの。」

それでも、ひとつの命をわたしなどのために手折り散らせ

ることを、わたしは望みません。」

心優しい歌姫の言葉。

それを吐きながら、わたしは苦々しい嘲笑が胸の奥に渦巻くを感じていた。

ねえ、お優しい王様、絶対の王様。

あなたがわたしに似ていると言ったその薄紅の花。それをわたしの傍に置くと言う事がどういうことか、あなたにはお分かりにならない。

あなたはわたしに見ろというのだ。自分に似た花が、水差しの中で日々咲き、萎れ、最後には枯れ捨てられる様を！！

（ 枯れた花がどうなるかなんて、あなたは考えない。 ）

そもそも知りもしないのかもしれない。彼の傍に飾られる花は、少しでも萎れる前に侍女達に捨てられるだろう。

彼は王家の正統な血筋であり、男であり、絶対の力を持っている。飽きれば捨てられる花とは違う。

「フレイア                      本当に、お前は……」

姿や声だけでなく、心まで麗しいのだな。」

花を引きもどした男は、吐息と共に言った。

眩しいものを見るような眼差しに、わたしは憐れみを覚える。ああ、

いくら乞おうとも彼がわたしを手に入れる日は来ないだろうと。

「わかった。だが、私の中では真実お前に勝るものなどないのだ。何か、欲しいものはないのか？」

欲しいもの。

いっそ、彼女に似た銀の剣でも贈ってもらおうかと思ったが、わたしはすぐに考え直した。

「ならば……その。」

わたし、イルヴァ様と、もっとお話してみたいです。」  
剣などより、彼女本人の方が良いに決まっている。

「イルヴァ……か。」

ふと、赤金の双眸を伏せた男に

「駄目、ですか？陛下……。」

今まで何一つねだらなかったわたしの、唯一の願いに、彼はそれほどしないうちに首を縦に振った。

「わかった、フレイア。」

お前の望みに応えよう。」

「ありがとうございます、陛下……！！」

微笑みが零れる。

思えば、わたしが彼に心から感謝したのは、この時が初めてだった。

【春の女】 - 7 拒絶の花（後書き）

順調に薄暗くなつてまいりました。

【春の女】 - 8 枯れない花

その後、「手折られる命が忍びないのなら」、と、王城の庭園が丸ごとわたしに捧げられた。

北の国にあつて常に花の咲き乱れる王家自慢の庭園。

わたしはそこでただ一人のために歌う。

目の前の赤い男にでなく庭園の薄い扉越し、確かに存在する藍色の少女へ。

歌う時は言葉を交わせずとも姿を見ることはできたというのに、それ以来藍色の姿は遠ざけられ、王は約束をたがえたのかと憤慨しかけた時ようやくその機会はやってきた。

王は視察で王城を離れなければならないのだ、と。

告げに来たのは、涼やかな少女の声。

聴きたがえることのないイルヴァ様の声！

「陛下が不在の間、私が貴女の身をお守りいたします。」

美しい礼の型。騎士が貴婦人にするようなその仕草に、わたしはまさしく有頂天になった。

それ以来、王が城を留守にする間は常に彼女が傍にいてくれるようになった。

部屋へ行ってみたいと言えば、戸惑いながらも、わたしを部屋に招いてくれさえた。

丈夫な卓と来客用の長椅子、本の詰まった書棚。

すつきりと簡潔な、その人柄を感じさせるような清々しい部屋には、明らかに不似合いな柔らかなクッションと茶会のセットが用意されるようになった。わたしのためのものが彼女の部屋にあるということが嬉しかった。

香茶を飲み、お菓子をつまみ、わたしの他愛のないおしゃべりに彼女が時折静かに相槌を打ち、歌に耳を傾けてくれる。まさしく至福の時。

春の気配が消え初夏の日差しが降り注ぎ、これから短い夏の盛りへ向かっていくという頃。

わたしは、ふと彼女の部屋にあるその花の存在に気付いた。

「この花は、随分と長い間活けられていますのね。」

視線の先には、薄紅色の花があつた。  
わたしの髪の色にそっくりな色の花。

「それは……」

すっかり嬉しくなつたわたしは、零れるにまかせた笑顔で言った。

「あなたの傍ならば、花さえも永らえようとするのですね。イルヴ  
ア様。」

ああ、嬉しい、嬉しい、そしてうらやましい。その薄紅の花が。  
彼女の傍にいられる、いつ見ても枯れる気配もないその花が。

嗚呼。

「わたしもその花になりたい……」

花になどなりたくないと思ひ締め唇で、そんなことを呟く。  
貴女の傍に枯れずにあるならどんなものでも良い。

「こんな……花などより、貴女のほうが美しく在るでしょう。」

微かに揺れる声。

氷よりも透き通った藍の双眸を覗き込んで、わたしは言った。

「わたしが美しいとしたら、それはわたしを映す貴女の瞳が、心根が美しいですよ。」

本当に、綺麗な人。

憎い恋敵の前に、どうしてそんな痛々しく真つすぐな言葉を紡げるのですか？

…

「また、来ても良いでしょうか。今度はこのような理由もなしに。」  
あの男の存在がなくても、わたしに会ってくれますか？  
部屋を立ち去る間際、勇気を振り絞って言った言葉に、彼女は事務的に、それでも首を縦に振ってくれた。

ああ、今日はなんて素晴らしい日だろう。強すぎて鬱陶しい夏の日差しも、草の匂いも、何もかもが許せた。

次に訪れる時は、何を持っていくのか。どんな歌を歌おうか。あの花は、まだ在ってくれるだろうか。

大人しい侍女を連れ、軽やかな足取りでわたしのための鳥籠へと戻る。

…  
けれど、私がイルヴァ様の元を訪れるのは、その日が最後になった。

## 【春の女】 - 9 花売り娘の病

わたしが倒れたのは、盛夏の折だった。

緑が生い茂り、ぎらつく太陽が地上を焼く。腐敗を孕むやかましい生命の季節。

王を象徴する色の季節。

“歌姫フレイアは病をえていた！！”

人々の囁きが鬱陶しい。幸い、国王アルヴィドは病をえた歌鳥を捨てることはせず、医師や薬師、果ては流れの錬金術師や妖術師までかき集め、わたしを癒そうとした。

必死の形相の彼らを見て、それでもわたしはこの病が治ることはないだろうと冷めた頭で考えていた。

産褥での事に耐えられなかった母。その前から身体を崩していたという母。

呼吸に耐えられない喉、胸を締め付けられるような鼓動、けだるい熱。微かに伝え聞いたその症状と今のわたしに宿るものはまったく同じだった。

これは、おそらく血族の病。流行り病ならまだしも、医師達に治せるものか。

まったく、花売りの娘は花売り、どころではない。

イルヴァ様はイルヴァ様で、王城に出入りする人々が急増した所為で王城警備の徹底に忙しいらしい。

厄介者め、と責めるようなヴィートの言葉に、わたしは苦笑を返すだけだった。

なんの偽りも遠慮も含まない言葉は心地よい。

それに、それだけでなく幾人もの盗賊や間者共を捕らえた彼女の活躍もまた、彼の口からきくことができたから。

そうこうする間に秋が過ぎ、心地よい冬が来る。

身体の芯まで清めてくれるような厳しい冬。花祭の折には花に埋もれていた街が、穢れなき白一色に染まる。

冷たい大気は肺を洗い、鼓動を沈め、鬱陶しい熱を拭い去ってくれるようだった。それでも、部屋の中では侍女が必死に薪を炊き薬を燻<sup>すが</sup>蒸し、その清しさは朝の一時のみであったが。

そして            その心地よい冬の冷氣と共に、彼女は現れた。実に半年以上ぶりのその姿。変わらぬ清冽な藍色。

「イルヴァ様……！」

目にした瞬間、病などどうでもよくなった。王や侍女達に向ける空虚な笑顔でなく、久方ぶりの本当の笑顔。

会いたかった、会いたかった、会いたくてたまりませんでした。一目御姿を拝見するだけでも満足だったのに、その手に持った果实籠はもしかしてわたしのためのものではようか。だとしたら、たとえ呼吸が苦しかろうが喀血しようが林檎の皮一枚残さず平らげるのに。

そして遅れて気づく。ああ、何故、わたしはこんなにも見苦しい格好なのだろうか。髪も結わず、紅の一つもささず、折れそうなくらい貧相になってしまった腕を隠すこともできない。頬も無駄に紅いだろう、喉にひっかかる呼吸が耳触りだろう。美しく在ること、そ

れだけがわたしの価値だというのに！！

微かに震えた身体に、藍色の瞳が痛ましげに伏せられるのを見た。  
ああ、悼んでくれるのですか、哀れんでくれるのですか。貴女の愛する人の寵愛を一身に受けるわたしの痛みを、不幸を、嘲笑することも歡喜することもなく。

綺麗な人。

彼女が目を向けてくれるならば、病になるのも良いかもしれない。

そんな暢気なことを思っていると、ふと、手を取られた。

沈痛な面持ちの、赤毛の王。一瞬その手を振り払いそうになったのをこらえて彼の背後を見やると、悲痛な藍色の双眸が伏せられるところだった。

澄み切った瞳の中に容易に見てとれる、嫉妬と哀しみの色。それをわたしに叩き付けるでもなく逆に己を恥じるように隠そうとするのだから、やはり彼女は綺麗な人間だ。

「具合はどうだ？フレイア。

寒くはないか？暑くはないか？喉が乾いてはいないか？苦しくはないか？」

赤金の双眸がゆらめく。その様に、同情できるくらいにはわたしはこの赤毛の王のことを受け入れていた。  
けれど、触れられるのはやはり耐えられない。

「なりません、陛下。わたしは何によるものともつかぬ病を抱えた身。

うかつに触れて、陛下の御身にもしものことがあっては、わたし

は……！」

一回り以上大きい手のひらから手を引き抜くと、わたしは訴えた。もつとも、血統の病であれば触れたところで病がうつることもないだろうが。

「フレイア……私は

……！」

空になった手のひらをギリリと握りしめると、王は一つ苦しげな吐息をついた。

そして自身の後背に目をやる。それだけで、藍色の少女と、そして白銀の鎧姿も、微かな礼をして戸外へ去って行った。

此処には、本当に二人きり。

「私は……無力だ。苦しむお前の、手を取ることすらできないのだから。」

悄然とした姿は、多くの兵士たちや重臣たちの前にある時の堂々とした姿からは想像もできない。もしかしたら、藍色の彼女ならばこの北の大国の王のこんな姿も知っているのかもしれないが。

「いいえ、陛下。わたしは本当に陛下に良くしていただいています。心地よい寝台も、よく仕えてくれる侍女達も、気分の良くなる薬草達も、みんなみんな陛下の慈悲によるもの。」

あの、果物籠も

本当に、嬉しゅうございます。」

何より嬉しいのは、彼女を伴って来てくれたことだけだ。  
ふわりと微笑めば、微かに苦しそうに、それでも彼も笑った。

「お前は本当に欲がないからな。

果実ぐらい、いくらでも持つて来てやる。遠国のものでも、時季外れの物でも。

なんでもいい。

なにか欲しいものはないか？フレイア。」

柔らかな台詞と共に、手を伸ばすことはない。触れようとすることはない。わたしが拒んだからだ。

その誠実な臆病さに、せめて偽りのない言葉を返そうという気にはなった。

「一番欲しいもの」は、決して人から与えてもらう事はできない

：

わたしの、姉のように思っていた娘が言っていました。

それは、自身の手で掴まなければ意味がないから。」

自身の手で掴むことができなくても、他人から与えられたものでは意味がないから。

その言葉に、アルヴィドは眼を見開くと、その一瞬後に無邪気に微笑した。

「ならば、私はいつかお前に、“お前が二番目に欲しいもの”を捧げよう。」

愛しいフレイア。」

微かな衣擦れの音と共に立ち上がると、美しい蔦の彫り物の施された扉の向こうへ去ってゆく。

その赤い後ろ姿を、わたしは珍しくいつまでも眺めていた。

【春の女】 - 10 大戦へ欣喜へ

それからしばらく、わたしは病に侵されながらも安逸とした日々を過ごしていた。

だが、冬も終わりに近づいたある日。白銀の鎧姿は、硬い声でこう告げた。

『戦が始まる。』

と。

対するのは南の王国エルス。使者が王に不敬を働いたというのが噂だが、真相は果たして

…

「ティセリウス陛下は、よほど貴方が大事であるらしい。」

少なくとも、この国の兵士達の命よりは。

淡々と冷やかな、いつものヴィートの声。なるほど、一国に攻め入るのもまた、今までの医師や魔術師狩りの延長であるらしい。

正直、自分のために一つの国が滅びようとしていると聞いても、実感はわかない。病をえていようといなかりうと、この身はこの北の国から、いや、この鳥籠からすら出ることは叶わない身だ。

それよりも。

「兵を率いるのはイルヴァ様だそうだ。まあ、当たり前だな。あの方以上に優れた将器を持つ者は、いかにこのノルヴィーク広しと言えど存在しない。」

言うヴィートの鉄面皮には、それでも微かな不満と誇らしさが滲み出ていた。かつて近衛の副長格であったというヴィート。わたしのお守りにかかりきりで、彼女に付いて戦場へと行けないのが不満なのだろう。

そんなことはどうでもいい。

「イルヴァ様が……！！」

わたしは、思わず呻いた。

あの方が、戦うー！王の命令だからとは言え、わたしの命を救うために、あの方が戦ってくれるー！！ああ、戦場に行けないのが不満なのはわたしの方だ。あの方の剣が敵を切り裂くところを、清冽な声が戦場にこだまするところを、まさにその身が一振りの剣と化したような戦いぶりを、見る事ができないのだから！！

春が終わる前に早々に、戦勝の使者は城門へと辿り着いた。

歓喜に沸く城下の民、侍女達、重臣たち。そしてわたし。

彼女の率いる兵がいかに精強であったか、その策がいかに巧みであったか、南の王国の滅びた顛末、王と、その嫡子たる双子の王子と王女の最期。

響く、ノルヴィーク万歳、我らが賢王万歳、青藍の戦乙女万歳の声。

相変わらず床に臥せりながら、わたしはひたすらその藍色の勇姿を思い描いていた。

： けれど、彼女が城に帰還したというのも数日のこと。

「次は、西だそうだ。」

ヴィートが、告げる。そう、南に、わたしの病を癒す術が見つかることはなかった。なら、まだ終わりはしないだろうと分かつてはいた。

西のラヴェスタ。唯一の神を奉じる教会、その総本山を擁する国。

かつてカティアの身体に傷をつけた、異端狩りの総本山だ。わたしのために攻められるとあっても、罪悪感など感じない。跡形もなく燃えてしまえとさえ思った。

そして、それは現実のこととなる。

今回もやはり、法王を捕縛したのは彼女であつたという。動くなどただ一言、それだけでその声と威にうたれ、神の代理人などと粹がつていた教皇は凍りついたそうだ。ああ、彼女の前では神と信仰すら膝をつくのか。

やがてわたしの元には聖杯、聖布、秘跡の品々などと言う胡散臭いものが届けられたが、そのどれもがわたしの病を癒すことはなかった。

そしてかつての聖都は業火に焼かれる。

神をも滅ぼしえる彼女の強さが、わたしには聖書の教えなどよりもよほど尊く眩しかった。

そして 夏も終わる。

その頃には、わたしの周りにも不安げな声が飛び交うようになった。最近王の御顔色が優れない、なにか思いつめていらっしやるようだ。

そんなことを零す侍女に、わたしは無言で微笑み首をふる。  
不安ならば、よけいそれを陛下に悟らせてはいけない、と。侍女は  
頬を紅潮させると恥じ入るように俯き、それでも「おっしゃる通り  
ですね」、と少し元気を取り戻したように笑ったが。  
それでも、わたしも心配だ。

そんなアルヴィドの様子を見て、彼を思うイルヴァ様が不安になら  
ないはずがない。

心労に加え、度重なる転戦、体調など崩していないだろうか。

ヴィートにそう零せば、彼は微かに皮肉気に口の端を吊り上げると、  
「あの方は強い方です。陛下の御前では特に。」

とだけ口にした。

…  
けれど、そんな余裕が続いたのも秋までのこと。

「次は東、だと…!？」

微かに荒れた声が響く。ヴィートのこんな取り乱した声など、初め  
て聞いた。

いつもは本当に白銀の鎧で出来た置物かと思うほど、静かで人間味  
の希薄な男だというのに。

「無茶にすぎる、南、西と連戦が続いたうえ、次はあのオースティ  
ンだ!？」

いくら我が国の兵が精強とは言え、他の二国とは違いすぎる!しか

も、こんな短期間のうちに続けざまになど、愚の骨頂だ！！イルヴァ様のお力にも限度がある！！」

乱れに乱れた声に、わたしは無言でリラの弦をつまびいた。

“ R i : n ”

響いた澄んだ音色に、ヴィートが正気を取り戻す。

東国オースティン。この国を始め、海の向こうの国とも交易を行う富に満ちた国。

勇猛な異民族を抱え込み外つ国からの武器を駆使し海を自在に駆け巡る船団を持つ。

その程度のことなら、私の知識にもある。

「今度も、先陣を切るのは」

「ああ、イルヴァ様だ。」

ヴィートが齒噛みする。その手は、鎧とそろいの、白銀の剣の柄へかかっていた。今にも彼女の元へ馳せ参じたいに違いない。彼にはそれだけの力がある。戦場などへ行っても足手まといにしかならな  
いわたしとは違う。

「陛下は、一体何をお考えなのか……！かつて賢王と讃えられた方が。」

「ああ、そんなもの、決まっていますでしょう。」

憤懣やるかたないといった様子のヴィートに、わたしはあえて繕いもせず言い放った。

「全ては、わたしのため。」

瞬間、わたしを貫く敵意の眼差し。

この場で殺してやりたい、とでもいうような眼差しに微笑を返し、ふとその笑みを消しさるとわたしは続けた。

「イルヴァ様はやり遂げるわ。」

だって“王陛下”が是非にと望むのだから。

あの方は必ずやり遂げる、王陛下の言葉ならば、必ず。」

皆が小鳥のような、と評した声は今是一片の可憐さも脆弱さもないだろう。

自分でも、自分でこんな声が出るとは思わなかった。

ヴィートが押し黙る。

「あの方はやり遂げる。賢王アルヴィドの剣として、いかに傷を負おうと謗られようと、オースティンを滅ぼすわ。わたしを救おうとするあの王のために。」

歌うように言の葉を綴る、その胸には渦巻く嫉妬、羨望、優越、不安  
何より恋情。

青藍の戦乙女イルヴァ、何よりも猛き王の剣。そして、死を振り撒く“雪の魔女”。

敵国のみならずノルヴィーク軍にも広まりつつあるというその忌名。彼女は此度の東国攻めで、敵と味方、どれほどの人を殺すだろうか。

どれほどの死を振り撒くだろうか。どれほどの傷を負うだろうか。考えるだけで胸が締め付けられると共に、歪んだ歓喜が唇から滴りそうだった。

彼女が帰ってきたとき、その手に万病の秘薬はあるだろうか？それとも？

「ねえ、ヴィート。」

あなたがわたしの傍にいるのは、陛下の命令だからなのよね？」

唐突な問いに、それでもヴィートは淡々と頷いた。

「そうだ。」

「わたしの命令よりも、陛下の命令のほうが優先なのよね？」

「当たり前だ。」

苦々しげな声に、わたしは思わずふき出した。

「そう

：

なら、お願いにしておくわ。」

胡乱気な眼差しに、わたしは微笑んだ。

「イルヴァ様を、護って。」

ただ、一言。

それだけでこの聡い兵士は全てを悟るだろう。今更言葉をつくす必要などない。

「貴様に、言われるまでもない。」

鋼がきしむような声音。それに、わたしは笑声を抑えるのに必死だった。

だって、ヴィートがどれだけ否定しようが、あの方をどうしようもなく慕っているという一点において彼は紛れもなくわたしと同じなのだから。たとえ、その向ける想いの質がいくら違っていても。

どうしようもなく、報われない想い。

それでも良いと思える、彼のそれは潔さで、わたしのそれは単なる傲慢であつたが、それでも。

わたしはいつしかこの雪像のような兵士を、疎ましくも気のおけない共犯者のように思っていた。

「お願いよ、ヴィート。」

すっかり安堵して身体の力を抜いたところで、わたしは急に咳きこ

んだ。発作の間隔が短くなっている。喉の奥から耳障りな音。生臭さを感じた時には、わたしは手のひらに赤い液体をぶちまけていた。

「ッ……！！」

ヴィートが息をのむ気配。瞬間、こちらに駆け寄ろうとした人影は、しかし一拍置くと素早く踵を返した。乱暴に開け放たれる扉の音。騒然とした侍女達の声にかぶさる冷静な男の声。

一気に慌ただしくなった部屋の外で、侍女達が聴きなれぬ名を呼ぶ。それに指示を返すヴィートの声。

ああ、そういえばわたしは彼の本当の名も知らなかったのだな、とぼんやりと思った。

至極、どうでも良いことであつたが。

【春の女】 - 10 大戦〳欣喜〳（後書き）

微妙に存在感を増してきた白銀の兵士ことヴィートくん（not本名）

しかし共犯者とまで言っておきながら「本当の名前？どうでもいい。」と切って捨てるあたりパネエっすフレイアさん。イルヴァが外道ならフレイアは非道。王様はきつと邪道。そんなお話ですが、まだ続きます。

フレイア編はあと四話くらい。

【春の女】 - 11 懇願

南、西、東。主だった国は全て滅びた。

どれほどの兵が、人々が死んだのかなど知らない。流石に兵達も疲弊しきっているようだ、と難しい顔のヴィートも知らない。不安しか囁らない侍女達など知らない。

南、西、東。主だった国は全て滅びた。

彼女は、やり遂げたのだ、王のために。けれど。

「っけふ…、か、は……ッ!!」

けれど、結局この大陸のどこにもわたしの病を治す術はなく。

豊穡のエルス、聖都ラヴェスタ、豪放たるオースティン。  
その全ての滅亡に、死んでいった人々に、結局意味はなかった。

「フレイア……!!」

血反吐のように赤い髪の男がわたしの名を呼ぶ。  
北の大国の王、そして今やこの大陸全ての主、絶対の王、全能であるはずの王。

それでも、彼がわたしの名を呼ぶだけではわたしの病は止まらない。身体肉は削げ落ち、熱はこもり、息をするのはとんでもない苦行になり果てた。

「フレイア……」

そして、アルヴィドの狂気も止まらない。嗚呼、思い出すのは歌声の代わりに鮮血を吐き出したあの日の、絶望に見開かれた瞳。相変わらずわたしに触れることはなく、それでも痛々しげにすがめる赤金の眼差し。

死にゆく身体で、それでもわたしが思うのは、ただ一人のことだった。

「……っ、

雪、は……まだでしょうか……？」

無様に掠れる声で、それでも久しぶりに発した言葉らしい言葉に、アルヴィドは目を見開いた。

「いや。いや、だが、すぐだ。

大気が冷たい。今日か明日には、必ず雪は降るだろう。

……雪が、好きなのか？」

必死に言葉を継ぐ王に、わたしは瞼を半ば閉じて答える。

「ええ……とても、綺麗ですもの。」

清冽な冷たさも、世界の全てを染め上げる純潔の色も。  
手のひらに落ちれば萎れる花弁とは裏腹の、落ちれば透明に溶け消える潔さも。

あの人の眼差しにも似た静謐な大気も、とても綺麗。

「雪が…見たいな…。」

ぽつり、零れただけの言葉に応えが返る。

「見えるさ、すぐにでも。」

その先、春の花が咲き乱れるのだって、すぐだ。」

強烈な願望をはらんだ声に、わたしはゆっくりと首を横に振った。

「いいえ、春は見れなくて良いのです。」

…ただ、雪が見れば良い。」

忌まわしい春など見たくない。何より、それまで身体がもつはずがないことを、自分が一番よく知っている。

「フレイア……。」

何度目か、わたしの名を呼んだ男は、数秒の沈黙の後　ふと、唇を引き結ぶと穏やかな声で言った。

「 お前が“一番欲しいモノ”は、その手に握めたか？」

いつかの日の言葉。熱に魘された頭では、それがいつの日の事であったかまでは思いだせないが。

……いいや。そう、そうだ、あの日は、イルヴァ様もいて。けれど、ヴィートと共に控えの間にいつてしまつて。

…そうだ。

「 いいえ。

けれど、ひとつ、お願いがあります…陛下。」

「叶えよう。言うがいい。」

即答する声に微笑をもらし、わたしは鈍痛を抱える頭で必死に続けた。

「わたしに…付けてくださった、白銀の鎧の、兵士……

彼は、わたしに、本当によくしてくれました…

これ以上、こんな病身の元に引きとめておくのは、忍びないのです。

「

ヴィート。白銀の兵士。

最後まで、彼はわたしの外見や声に惑うことはなく、故にわたしが

彼に嫌悪感を催すことはなかった。  
常にわたしの傍にあった、白。

「彼は、ただ臥せる事しかできないわたしとは違います。」

懇願を込めて見つめれば、アルヴィドは確かに首を縦に振った。

「叶えよう、フレイア。お前の望みは、私が叶えうる限り全て

……」

「ありがとうございます……」

ほう、とわたしは吐息を吐きだした。

たった数片の会話。けれど、こんなにも声を出すのは      こんな  
にも声が続くのは久方ぶりだ。

珍しく発作が起こる様子がないことに、アルヴィドも気付いたのだ  
ろう。

それまでひたすらわたしに向けていた眼差しを、ふと、硝子一枚へ  
だてた庭園へと移した。

遠い眼差し。触れがたい横顔。

現世の苦悩から逃れるような眼差しで、かつて彼は続けたものだ。

『歌ってくれ、フレイア』

と。

「……………」

わたしは細く息を吸った。喉に手をやる。意味ある詩など紡ぎきれないことは分かり切っている。だから、わたしが発したのはただ“La”の一音だけだった。

響いた高音に、瞬時にアルヴィドの眼がわたしに引き戻される。咎めるように開いた口は、しかし言葉を発することはない。

わたしは、ただ旋律を紡ぐ。言葉などなくとも、声と意志があれば歌は成立する。

歌。歌。歌。

カティアがくれたわたしの慰め。

わたしの選んだわたしの寄る辺。

“歌姫”フレイア、それが彼女の知るわたしの全て。

小鳥の歌も、旅の歌も、別れの歌も、とつくに歌えなくなっていた。

ただ、この胸を占めるのは愛の歌。

（ 会いたい。）

あの藍色の姿を一目見たい。

あの藍色の眼差しに見つめられたい。

一言、あの透明な声がわたしの名を呼ぶのを聴きたい。

正反対の赤金の色を眼前に、わたしはただ思っていた。

一目。一目。

それまでは死ねない、なんとしてでも。

「……ッ!!」

喉の奥が焼ける。血の匂いが肺にわだかまる。それでも。

この鼓動を止めてなるものか!!

…  
歌が掠れ、止まる。

心臓をきつく握りしめ、耐える。瞑目し、荒れる吐息と不規則な鼓動を宥めすかし、どれくらいたっただろう。わたしが再び眼を開けると、そこにはもう赤い男の姿はなかった。

代わりに、いつの間にか佇んでいたのは白銀の兵士。

王宮内の儀礼用ではない長刀を刷き、近衛隊の徽章をマント留めに刻んだその姿。

別れの言葉などありはしなかった。

最後にヴィートが告げたのは、ただ一言。

「明日、凱旋將軍としてイルヴァ様が王都に帰還する。」

それで、十分。

（ 嗚呼。 ）

弱々しかったはずの鼓動が、どくん、と一際強く脈打った。  
唇が笑みの形を刻むのがわかる。死にぞこないの身体に灯る恋情の  
熱。

きん、と澄んだ冬の気配を引き連れて。

愛しい藍色がついに、帰ってくる。

【春の女】 - 1 1 懇願（後書き）

それぞれの懇願。

【春の女】 - 12 少女と罪悪

…

「お久しゅうございます、ね。イルヴァ様……」

万感の思いを込めて、それでも唇から滑り出たのはそんな平凡な一言だった。

藍色の鎧と剣を取り去り、無表情に佇む彼女は、ひどく痛々しく見える。

「…お加減はいかがですか。フレイア殿。」

冬の大气のように澄んだ声。

硬質な声で、それでもわたしを案じる言葉にわたしはどうしようもなく嬉しくなる。

相変わらず、優しい人。

そうでしょう？だって、彼女にはわたしを詰る権利が確かにあるのだから。

戦地を転々とし王城へ戻れなかったのはお前の所為だと、激昂し、あるいは皮肉交じりに突き付ける権利が。

微笑んだ頬が、ほわりと上気するのが自分でも分かった。少しでも見苦しい姿は見せまいと夜にも関わらず唇にさした薄紅。これで血色の悪さは少しでも誤魔化せているだろうか？わたしの取り柄と言ったら人を不愉快にさせない程度のこの外見と声しかないのだからそんな事を思いながら、ようやく彼女を楽にさせてあげられるはずの言葉を紡ぐ。

「もう、今年の冬は越せないでしょうね。」

聞き違えようもない、断定。

藍色の眼が見開かれるさまに、わたしは微かに首を傾げ、苦笑した。

「そのような

……」

「わかっていきます。自分の身体ですもの。むしろ、今までよくもつたと。」

吐息に声が微かに掠れる。それを覆い隠すような彼女の声。

「そのような、気の弱いことを。

きっとすぐに快くなりませう。…今も、陛下が様々な治癒の術を探しておいででしょう。」

刹那、藍色の瞳に微かな苛立ちが揺らぐ。貴女は正直な方で、あの男の事に関しては殊更そうだ。

よりによって憎い恋敵の延命のために、血を浴び、傷を負い、戦地を駆け、想い人と引き離された貴女。

お可哀そうなイルヴァ様。

「……随分と、歌も歌えていません。」

何も気付かない振りをしたまま、静かに言葉を紡ぐ。

藍色の双眸がわたしの喉を凝視するのがわかる。

そう、細い脆い身体。剣などなくとも、その手で簡単に、手折れる  
ほど  
…

「陛下に、何も返せない。」

こんなわたしがいる意味は、あるのでしょうか？」

そんなもの、あるわけがない、と。

今のわたしには何の価値もないと。いいや、大禍を引き起こした元凶でさえあると。

貴女には、わたしを殺す権利も力も大義名分もあると。

そう、<sup>そそのか</sup>唆す囁きに、しかし彼女は白い手をきつく握りしめただけだった。

「あります。何故なら陛下はあなたを未だ必要としている。」

ああ、やめてください、その綺麗な手に傷がついてしまいます！  
そんなことを思っていたせいで、彼女の言葉を汲み取るのに多少時間がかかった。

痛々しい藍色の瞳。

目の前にいるのはわたしなのに、その瞳に映るのはあの赤い男の影。

「……お優しいイルヴァ様。」

やっとの事で絞り出したのは、そんな一言。

貴女はわたしを傷つけない。あの男がわたしを必要としているから。貴女はわたしを案じてくれる。あの男がこれ以上の狂気に陥らないように。

貴女はわたしを肯定する。あの男が愛したわたしだから。全て全てあの男のため。

そして貴女はそのことに罪悪感を抱く。

…それが、イルヴァ様の優しさだった。たった一人を見つめながら、身勝手に押し付けられた好意を拒否しきることもできない。

苦しげにつぐんだ唇の白さ。そんなにお気になさらないで。わたしを憎く思っているはずの貴女から、わたしを案じる言葉を無理矢理引き出そうとする、わたしの方がよほど卑怯で悪辣なのです。

「……申し訳ありません、戦地より戻ったばかりのあなたに、こんな弱音など。」

当たり障りのない言葉を紡ぐ。と、同時に、末尾に咳がかぶった。彼女がわたしに背を向ける。

「長居いたしてしまっただようですね。私のように外から冬の冷気を連れてくるものはお体に障りましょう。」

今夜はこれにて。どうぞ、ご自愛下さいますよう。」

扉の横に控えていた侍女が、水差しを手にわたしへ寄ってくる。  
わたしは咳で無様に乱れた声で、それでもその背へ伝えずにはいられなかった。

「あり、がとう、イルヴァ様……っ、ごめんなさい……  
わたし、わたしっ、もう一度、あなた、の……っ」

あなたの、部屋に。あなたと、一緒に、過ごせる刻を。  
あなたに、歌いたかった！！わたしの想いのすべて！！

口内に血の味が滲む。

扉の閉まる音を最後に、視界は暗転した。

【春の女】 - 12 少女と罪悪（後書き）

卑屈で傲慢で酷い人フレイアさん。

見た目も中身も綺麗な人だと 思われていた視点が【冬の娘】  
ですが。

でもまあ、綺麗すぎても胡散臭いですよね正直。

【春の女】 - 13 冬の夢

冬が、好きだった。

きん、と澄んだ大気も。

娼館の嬌声を吸い取ってくれる雪も。

蠢く虫も獣もない、静謐な冬。

「このまま止まってしまえばいいのに。」

この純白に凍える世界のまま。

伸び、育ち、やがて枯れ朽ちてゆく身体ごと。

膨らんでゆく乳房に、変わっていく身体に、涙を零しながらそんな無茶を言ったわたしに、黄金色の髪の少女は歌った。

白い世界に染みわたってゆく、子守唄。

繋ぐ手のように温かく、林檎のように甘い声で。

流れる歌で、慰めるように教えた。刻は流れ続けるものだ。

身体は刻に抗えない。雪はこの手のひらに留めておけない。眼を閉じたわたしの頭を温かい手が撫でる。

しんしんと、雪の気配。

優しい歌。

ふと、頬に温かい手のひらの感触。

誰かに触れられることなど大嫌いだった。けれど、この手がなければわたしは生きていなかった。

「 。

懐かしい少女の声に、わたしは安心して身体力を抜いた。  
雪に沈む感触。雪が降り積もってゆく感触。

夢の中で閉じた瞼に映る、純白。透明な空。

冷たい藍色。

冬は、綺麗だった。冬は、優しかった。

冬が、好きだった。

【春の女】 - 13 冬の夢（後書き）

短いですがこれにて。

次回でフレイア編は終わるはず。少々長めになりそうですが。

【春の女】 - 終 花色の唇の女は歌う

眼を覚ますと、雪が降っていた。

はらはら、天から降る繊細な白い結晶。

鳥籠を模した離れは不思議と深閑とし、いつもは煩わしいほどの侍女達の気配もない。

澄んだ大気のおかげか、常になく身体が軽かった。

きつと、今日は良いことがある。

わたしは身体を起こし、クッションで支え、背筋を伸ばす。

そして寝台の脇の飾り棚から櫛を取り出すと、殊更丁寧に身繕いをはじめた。

視界に映る腕の貧相さ。病を得て久しい身体。二目と見れたものではないほどに痩せこけるのも、時間の問題だろう。それまで生きていられる可能性は限りなく低いけれど。

梳くたびに纏わるふわふわと頼りない薄紅色の髪。これっぽっちも好きじゃなかったそれを丁寧に梳き終え、少し考えた後結わずに垂らした。少しでも骨の浮いた身体を隠せるように。色の悪い唇には、やはり薄紅を差す。

外見の美醜に惑わされる人間を嘲笑ってきた。

今、その美醜などに惑わされぬ人間のために、必死に外見を繕う自分が滑稽だった。

滑稽で、そしてなんだか愉快だった。

幾度か、堪え切れぬ笑声を吐息として吐き出すと、わたしは再び背をたたした。

水を呑むように、大気を呑み。そして

歌う。

言葉はすでになく、“La”の音だけで綴るそれ。愛しい愛しいあの人へ届くように。この城のどこかへいる彼女の元へ届くように。わたしは此処にいと伝えるために。

庭園の硝子の天蓋は取り払われ、季節外れの花々に氷の粒が降り積もってゆく様がよく見える。そのまま氷漬けになれば、その花弁の色も色褪せずにはすむのだろうか。

口角が緩やかに上がる。

雪に抱かれた花。

彼女に抱かれるわたし。

その、夢を覚ますように、わたしは冷えた空気に微かな声が響くのをきいた。

規則正しいそれは、やがて駆けるように。一步ごとに明瞭さを増し、音勢を増し、近づいてくる音。待つ事しかできないわたしは、ひた

すら待つ。近づいてくる彼女。

眼前の扉が激しく開け放たれるまでの数分が、永遠にも思えた。  
冬と彼女の冷気が容赦なく押し寄せ、寝台の天蓋幕を揺らす。  
その、白く薄い紗幕の向こうに

「……イルヴァ様」

歌を止める。

彼女は、いた。

変わらぬ藍色の色彩を纏い、形良い唇を噛み締め。

精緻な装飾を施された銀の剣を手に、しなやかな足でしっかりと大地を踏みしめ

……  
わたしを、ただわたしだけを見据えるのだ！

明確な殺意と凶器、そんなものなど怖くない。不治の病、そんなものなど辛くない。

ただ、彼女がわたしに向ける激しい感情、厳しい眼差し、それがどうしようもなく嬉しくてたまらない。

「  
宮廷歌手フレリア。

王を惑わしこの国に混乱をもたらした罪により、お前を処刑する！  
」

「イルヴァ様……」

わたしの名を呼ぶ、その声だけでわたしは天に召される心地だ。

わたしには扱えない剣を手に、わたしに相對する少女。

直ぐな髪、強くしなやかな身体、澄んだ心、冬の清廉。わたしにはないものを全て持っていた少女。

たった一つの、私の欲しかった愛<sup>もの</sup>を持つ娘。

軍靴の音を響かせてわたしに歩み寄る間に、彼女の双眸は幾度か揺らめいた。

憤怒に、困惑に、苛立ちに。

それが、少し残念だ。

（笑ってくればいい。）

嘲笑でも、冷笑でも、憫笑でもいい。王の前だからという偽りの笑顔でなく、彼女の笑顔がみたかった。わたしが彼女を笑顔にしたかった。現実には、わたしはただ彼女の柳眉を逆立てさせるだけの存在であつたけれど。

だから、彼女が剣を振り上げた刹那、唇を開いたのはわたしのエゴ。

「……ずっと、苦しかったのです。」

「……？」

付き付けられた刃の先で、彼女の眉根が微かに寄る。

怯えるような瞳はあの赤い男の所為か、眼前のわたしの存在によるものか、わたしにはわからない。

「くるしく、て、息をするのも苦しくて、ひどく熱く、っ凍えるように寒く、

むねが、胸の奥が痛くて痛くてたまらなくて

「！！」

ぼろぼろと、無様な泣き言を零す。

そう、苦しくてたまらない。肉体を冒す病。熱と鈍痛と吐き気を抱え続け、文字通り血を吐く苦しみ。

けれど、本当に苦しいのはそんなものじゃない。

痛い、痛い、胸の奥が。貴女を恋うる心が痛い。決して愛されない  
と知りつつ愛し続ける心が痛い。愛する相手を苦しめるだけの自分  
が憎い。それでも幸せを感じてしまう身勝手さが醜い。

「わたしを、救って下さるのですね、イルヴァ様。」

曇りない銀の剣。

貴女は、こんなにもわたしに苦しめられた貴女は、それでもわたしを救って下さるのですね。  
老いる恐怖から。  
孕む恐怖から。  
枯れ朽ち捨てられる恐怖から。  
病の苦しみから。  
貴女を愛することの痛みから。

「……ッ!」

自身の唇が笑みを刻むのも気づかないうちに、ほんの一息に、その銀の剣はわたしの喉を刺し貫いていた。  
ああ、やはり貴女は優しい。罪人をいたずらに苦しませないための太刀筋。

貴女が言うように、結局貴女の眼をわたしに向けるためにアルヴィドを止めなかったわたしは、戦場で幾百の兵士を斬った貴女以上の大罪人であるのに。

そしてその慈悲だけでなく、貴女はわたしに哀れみまで与えてくれた。

今まで相對した中で一番近い距離。  
白晳の頬に、つと透明の雫が伝った。

藍色の瞳から零れるそれは、この世の何よりも清らかに見え。

けれど。

涙を零す藍色の眼差しは、わたしを通して確かに別の影をも見ていた。

嗚呼、死ぬ前というのはこんなにも人の心に過敏になるものだろうか。それとも彼女の瞳が、心が澄み過ぎているだけだろうか。

ふと、喉を貫いたままの刃が微かに震えた刹那、わたしは我慢できずに彼女とわたしを繋ぐ刃に手を伸ばした。

藍色の瞳が見開かれる。その焦点が現世のわたしを捉えはじめる。死ぬ間際にも関わらず強烈な彼女への執着心を抱えながら、わたしは困ったように囁いた。

声は剣に縫いとめられてでないから、唇の形だけで

“泣かないで”

『あんな男のために、泣かないで。』

ゆるゆると刃から手を離し、そっと彼女の白い頬に触れた。

ひんやりとした感触、裏腹に熱い涙。

藍色の双眸はわたしだけを見つめ、そう、今度こそそれはわたしのためだけに流された涙だった。

泣き濡れる彼女とは裏腹に、そしてわたしは微笑<sup>わい</sup>った。

「 ありがとう 」

ありがとう。 ありがとう。

貴女はわたしが欲しいものを、 たった一つを除き、 全てくれた。

たったひとつ、 貴女の愛だけではどうしても得られなかった。

けれど良い。 貴女の哀が得られるのなら、 貴女の藍色の瞳に一時でもわたしが映ったのなら、 それはこの身に余る幸せ。

『 おやすみなさい、 フレイア。 』

貴女はわたしが欲しいものを、 たった一つを除き、 全てくれた。

愛の歌を歌えることのできるわたしと。

死んでしまえと願った人々の死と。

醜くも苦しくもない終わりと。

わたしのことを思つて零した貴女の涙と。

そして、 今、 優しい声で呼ぶわたしの名さえも。

イルヴアの言葉はひどく心地よく、わたしは安らかに眼を閉じた。

さわらないで、汚らわしい。そんな風に触れる手をひたすら恐がっていたわたしこそが、貴女に比べればあまりにも醜かった。わたしに触れて、わたしを見て。わたしの欲望は貴女を穢せない。死に絶えてしまえと叫んだ、わたしを花と呼んだ者達。けれど、あなたが不愉快にならないのなら、あなたが愛してくれるのなら

（わたしは花になりたかった）

痛みもなく、命が途切れる感覚。

死したわたしの手のひらの中でなら、雪は留まり続けてくれるだろうか？

時が止まる。冬が止める。  
絶望の春は、もう来ない。

わたしの幸せは、わたしの愛は

わたしの微笑みは、消えない。

E n d

&

N e x t 『夏の愚者』

## 【春の女】 - 終 花色の唇の女は歌う（後書き）

そんなわけでまさかの百合な歌姫、フレイア編完結です。

主題は“歌姫”と記号化されたフレイアの出自と、何よりまさかのパーフェクトトライアングル、フレイアが愛したのは、っていうとこだったんですが。これ読んだ後冬の娘読んだら別の読後感になるんじゃないかな。最後のあたりとかもう額面通りに受けとってたイルヴァが可哀想になってくる始末。まあ渾身のコペルニクスの展開といってもモロバレな気がしますけどね！！

あと大抵ポジティブな要素として描かれる春をいかにえぐく解釈するかに気を使ってみました。虫とか沸くよ！発情の季節ですよ！！春は絶望の季節。

自分と正反対のものにひたすら傾倒したフレイア。

まあイルヴァ編でフレイアがやたらきらきらふわふわしてたのも偽りじゃないんですよ、だってあれイルヴァ視点の話だから。好きな人の前では綺麗でいたいじゃないですか。彼女の前では三割増しで清らかにあるうとしたし無邪気に喜び全開微笑みまくりであったことでしょう。それが一層イルヴァを追い詰めるのだから皮肉なもので。

一途で傲慢で猫かぶりとにかく必死。ある意味乙女の鑑のフレイアさん。

結局彼女の愛は誰も救いませんでしたが。

まあこの話全体の中で一番幸せだったのはフレイアだと断言できます。

そんなわけで次回からは残る不幸キャラ、フレイアに散々な言われ  
様なまるでダメな王様こと賢王アルヴィド陛下。  
ほぼ駄目人間しかいないお話ですが、お付き合いいただければ幸い  
です。

【夏の愚者】 - 1 赤金の少年

誰に許しを乞えばいい。どうやって愛を乞えばいい。

手のひらの雪は消え、手折った花は萎れる。そんなことは知りたくもなかった。

誰か教えてくれ。

どうすれば、この手はなにかを掴めたのか。

盛夏：赤金の血の愚者は乞う

大陸の北方に覇を唱えるノルヴィーク。その建国の歴史は、実に伝<sup>サ</sup>承<sup>ガ</sup>の御代にまで遡る。

曰く。

かつて、大陸の北方は雪の山脈と深い森に覆われた、霜の巨人の支配する土地だった。

人々は微かに森が途切れた空き地に、荒れ野に、息を潜めるように住まうのみ。

絶え間ない寒波。常に暗い空。霜の巨人のしわぶき一つにも怯えて暮らす日々。

そんな人々のために、ある時一人の勇者が立ち上がった。勇者は雪色の外套を纏い、矮人<sup>ドワーフ</sup>の鍛えた斧を手に、霜の巨人を打ち倒した。

かくて北の地の冬の猛威はおさまり、空には日が差し、森と山は切り開かれた。

そして勇者は、切り裂かれた霜の巨人の心臓から生まれた炎の娘

聡明の女神を妻に娶り、その子孫が興した王国は、霜の巨人の名を取って“ノルヴィーク”と名付けられた。

以後、代々の王は炎の娘から受け継いだ赤金の瞳と聡明さを持ち、巨人の血に染まった雪白の外套と同じ深紅が王衣の色となるのだ。そして、勇者と炎の娘の血を受け継ぐ者こそがノルヴィークの正統な王者だというのなら。

己は、一真実ノルヴィーク王などではなかった《・・・・・・・・・・》。

アルヴィド・マグヌス・ティセリウス。

そう名付けられた俺は、王妃エリヤと国王アルトゥル  
兄弟である男との間にできた、不義の子であった。      その乳

炎の娘の生まれ変わりとされるほどの見事な赤毛を持っていた母。そして、まさにノルヴィークの継嗣に相応しいともてはやされるほどの赤毛と赤金の双眸を持って生まれた俺。

茶味がかった赤毛の国王アルトゥルよりよほど鮮やかな色を纏った俺には、しかし一滴のノルヴィーク王家の血も流れてはいなかった。

その事を知ったのは、不義の王妃エリヤが死した時。

年は十と一にもなっていたか。冬の病を患い死に瀕した母は、最期に俺に告げた。「お前は王の子ではない」と。

何故、あの女が今際の際にそんなことを俺に告げたのかはわからなかった。王の乳兄弟であるその不義の相手は、文字通り父王アルト

ウルと同じゆりかごで育った相手である。産まれた時から傍近く仕え、国王の信も厚く、最も重要な東方領伯の座をすら与えられている。

その、男が、何故！！

遙か東の地に在る男を兄弟のように心配する父を、冷えぬようにと母の肩掛けを織らせる父を知る自分には、衝撃以外の何物でもなかった。

母の葬儀。参列もそこに城の奥で吼えるように泣く俺を人々は母への哀惜の故とつたが、俺がまき散らすそれは悲しみではなくどうしようもない怒り故の涙だった。

そして、混乱極まった俺は、逃げ出した。

あまりにも幼い所業。あまりにも愚かな逃避。物心も付き分別もつく年頃だろくに、俺には微塵の思慮もなかった。これこそ正に、俺が赤金の血、聡明の女神の血を引かぬ証だろう。どれほど時がたとえ俺の愚かさには変わりがなかったが、それでもその当時、過去の俺はあまりに愚かだった。

なにせ、初めて自身が愚か者であると思ひ知るに到るまで、俺は実に一つの村を丸々滅ぼすという大過を必要としたのだから。

【夏の愚者】 - 1 赤金の少年（後書き）

王様が王様じゃなかったです。いや王様だけど（意味不明）

そんなわけで始まります、三角関係最後の一人アルヴィド編。何が大変だったって副題をつけるのが。順当にいけば【夏の男】なんでしょうが、夏の男とか言われると眩しい日差しの中サーフボードあたりを抱えて白い歯をきらめかせて笑う日焼けマッチョメンあたりしか思い浮かびません。真夏の夢男（と書いてヒーローと読む）みたいなノリというか。台無しです。そういえばこの間湘南行ってきました。どうでもいいです。

そんな入りの後書きから不憫な感じで。

おそらく一番長く一番不憫なお話になるかと思いますが、よろしく願います。

## 【夏の愚者】 - 2 雪ノ原の誓い

盗賊の闊歩する山岳、辺境部。

それらを定期的に巡回し、野盗達を狩る巡察騎士団。母の葬儀の余韻も冷めやらぬうちに、俺はその一つに無理矢理合流した。

時期王位継承者      と、みなされている      が突然押し掛けるなど、兵士達には迷惑以外の何物でもなかっただろう。寒さにも危険にも耐えると言い張ったところで、彼らはそれで済みはしないのだ。第一王位継承者に傷の一つでもつけば、どのような処罰が下るか。兵士達にどれだけの気苦労をかけたか、思い出すだけで周囲を慮ることができなかった自身の愚かさに溜息が出る。

けれど、怒りややるせなさ      実に個人的な、感情的な理由で追い詰められていた俺はそんなことには気づきもなかった。とにかくこの感情を何者かに押しつけたかった。王位継承者として、軍を思いのままにしたかった。民草の命を救い、あわよくば賛美され必要とされたかった。

俺の事を認めさせたかった!!

もはや笑う気すらうせる我儘な欲求。そのために俺は、さらなる愚行を積み重ねた。

山岳に居を構える野盗団。

そのアジトとは正反対の方向へ、逃がすなと、殺し尽くせと、ただ

ひたすら狩り立て追い詰めたのは誰だ？

窮鼠すら猫を噛むという。飢狼ならば言わずもがな。そんなことすら思いつかなかった自分。経験の豊富な騎士隊長の忠言すらしりぞけ、王城から出たこともないような甘えたガキが一体なにを偉そうに軍を率いたのか！！

仁篤じんとくの王と呼ばれた父王。

その優しさが、俺には甘さにしか見えなかった。妻と乳兄弟に裏切られ、その事も知らずただ王妃の喪に服す父！！血の繋がらないその男のやり様を、否定してやりたかった。

父王なら慈悲を示すだろう敵。敵には、悪には一片の慈悲も必要ないのだと証明してやりたかった。

しかし王は正しく、俺は間違っていた。

地図にも載らないような小さな村。そんなものがあるとは俺たちは知らず、しかし野盗は知っていた。

追い詰められた野盗により村人は皆殺しにされ、そして反撃にあったのか、多くの傷を負っていた野盗達も皆死んでいた。

結果、俺の愚かさの所為で一つの村が滅んだ。

雪が深々と降り積もり、惨劇の赤を無慈悲な白で覆い尽くしていく中、混乱と罪の意識に押し潰されそうになりながら一人、懲りずに今度は陣幕を逃げ出した俺は、そこにひとりの少女を見つ

けた。

白い白い雪の原に、独り。

それは深い藍色をした少女だった。年は、俺と同じか俺より少し幼いくらいだっただろうか。

少女は、雪の中にひとり、呆然と座り込んでいた。

自身の身体が冷えてゆくのににもかかわらず、死に近づいていくのにもかかわらず、ただ。

霜の巨人の血から生まれたのが炎の娘ならば、その藍色は霜の巨人の涙から産まれたのだろうか。そんなことを思ってしまったほど、深い藍色。氷の娘。

青ざめた頬は雪よりも白く、その双眸は藍に凍てつき。

それは、泣けない瞳だった。

俺は、思わず少女に向かって手を伸べた。そんな資格がないことはわかっている、けれどどうしようもなくやるせなかった。

「来い。一人は、寒いだろう?」。

口から出たのはそんな言葉。

彼女の村を滅ぼし、彼女をたった独りこの雪原に追いやったのは、この自分だと言っのに!!

突然の事に目を見開いた少女は、しかしその手を取ることはなかった。

一瞬手のやり場に迷った俺は、しかし寸での所で、少女の腕がもはや動かすこともできないほどに冷え切っているのだということに気がついた。

手袋をはずし、強引にでも少女の手を取る。

じんわりと吸い取られてゆく体温。このまま魂すら吸い取ってしまうってもいい。この少女にはそうする権利があるのだ。

そんな自己陶醉に浸りかけた矢先、ほろり、と少女の瞳から零れた雫に俺は動転した。

「泣くな」

今考えれば何の意味もない言葉だ。どころか、不遜な言葉だ。諸悪の根源たる俺が、彼女の悲哀を止める権利などあるはずもない。

けれど、他に上手い言葉も思いつかず、俺はただひたすらに少女の藍色の髪を撫でた。撫でる事しか、できなかった。

： いや。

俺は、ただの無力な子供ではなかった。次期にこの国を継ぐ立場にあるはずの者だった。

すぐに俺を見つけ馳せ参じた兵士達の様子からも、俺の身分は知れただろう。

「何故」、と視線だけで問いかける少女に、俺は告げた。国を荒らしまわる野盗の討伐、それに無理矢理、付いてきたのだと。

「何故」、こんどは囁くように口にした少女に、俺は嘘をついた。いずれこの国は全て自分のものになるのだと。全て自身が守ることになるのだと。

守りたかった。そして、守りきれなかったものがどうなるかを見ておきたかったのだ、と。

姑息な偽りに、かつて俺が自身の血を疑っていなかった頃に持っていた純粹な気持ちも汚れていく。

純粹すぎる藍の眼差しの前でつく嘘は、辛かった。

雪の冷たさに真っ赤になった俺の手。野盗に、村人に、俺に殺された人々の骸に雪をかけた。そんなものは償いになどならないと知っている。それはむしろ、自身の罪を覆い隠すための行為だった。それでも、せめて。

俺は、この唯一生き残った少女を守らねばならないと思った。

『連れて行つて』

その決意を後押しする、少女の囁き。

縋りついた弱々しい身体を抱きよせると、俺は大きく頷いた。

「わかった。お前はオレが守る。お前は、オレのものだ！」

偽りの“王子”という座。それでも、それがあれば、少女一人を守り切ることは不可能ではないはずだった。

少女を抱きしめた時、俺は誓ったのだ。

俺の愚かさゆえの罪

その証である少女を、俺の持てる全て

の力をもって必ずや守りぬいてゆこうと。

今度こそ、過ちを犯さないように。

鮮血を飲み込んだ雪の原で。

俺は、彼女を守れるほどの賢き王になろうと誓った。

【夏の愚者】 - 2 雪ノ原の誓い（後書き）

イルヴァの村を盗賊たちが襲った真相。

王様の過ちだらけの人生、手始めはこんな感じ。

【夏の愚者】 - 3 幸せな愚者

城に帰りつくなり、藍色の少女      イルヴァを自分の側仕えと  
するように要求した俺に、さすがに国王や大臣らは困惑した。まあ、  
当たり前だろう。

それでも、俺が頑なに自分の言を曲げなかったこと、事のいきさつ  
やイルヴァのか弱げな容姿      何より世継ぎの王子が再び失踪  
してしまう事を恐れたお歴々の説得により、藍色の少女イルヴァは  
俺の側仕えとして迎え入れられることとなった。

単なる侍女でなく側仕えとしたのは、単純に“王子”たる俺に近け  
れば近いほど安全が保障されるだろうと考えた結果だった。だが、  
イルヴァはその実俺の予想をはるかにこえて優秀な側近だった。

宮廷作法や国の歴史、地理、兵法、周辺諸国の言語、王家と貴族の  
系譜、紋章学の基本、国際情勢、面倒な儀礼講義、学術講義、果て  
は剣の鍛錬まで。

イルヴァは、俺が向かう場所ならば、行うことならば、どのような  
ものにもついてきた。

今まで同じ年ごろの学友を持たなかった俺はそれが異様に嬉しくて、  
楽しくて、結果どこへいくにもイルヴァ、イルヴァ、と藍色の少女  
を連れて歩くこととなった。

そうして、そう時間がたたないうちに少女      イルヴァは、俺  
に最も近い存在となった。

面倒臭い儀礼の話、父王陛下の愚痴にみせかけた尊崇の念、離宮の

料理人の作る美味しいおやつの話、宴席での異国の客人の話  
いずれ王となる苦悩の断片。

俺が王子などではないという一つを除き、なんでも話した。冬の長い国で、王城自慢の常に花の咲き乱れる庭で。

「アル、アルはいずれこの国の王さまになるのでしょうか？」

「ああ、なる。」

なりたい。大事なものを全て守れる、正しき道をゆく、賢い王に。

「

「ええ。……あなたなら、なれる。絶対、なれます。」

アル。わたしの王さま。」

微笑む少女に、あの日、雪の原で見た憂いはもはやなかった。  
そっと、約束するように今度は自分から俺の手を取った白い手は、  
ほんのりと柔らかく温かった。

幸せだった。

だから、俺は信じたのだ。俺は正しかったと。

イルヴァの村を滅ぼしたのは、確かに過ちだった。俺は愚かな子供  
だった。

けれど      あの時、イルヴァの手を引いた事だけは間違っ  
てはいなかったのだと！

「わたしの王さま」、そうはにかみながらも嬉しそうに微笑む藍色の少女に、俺は己の出自の不義を悩むことをやめた。

俺は愚かだった。俺は王の血を引いてはいなかった。

けれど、愚かならば賢くなれば良いことだ。不義の子であるというのなら、誰もそのような事に気付かないほど英邁な世継ぎ、君主になれば良いことだ！

イルヴァを、そしてこの国を守るほどの、ノルヴィークの始祖に並ぶほどの賢王に――！

そのために、俺は必死に賢人の教えを乞うた。箴言を紐説いた。

曰く。「愚者は明日行い、凡人は今日行い、賢者はすでに終えている。」

曰く。「愚者は原因を裁き、賢者は原因を討議する。」

曰く、曰く、曰く……

そして

『 愚者は己が愚者であると知らず。己が愚かであると知る者は賢者である。 』

巡り合ったこの箴言をどれほど痛切に胸に刻んだか。己に言い聞かせたか。

それに慰めを見出した点で、己は変わらず愚か者であったけれど。

そして、ある日父王の元側近

俺の家庭教師は、言った。

「愚者は全てを鵜呑みにする。

けれど、賢者は全てを疑うものです。」

“何故”、その言葉がなければ、全ての真理は見えてこない。  
そう、もっともらしく言った男に、俺はすんなり頷いた。

誰をも疑え、そうだ。その事もうとづくに知っている。

兄弟のように育った男さえ、思いやった妻さえ信じるに足りないということを、証明しているのが正に不義の子である俺の存在だったのだから。

母の命日、花の咲き乱れる庭園で零した俺の涙を、イルヴァは何も言わずぬぐってくれた。

彼女が哀しみの雫だと思っただろうそれは変わらぬ怒りによるものだったが、それでも良いと思えた。

イルヴァを守る、この庭園を守る、この国を守る  
全てを叶える、賢き者となる。

けれど、そんな夢が現実に叶うわけがない。

俺は変わらず愚かなままである、そう気付いたのは、やはり全てが手遅れになってしまってからだった。

【夏の愚者】 - 4 悔恨、剣と藍色、

…  
根本的な過ちに気付いたのは、イルヴァが自主的に剣技を習い始めたときだ。

武術の師よりその事を聞き及び、イルヴァを呼びだした時には、すでに少女の長い髪はぱつぱつと肩にもかからないほど切られてしまっていた。

稀有な藍色、宵闇のように艶やかな、少女らしい華奢な肩にさらさらとかかっていた髪が。

その事を問い詰めた俺に、イルヴァはこともなげに答えた。

「貴方の傍に居るには、不要なものです。」  
と。

… 俺は、愚かに過ぎた。

守ると決めた少女。よかれと思って与えた第一王子の側近という座は、その実城内で最も過酷な座であった。

国を継ぐ者には文武を求められる。従者には、それを支えるだけのさらなる教養と武技が求められる。

血族の後ろ盾を持たず女であるイルヴァならば、なおさらのことだ。

お飾りの女官にしようにも、俺が連れまわした所為ですでにそれもできない。

イルヴァの剣の筋は良い、あるいは百年に一人の逸材だと、そんな讃嘆の言葉を聞きたびに、俺は自身の愚かさを詰ってやまなかった。

剣を扱うということ。

それは傷つける術を持つという事、傷つけられる機会を持つということ。

幸せな姫や淑やかな令嬢が決して身につけるはずのない技。

戦場でしか役に立たない技術。

少女の華奢な腕に巻かれる包帯を、白皙に残る痣を眼にするたびに、俺はどうしようもない後悔にさいなまれ、悲嘆に暮れた。

それまでの俺だったなら、そこでお終いだっただろう。

あるいは、そこまでのイルヴァの献身を、その意も図らず鵜呑みにし、それをただ俺に対する愛故だと傲慢にも思い込んだかもしれない。

《 全てを疑え。 》

「……何故だ。」

実際、その言葉が出てきたのは、奇蹟に等しかった。

ふるえた、不完全な声に、俺よりもよほど聡い少女は俺すらわからぬその意図を全て汲み取って答えた。

「あなたが、私の手を引いてくれたたった一人の人だったから。」

花の蕾のような唇。澄み切った声は、記憶を簡単にあの雪の原に遡らせる。

「あなたは、触れてくれた。大きな温かい手で。

慈しまれた事などなく、ただ雪の中とり残された私の手を引いてくれた。

ひとりぼっちのあの雪の原から私を救いあげてくれた。

アル、私の王さま。あなたのためだったら何でも出来る。

∴  
大好き。」

ふわり、はにかむように微笑んだ少女の頬には、痛々しい青痣。

違う、違うんだイルヴァお前を独りにしたのは俺なんだ、俺は王様ではないんだ、俺はお前を救いあげたのではなくお前をあの孤独の雪原に突き落とした張本人なんだ！！頭に充満する喚き声とは裏腹に、すうつ、と冷えてゆく脳の一部が囁いた。

“ ならば、あの時、一手を引いたのが俺でなければ∴∴∴∴∴  
∴∴∴∴∴∴ ”

確かに、イルヴァは俺の事を慕ってくれているのだろう。

だが、それにしてもその忠誠と献身は盲目的にすぎた。俺の為と負った傷跡、切り捨てた髪。欠片ほどの疑いも持たず俺を見る藍色の眼差し。俺以外に向けるその凍てつく青さ。

脳裏に浮かんだのは、親鳥を食い殺した鷺を親と思いこむ、産まれたばかりの小鳥。

刷り込み。俺は愕然と思いつた。

あの極寒の地で、心身共に極限の状態で、目の前の少年一人しか縋るものがなかった少女。

もし、今俺が自身の出自やあの村の顛末を語っても、イルヴァは俺を責めはしないだろう。それはすでに確信だった。

イルヴァは俺を責めない。だから、俺の所為で滅びた村のことで、イルヴァに赦しを乞うこともできないだろう。断罪されることもない。だから赦されることもない。

藍色の双眸はあの日、全てが死と雪に支配された凍える世界で、唯一の温もりに縋りついた少女のまま。俺だけを見つめる、俺だけを信じる、俺だけが存在できないそんな世界のまま。

ずっと二人でいた。誰も寄せ付けなかった。あの雪の原から手を引き続けた、その結果が　　これだ。

「イルヴァ……」

「そんなに、お見苦しかったですか？この髪は。すみません、なら、誰かに髪を借りてでも…」

「いや。」

伸ばせ、と言えば伸ばすだろう。俺の為に。俺の言の通りに。だが、それでは意味はないのだ。

「…いや、少し驚いただけだ。私は、お前の藍色を気に入っていたから。」

だが、その髪型も似合っている。」

なんとか微笑むと、俺は梳くことすらできなくなった藍色の髪をせめて撫ぜた。

それに心底嬉しそうに微笑む少女が、哀れでならなかった。

【夏の愚者】 - 4 悔恨、剣と藍色（後書き）

マダオ陛下ことアルヴィドから見たイルヴァ。

間違っではないのだけれど、とりあえずこれは愚者の視点です。

## 【夏の愚者】 - 5 愚者の玉座

そして、イルヴァと出会って八年。母の死と己の大過より八年。

冬の病をえた王は、あっけなく死んだ。母亡き後、新たな王妃も迎えず寵姫すらおかず、赤い髪の俺だけを王家の系譜に残して。

病に臥せる王に呼ばれ、近衛も側近も遠ざけ、二人、かつて母としたように言葉を交わせた。

仁篤の王アルトゥル。正統の嫡子を残せなかったノルヴィーク王。そしてその事も知らず、今、自分を裏切った女の後を追おうとしている男。

最後に問うたのは、一言。

『父上。』

賢君とは、いったい如何な者でしょうか。』

導いて下さい、幸せな愚者よ。それでも俺よりはきつと賢い王よ。偽りの王孫である俺に、この北の大国を治める叡智を。

俺の問いに、何事か考えるように唇を閉じた王は、しかしそれほどしないうちに口を開いた。か細い呼吸の元、それでも応える。

『私は賢哲ではなかった。だが、これだけは言える。』

…愛を疑うことは、愚かなことだよ。アルヴィド。』

一言。その一言に、俺は目の前が真っ赤になるほどの激情を覚えた。哀惜侮蔑憤怒絶望、数え上げればきりが無い。

それきり、抗弁の間すら与えず穏やかな吐息だけを残して瞼を閉じたノルヴィーク王家最後の王に、俺は噛み締め血の滲んだ唇で、告げた。

「さらばだ、ノルヴィーク国王アルトゥル・マティアス・アレニウス。」

貴方の王国はこの俺が篡奪する。」

かくて、王国は誰も知らぬまま奪われる。

断罪の代わりに祝福を、怨嗟の代わりに歓呼を、投げるべき石の代わりに極彩色の紙吹雪を。

卑しむべき罪人に王の座を。

雪の白をも塗り替えるほど、深紅の旗の舞う戴冠の儀。

俺が王国の宝冠を戴くと同時に、イルヴァもまた、女として初めて近衛隊長の位を得た。

数ヶ月前、王都の剣術大会で名門フォルクング家の若者をも降して優勝した彼女は、名実ともにノルヴィーク一の剣士となったのだ。

大会上位の者は王宮に召し抱えられる。見目の麗しい者であれば、特に近衛隊に。

しかし、それまで女騎士の存在しなかった近衛隊に、当然ながら女物の鎧があるわけもない。また、伝統として名家の子息と大会指折りの剣士には、特別な鎧を纏うことが許されていた。

白銀の鎧、武門の名門ヴィクトール＝フォルクングにも劣らぬように、その建前と共に、小賢しい思惑をもって俺は彼女に一揃いの武具を拵えさせた。

「お前が傷つくことがないように。何より、お前に似合うように。」

差し出したのは、深い藍色に繊細な銀の飾りを施した女物の鎧。勿<sup>わす</sup>れなくさ忘草色の絹の外套と相まって、姫君や貴婦人のドレスにも劣らぬ優美さの軍装。

そして同じく優美で華奢な、氷の精を模<sup>かたど</sup>った銀の剣。

麗しい 女の為の、“見目”に重点をおいた装い。

戦場などより宮廷の華麗さに似合うように作られた戦道具。

歓喜と共にそれを受け取った彼女は、気づいてはいないだろう。それが、“お飾りであれ”、そう願った末の装飾品だと。イルヴァを戦場になど出したくない、守りたいと願った末の悪足掻きだと。

しかし、俺はやはりここでも失敗してしまった、と心中で吐息をついた。

銀の剣を手に、俺に跪くイルヴァ。  
さらに、揺れる藍色の髪。凜々しい藍色の瞳。  
歓喜と共に、冴え冴えと宣する。

『 国王アルヴィド・マグヌス・ティセリウス陛下。  
イルヴァは貴方と貴方の王国に、心よりの忠誠を。』

“イルヴァに、似合うように”。  
そう思つて俺が手ずから作らせた鎧は、あまりにも彼女に似合いすぎた。やましい思惑でそれを与えた俺が、思わずそれも忘れて見惚れてしまうほど。

そして俺の卑怯な策謀、憂い、願いを嘲笑うかのように、イルヴァはやがて“青藍の戦乙女”の二つ名で呼ばれるようになる。

【夏の愚者】 - 5 愚者の玉座（後書き）

フレイア編では「どうでもいい」と一蹴された白銀の兵士の本名初登場。

ヴィクトール＝フォルクング。大層な名前です。

そして失敗続きの陛下。副題からしてあれなので、まあ仕方ありません。

## 【夏の愚者】 - 6 東方領伯の死

東方領伯が死んだ。

そう、知らせが届いたのは、俺が即位してから三月もたたぬうちだった。

母の不義の相手、俺の実の父。近いうちに消さねばなるまいと思っていたため、その事自体はむしろ好都合だった。

問題は、それが亡くなったのが、オースティンとの小競り合いの最中だったということだ。

国王が死に、まだ年若い王子が王位につくにあたって、隣国がちよっかいをかけてきた。その事は当然のものとして想定済みだ。

前国王アルトゥルには世継ぎは俺だけであり、俺自身は実に健康、表向き俺に張りあえるほどの血統を持つ者もない。継承権争いやそれに付随した派閥争いはほぼ皆無。

代々の王を支えてきた重臣も健在であり、フォルクングの後継ぎを筆頭に若手の貴族達の層も厚い。さらに言うならば、世継ぎとしての俺自身の評判も悪くない。当たり前だ、本来王の血統でない俺が王位を継ぐにあたって、どれほどの努力を重ねたことか。

そして今年は冷害もなく、民草の暮らしや穀物庫の中身も安泰だ。紛れもない北の“大国”ノルヴィーク。ちよっかいをかけるにしてもせいぜいこちらの様子を探る程度、難癖をつけて小さな土地の一つや二つかすめ取れば上出来程度のつもりだろう。

そう、思っていたところでの東方領伯の死だ。

その名の通り、山脈を境に東国オースティンと領土を接する要地の

それが小競り合いとは言えオースティンの軍との交戦中に死んだのだから、城内には確かに色めきたった。

「オースティンの暴王」「喪も明けぬうちになんと無礼な」「東国の蛮族使いめ」「こちらが年若い王だからと」「卑しき血統」「王位の篡奪者はこれだから信用のおけん」「侮りおつて!!」

彼らは、オーステイン王オストヴァルドが王位継承の混乱について東方領伯を謀殺したのだと半ば信じこんでいた。だが、果たして？

果たして、一何故小競り合いごときに東方領伯が自ら出張つていったのか》……………

……………？

戴冠の儀は前王の死後間を開けずに行われた。国王が病に臥せつていた当時から、様々な権限や指揮系統は徐々に俺に受け継がれていた。盛大なる葬儀には、俺の指図が遠方まで伝わる事を確認する意味合いもあったのだ。もちろん、東方領からの書簡等も正常に俺の手に届いている。

俺の意を仰がず、さらに“小競り合い”と称されるほど小規模な衝突に、東方領伯自らが赴く意味が分からない。

日々過激な主張へと成り替わってゆく一派を宥めながらも、俺は事の真相を探るために信用できる人間を東方領へ送ることを決めた。

《全てを疑え。》

そう心に刻み、絶やさぬ微笑の下で誰にも心を許さぬ俺の猜疑を逃れえるのは、ただ一人イルヴァしかいなかった。それは、人が己の腕の働きを疑わないのと等しい。

相変わらず従順な少女。それがあの雪の原の呪い、あるいは暗示の所為であれど、良い。

むしろそうあればこそ、彼女は決して俺を裏切らないと確信できた。うつろい易い“愛”などよりよほど強固な絆。

「行ってくれるか。」

一度は守ると決めた少女を、謀略と寒波渦巻く危地へ送り込む。唇を噛みながら、それでも言った言葉に。

「勿論です。」

国王アルヴィド・マグヌス・ティセリウス陛下。

イルヴァは貴方と貴方の王国に、心よりの忠誠を。」

近衛隊長の位を授けた時とまったく同じ言葉と共に、彼女は微笑んだ。

山脈と接する東方領は未だ寒波が激しいだろう。女の細い身で、さ

らに密偵として俺の庇護もなく、東方領伯の一味とオースティンの兵らという敵しかいない地へ赴く。その艱難と辛苦を、彼女は紛れもなく理解していたに違いない。

それでも、一刻も早く事の真相を解明しなければならぬ。俺とこの国が誤った道へ進まないように。

ノルヴィークと俺の運命は、まだ年若い少女に託された。

【夏の愚者】 - 7 王殺しオストヴァルド

そして、イルヴァは決して俺を裏切らなかった。

馬を三頭潰して届けられた書簡。そこには、見慣れた精緻な筆致と簡潔な言葉。

『伯の死は雪崩によるもの。』

東方領伯にオースティンとの密貿易の罪科あり。』

添えられたのは東方領伯の印のある端書きと目録。

イルヴァには、昔から人の嘘や悪意に聡いところがあつた。彼女が盲信する俺以外の誰も、彼女の透徹とした瞳と冷徹たる声音からは逃れられない。

これで確信できた。小競り合いは、最初から東方領伯とオースティンが仕組んだ茶番。

東方領伯の死は、オースティンにとっても不慮の事態だったのだらう。

オースティンと争うことの無益さを訴え、兵を出すことは断固として許さないと主張した俺に、主戦派の発した「ならばどうされるつもりか」という問い。

その答えとして、俺はオースティン王オストヴァルドに一通の書簡を送った。

“正式にオースティンとの交易を始めたい”、という旨を。

そう、やりたいのなら、こそこそとやるのではなく堂々とやれば良い。

今までオースティンとノルヴィークの国交が途絶えていたのは、単に前王の意向によるものだ。

姓すら定かでない生まれから成り上がり王位を篡奪した“王殺し”、オストヴァルドに対する恐怖と侮蔑。“正統王家”ノルヴィークとしての意地。ひたすら波風がたたないことを望んだ前王らの保守的な体制。ついでに峻厳な山道。

しかし、王殺しから約四十年。ますます栄えるオースティンが、暴王オストヴァルドの類い稀な手腕を示している。すでに富を積み上げ教皇から戴冠を受けたオストヴァルドをあくまで認めずにいるのは、単に意地を張りすぎて機会を逃してただけだ。

国交を正すならば、ノルヴィークの王位が俺に変わった、今こそ絶好の時。

ただし、関税の一部と経路の整備の負担はノルヴィークの有利になるようにさせてもらっつ。

『雪は敵味方問わず殺すもの。』

伯の死は不幸な事故であつた、と。

末尾のその文から、果たしてオストヴァルドは全てを読み取つた。

戦を知らぬ弱腰な青年王、そんな批判も上がったが、結局オースティンが彼ら主戦派の予想以上にあつさりとその要求を受け入れ、さらに速やかに国境から兵を引いたこと。

そして密かに突き付けた密貿易の証により、言葉を濁していた東方領域代が正式に伯の死の直接の原因を表明したことによつて、俺の評価は“十万の兵によらず一通の書簡で争いを収めた英邁な王”へと一転した。

同時に今まで曖昧なままになっていた国境の再設定も進め、オースティンとの交易が本格化するにはそれから二年以上もかかったが。それでも、栄えるオースティンとの交易は産み出すものが多かった。さらに言えば、これがきっかけでオースティン王オストヴァルドとの書簡の遣り取りが始まつた事は、俺個人にとっては実に僥倖だった。

“王家の血”を持たない王、王殺しオストヴァルド。

その経歴通り型破りで狡猾、さらに現実的な王は、他のどの王族とも違う視野を持っていた。

王家が王家たる所以                      例えばノルヴィーク始祖伝承など、  
その実豪族が鍛冶師一族を使い鉋脈を切り開いた事実をそれらしく  
脚色した単なる開拓譚だ、と解釈された時は、眼から鱗がおちた思  
いだった。

『王などただ人にも成れる。だからこそ、己以外の王が産まれぬよ  
う、伝承で“王たる血統”、王たる資格を用意し、縛るのだ。

雪の猛威にして鉋山たる巨人。小人の斧ドゥーフという鍛冶師一族を傘下に  
収めた権力者。

そして、黄金の鉋脈                      王冠に寄り添うように在る、石榴石の鉋  
脈。炎の娘。

単純な喩え話だ。

見た事もない巨人や女神がいたとするより、そちらの方がよほど現  
实的ではないか？

鉋脈の経営者、赤毛のノルヴィーク王よ。』

過去幾度か、東方領に位置する鉋脈のために争いを起こした東の国  
の王はそう嗤わらう。

あちらからしたら単なる挑発か皮肉の棘を込めた諧謔のつもりだっ  
たのだろう。

しかし黄金と石榴石で飾られた宝冠を戴き、それにもかかわらず聡  
明の女神の                      正統な血を引かぬ俺には、それは一筋の救い  
ともいふべき言葉だった。

その後、当の女神の血を継ぐと標榜しているはずの子供から、『興  
味深い話だ。』と返されさらに話を強請られた彼の心中を思うと、  
少し可笑しくなるが。

このような調子で、書簡の遣り取りは続いた。

山道の整備、交易物資のリスト、国境の調整などにまぎれて、ぼつ

りぼつりと私的なものも。

もつとも、書簡を交わすうちにこちらに有利に設定したはずの関税が巧みに是正されるように絶えず誘導を仕掛けてきたのには大分辟易したが。

そして、ある日ついに付き付けた問い。

「賢君とは何か」。

返事は、今までで一番早かった。

『そんなお伽話の存在はしらん。ただ、愚者ならば良く知っている。  
“動かぬ者”だ。

愚かな事に気づかぬ者はどうしようもない。

だが、愚かな事に気づいてなおも是正しようとしなない怠惰な者は、  
それ以下の屑だ。』

前オースティン王家の暴政。

女狂いの王、浪費家の王妃、処刑が何より好きな王子達。

不満をため込み、怨嗟の呻きを上げるだけだった民を纏め上げ、誰も  
が恐れてやらなかった“王殺し”を背負ったのがオストヴァルド  
だ。

そして、その後のオースティンの繁栄。紛れもない英邁な君主、賢  
王オストヴァルド。

ノルヴィークの大掛かりな改革を決意したのは、その時だ。

代々に続く王家の中で、不要にもかかわらず放置されていたもの、利権がからみ肥大し腐敗したもの、必要にもかかわらず行われていないもの。

官吏の再編成、税制と流通路の整備、正確な縮尺の地図の作成、野盗の取り締まり。

今まで、怖かった。王の血筋でない俺が、代々のノルヴィーク王の積み重ねてきたものを壊してしまつて良いのか。俺に、その資格があるのか。このまま何も触れない方が、遥かに良いのではないか。

そんな迷いを、オストヴァルドの言葉は正面から打ち砕いた。

頭の固い老人達を説得し、汚れた金を貯め込んだ豪商の土地を追い、賄賂を貪っていた官吏たちの首をはね。

そして、即位三年目にして俺に与えられた尊称“賢王”アルヴィド。

叡智の酒に見立てた祝い、オースティン特産の蜂蜜酒ミードを満たした祝杯を手に、俺は居並ぶ重臣と誇らしげな騎士たち、歡呼する民草に向かつて、微笑んだ。

東方領伯、我が父の死は、不幸な死だった。

そして俺にとっては、あまりにも幸運な死だった。

【夏の愚者】 - 8 最後の麗日

“賢王アルヴィド”。

国も落ち着き、そんな呼び名が当然のものとなった頃。

「花祭、ですか？」

数秒前俺が発した言葉を、澄んだ少女の声が繰り返した。  
城下に忍んでゆく時の為の古びた外套、その他の小物を手に取りながら、繕わぬ鷹揚さで「そうだ」、と答えれば、

「花祭なら、毎年ご覧になってらっしゃるでしょう。」

そう、たしなめるような言葉を紡いだイルヴァもまた、色褪せた庶民の装束を取りだしたところだった。

そう、わかっている。イルヴァが俺に逆らうはずがない、俺から離れるはずがない。

「毎年、と言っても王城から見下ろすのと祝辞をあげるくらいじゃないか。」

戴冠前ならそれでも教会までの道程を楽しむくらいはできたが、父王は玉座か、設えられた宴席から一步も動く事はなかったぞ。

私も三年間は我慢した。

が、そろそろ限界だ！あの浮かれた陽気の中で、何が楽しくて石像のように笑っていないければならない！！」

一人称をオレから私に代えたのはイルヴァを連れ帰った直後あたりからだっただろうか。それでも、内心の一人称は変わらないまま。

おそらく、こういう時の拗ねたような眼差しも変わらないままだったのだろう。

くすり、とイルヴァが笑いを噛み殺すのが聞こえた。

「それに、“歌姫”だ。」

我知らず浮かれた声で、花祭に興味をもった真の理由を言う。

「歌姫？」

鸚鵡返しに聞き返すイルヴァの声を聞きながら、よく晴れた窓の外を見やった。

「そう、最近評判の歌姫がいるらしい。どこの者とも知れないが、とにかく素晴らしい歌声と可憐な花のような風情の持ち主だとか。花の歌姫だか春の女神の娘だか、すでに民らに随分と愛されているらしい。花祭が終わるまで、広場で歌っているときいた。是非とも一度見てみたい。」

春の柔らかさをおびた蒼穹を見上げながら、同じ年ごろのごく普通の青年がもつような他愛のない憧憬をこめて語る。

“春のような、花のような”。

別段、その噂の全てを鵜呑みにしたわけではない。けれど、少々浮かれ遊ぶためにはそれは恰好の口実だった。

花は、好きだ。意味はなくとも、その場にあるだけで価値がある。安らぐ。

歌も、嫌いではない。なにより、民らが喜び楽しむのは好ましい。

「ほら、手伝ってくれ、イルヴァ。」

せかすようにイルヴァに目を向けると、整いすぎて冷たくも感じるその相貌が、笑みにほころんだ。

「はい、アル。すぐに。」

頑是ない子供の様な俺に、櫛と色粉を手には笑う。

そして俺は椅子に腰かけ、髪を弄うイルヴァに全てをまかせた。

どうしようもなく目立つ赤毛に色粉を塗り、櫛でくせをつけてゆく。無防備に晒された急所。頭に、首に、触れる手。イルヴァ以外の誰にこんなことを許すものか。そもそも彼女以外の者であれば、背後すら取らせはしない。

「楽しみだな。」

「…ええ、とても。」

頬にあたる春の柔らかな風、耳元には笑まじりの澄んだ声。

凄惨な過去と現在進行形の罪の上に成り立つそれは、愛しいと、そう錯覚してしまうほど穏やかなものだった。

## 【夏の愚者】 - 9 花祭の道化

城下は常に人でにぎわっているが、それでも春の近づくこの一時は格別だ。

霜の巨人の名を冠するノルヴィーク、北方に位置する冬の国。年のほぼ半分を雪に閉ざされるこの国の民らは、春の風と花々を殊更に愛する。

春の美しさを賛美し、夏を敬愛し、秋の実りを慶び、そして冬を畏怖することを知る民。異国や異民族の侵入を防ぎ続け、巨人の盾と呼ばれてきたこの国の厳寒だが、それは雪がこの国民よりも侵入者の方をより多く殺すというだけにすぎない。敵であるのが味方であるのが、雪の猛威は平等に人を殺す。

東方領伯を死に至らしめたあの冬の日のように。

冬の終わった安堵と春を迎える喜びが、活気となってこの国を覆っているのだ。

「相変わらず見事なものだな。」

顔の上半分を覆う祝祭の道化の仮面は、俺の赤金の眼差しもある程度隠してくれる。

色とりどりの布や花で飾られた都や楽しげに立ち働く民らを見渡して、俺は傍らの少女にささやいた。

「そうですね。花に埋もれるような街のなんて綺麗なこと。」

聞きなれた、素直な声が返る。

目立つ赤い色彩を隠した俺の傍らには、やはり目立つ深い藍色の髪を隠すため、ありふれた金髪の鬘を被り市井の女の装束を纏ったイルヴァの姿。似合わないとは言わないが、元の鮮烈な藍色を知っている身としては、やはり彼女には物足りない色味だと言わざるをえないだろう。

けれど、ただの女のようなその金髪の長さは気に入っている。

いっそ、長い金髪やスカートの似合うただのありふれた少女だったのならば、イルヴァはもう少し幸せになれたのだろうか。

家々の窓辺には花が咲き乱れ、春風に極彩色の布がひるがえる。数十歩ごとに花束を売る花車が並び、そのどれもに人が群がっていた。街頭で焼き菓子を焼く甘い匂いが漂い、中には鳥籠を並べ、小鳥の歌をきかせる屋台もある。

気の早い誰かがまき散らした紙吹雪の混じった春風に、イルヴァはなびいた長い金髪を抑えた。

絡まってしまわないか、手を伸ばしかけた先に可愛らしい飾りを見つけて、俺は小さな笑声を上げた。

それに、顔を上げるイルヴァ。ぱちぱちと瞬きをする、事態を理解していない様子にさらにこみあげる笑みを抑え。

「イルヴァ、ついてるぞ。」

とんとん、と自身の頭を指し示す動き。

それによろやく気付いたのか、慌てて頭に手をやるが、常とは違う髪の感触や長さに戸惑っているらしいイルヴァに、今度こそ手を伸ばす。

そのまま、撫でるようにしてやれば、案外あっさりと色紙の欠片は滑り落ちた。

「そのままでも似合っていたがな。」

そうだ、後で花冠でも買ってやろうか？」

珍しく浮かんだ名案に

「……昔は、花祭で買つものと言つたら甘菓子くらいのものでしたのね。」

返つた、昔から俺を知る故のささやかな逆襲。それが単なる誤魔化しにすぎないことは、いくら鈍い俺にでも分かることだった。

再び歩きだす。偽りの長い髪をなびかせるイルヴァを連れ、歩く束の間の祭に浮かれた街は、やはりひどく美しかった。

例え俺がすれ違いざまに袖口へ書簡を滑り込ませた旅装の男から、代わりに受け取つた羊皮紙の断片がどれほど薄汚れていても。

それは、官吏を監視させるために俺が密かに雇つた間者だった。

元からあるノルヴィークの諜報組織とは別に、俺が自らの手で作り出した監視者達。雇つた相手も、国王が直接の取引相手だとはまさか思つまい。

### 《全てを疑え》

俺の中に生き続ける箴言の一つ。自分と、自分自身の右腕たるイルヴァ以外の、誰をも俺は信じない。

そしてそれこそが若く愚かな俺が“賢王”などを演じていられる真の所以だ。

にぎやかな祭りの光景の中、イルヴァ以外の誰も気づかない取引にふと愉快になつて俺は振り返り笑つた。

返るのは、苦みのほとんどない苦笑。長い髪がいろどる輪郭は、まだどこかあどけなさを残しているようにも見える。冬の高い青空のよう澄んだ藍色の瞳。

（ 一番見事な花冠を売る屋台は、どの通りにあったか。 ）

もつとも、イルヴァならばどんな小さな花飾りでも、俺の手によるものならば喜ぶのだろうが。

そんな浮かれたことを思いながら、俺は彼女を付き従え広場へ向かった。

そして俺は、イルヴァへと花冠を贈る機会を、永遠に失くすこととなった。

【夏の愚者】 - 9 花祭の道化（後書き）

次回にはあれがです。

：

響いているのは、歌だった。

花の香が匂うように春風にのってどこまでも広がってゆく、美しい歌。

歌っていたのは、女だった。

白亜で作られ、すり鉢状になった広場。花と人で埋め尽くされたところで、まさに花の精のような少女が歌っていた。

珍しい、染めているわけでもないらしい薄紅色の髪に、春の湖のようあおみどりな青翠色の双眸。

華奢でいかにも柔らかそうな身体を白いドレスが包み、それが少女の清楚さを一層引き立てていた。

なるほど、“花のような”歌姫フレシア。

だが、俺がどうしようもなく心を揺さぶられたのは、彼女の容姿でも声でもなく、やはり“歌”だった。

柔らかな、甘やかな、少女のソプラノ。

十人に聞いても十人がそれは美しい歌だ、というだろう。

楽しげな、小鳥の、祭の、羊追いの、春の歌だ、と言っだろう。

だが、それは懺悔の歌だった。

ただ一人、俺にだけは理解できた。

それは、許しを乞う歌だ、と。

旋律が変われど詩が変われどそれは変わらない。

甘い声で、淡い微笑で、幸せを降り注ぐように手をのべながら。

許して、赦して、ゆるして、子供のように訴えかける歌。

それ以上に、見つけて欲しい、認めて欲しい、愛して欲しいと主張する歌。

一目で恋に落ち、歌の一節でそれはどうしようもない盲愛に変わった。

(一) 目

一目で良い、こちらを見てくれたら。

一節で良い、俺のためだけに歌ってくれたら。

熱病にうかされたような頭で、唯一明晰な視界の中で、ふと、彼女が此方を向いた。

心臓が跳ねるあがる。

何故。どうして。そんなことはどうでもいい。

目で良いと思った、それは嘘だ。できるなら微笑みを。

歌の一節で良いと思った、それも嘘だ。できるならその唇から零れる全てを。

そんな傲慢な願いが叶う事など、あるわけがない。

だというのに、彼女は、此方に顔を向けたまま、にっこり笑った。

淡く上気した頬。

小さな花弁のような唇から紡がれたのは、“愛”の歌だった。

優しく、高らかに。春に花開く乙女の、愛の歌。

たった一人のために咲き、馨り、散る、その幸せを歌った、全てを捧げる愛の歌。

愛しさに燃え立つような心臓に、大きく脈打つ鼓動が煩いほどだ。狂いかけた心臓によって、溶けた銅のような血が全身に運ばれる。今、俺の偽りの赤金の双眸は、真に溶鉱炉の黄金の色をしているだろうか。

（ 欲しい。 ）

思ったのは、ただ、一言。原始の、獣のような欲求。

「イルヴァ。」

傍らの少女に囁いた言葉は、微かに掠れていた。変わらず疑いなく

傍らにあるひんやりした存在に、俺はただ冷たい硬貨を落とし

「花冠を。」

とだけ、続けた。

やがて、戻った従順な道具の手には、春の花全てが編み込まれた花冠。

彼女に相応しく、もはや彼女以外の何物にも冠せられることはないだろう花冠。

『歌姫フレイア。この北の果てに咲いた至上の花よ！

春の女神の祝福が貴女の上にあらんことを。』

一つの歌が終わった時、花祭の道化である俺は、花冠を手に進み出た。

国王が道化にのみ許される祝辞と共に、恭しく捧る花冠。

喉はひりつき、腕は震えかけた。どのような貴顕を前にした時も、暗殺者を前にした時でさえも、これほど緊張した事はなかった。

花束も、衣装も、装身具も、甘菓子も、王都を訪れてより、誰からの贈り物も受け取らなかったという無欲な歌姫。

周囲の民衆が微かにざわめいた。

皆が固唾をのんで見守る中で、ふと、視界に薄紅色の髪が流れた。

大貴族の姫君よりも優雅にドレスの裾をひき、恭しく頭を垂れる歌姫。

王妃への戴冠そのままの手順で、俺は厳かに彼女の頭に花冠を載せ

……

顔を上げた彼女の表には、溢れ出るほどの幸福感があった。

頬に血がのぼる。俺は、今までこれほど美しい微笑を見たことがない。

これほど幸せそうな微笑を見たことがない。

民衆が歓声を上げる。けれどそんなものはどうでもいい。

今、目の前で花の様な彼女が笑っている、それだけでどこまでも幸せになった。

俺は、確かに幸せだった。幸せな道化、幸せな愚者だった。

三日後。

ほとんど眠れぬまま迎えた春祭り最後の日、淡い蒼穹の下、俺は再びあの道化の祝辞を言祝ぐこととなる。

「歌姫フレイア。この北の果てに咲いた至上の花よ！  
春の女神の祝福が貴女の上にあらんことを。」

その時、道化の男は赤金の瞳の王として。

差し出される黄金の花飾りは王宮への招待状として。

真紅の玉座。そのすぐ傍ら、侍る藍色に、花冠を贈る約束をしていたと思い出したのは、もう春の花も摘まれつくした様な後だった。

【夏の愚者】 - 11 嘘つきと愚者

花祭の終わりの日に、俺はフレイアを正式に王城へ迎え入れた。王を慰める楽師としてだ。

白亜の王城にも、厳しい顔をした大臣にも、困惑したような高官にも、好奇心に満ちた侍女達にも  
そして、俺にも、惜しめない笑顔を振りまいたフレイア。

俺は、その時確かに幸せだった。

愛しく想う少女の笑顔がそこにある、惜しめない笑顔を俺に向けてくれる、そしてこれからは俺の為だけに歌ってくれる。

俺は幸せな愚者だった。幸せな道化だった。

あるいは、あの花祭の道化のままでいられたら、俺は今も幸せだったのだろうか。

だが、一日目にして俺は悟ってしまった。

国王として正式な目通りを許した時、俺は歓待の言葉を述べた後真つ先にイルヴァをフレイアに紹介した。

『イルヴァ。私と王城を守る近衛の長を務める者だ。

私が最も信頼する側仕え。そなたと顔を合わせる機会も多いだろう。』

実際、その時俺はイルヴァをフレイアの護衛として付けるつもりだった。

俺が唯一信頼する右腕。王国一の剣士。そして、近衛隊唯一の女騎士。

「ノルヴィーク近衛隊隊長イルヴァと申します。  
以後、お見知りおきを。フレイア殿。」

どの貴婦人が纏うドレスよりも優美な藍色の鎧、どの騎士よりも凛々しい礼の所作。

腰には氷の精を模った銀の剣。

「初めまして、イルヴァ様！お会いできて嬉しく思います。」

答えたフレイアの声には、溢れるほどの慕わしさがこもっていた。  
薄紅色に上気する頬、潤んだような瞳。

それは  
紛れもない、恋する乙女の貌だった。

「なんて、綺麗な藍色でしょう…！髪も、瞳も。  
わたしは、これまでこれほど美しいものを見たことはありません！  
！」

白くたおやかな手が、藍色の手甲に覆われた手へ伸びる。  
一瞬、イルヴァはぎくりと身を震わせたが、結局突然のフレイアの成し様を咎めることはなかった。  
冷たく鎧われた手を、柔らかな生花でも抱くように愛しげに白い両の手が抱く。

そして零れた微笑みに、俺はついにはつきりと悟ったのだ。

あの日の歌は、あの微笑みは、フレイアの愛は  
この藍色の少女にこそ注がれていたものだったのだと。

ただ、

：

結論から言えば、フレイアは実に見事な嘔吐きだった。

それから、楽師達に、侍女達に、俺に向けるその笑顔には、一点の曇りも見受けられなかった。

俺とても、あのフレイアの、イルヴァを前にした“心からの微笑み”を見なければ、その笑みが偽りであるなど気付かなかったかもしれない。

その微笑は、困惑ぎみの重臣や貴族主義に凝り固まった高官達の心をも徐々に溶かしていった。

愛される嘔吐き、フレイア。

実際、真実を知った俺でさえ彼女を嫌うことはできなかった。

心地良い声、可憐な容姿、偽りでさえその微笑みは麗しい。  
花のように、その場にあるだけで愛される存在。

俺は、彼女を守りたいと思った。

大切なものを、今度こそ。あわよくば、いつか彼女の愛が自分に注がれるようになる日も来るのではないか、そう思ったのも嘘ではない。

彼女のための装束、彼女の為の位、彼女の為の離宮を作ると共に、彼女の護衛には武門の名門、フォルクング家の若者を付けた。

数多の兵達の中でも腕利きの、そして忠誠に溢れる者を。

最もその条件に当てはまるのはイルヴァであったが、まさか、愛しい相手の傍にイルヴァを  
唯一の恋敵を、置くわけにもいかない。

近衛隊を取り仕切るイルヴァに尋ねたところ、もつとも信頼できる相手だと答えたのが、その近衛隊副隊長であるヴィクトール「フォルクングだったのだ。

それには、フレイアの心を奪うイルヴァから、腹心の部下を奪うという陰險な心づもりも多分にあった。

フレイアが城に上がるに際し、“娘を溺愛している父母”とやらには莫大な金を支払いもした。愛しいフレイアが血族を思っただけに、くれるを防ぐためならば、屋敷の二つや三つ立つ程度の金など惜しくはないものだ。

もつとも、それが単なる下衆な強請り屋だと判明した時には、命ごと倍にして返してもらったが。

美しいフレイアの傍に、穢れた者共などもう二度と近づけるつもりはない。

「歌ってくれ、フレイア。お前の声をきくことが、私の一番の安ら

ぎだ。  
」

娼館の老人の裁判の結果と資産の目録を確認し、書類仕事で疲れた身体に、フレイアの優しい声はまるで染み入るようだった。

【夏の愚者】 - 12 花と愚問

歌姫フレイアは歌う。

そよ風の歌、糸紡ぎの歌、若葉の歌、小鳥の歌

愛の歌。

俺の前で、望めば触れることもできるほど近くで。

けれどそれは相変わらず、ただ一人のためのものだった。たった一人に伝わるように。たった一人が安らぐように。

俺は聞く。

俺の背後に控える藍色の少女、そのたった一人のために捧げられた、愛の歌。

彼女を恋うる者として、俺は、彼女に何でも与えようとした。

宝石、精緻なレース飾り、異国の絹織物、季節外れの果物、蜜の酒、愛らしい菓子。そして庭園を臨む美しいフレイアのためだけの離宮<sup>トリカゴ</sup>。その一筋の関心を買うためだけに。

けれど、結局得られるのはいつも俺のためのたった一つではなかった。

麗しい、微笑。侍女や庭師や騎士達に向けるものと、かわらぬ偽りの微笑。

本当は、彼女が一番望むものなど分かっている。

彼女が唯一欲しているものを、俺は知っている。そして、手にしてさえいる。

けれど、俺がフレイアの欲しいものを与えることは、絶対に不可能なのだ！

「  
：  
なあ、イルヴァ。」

久方ぶりに、藍色の少女と二人きりで向き合った時。国境へ送る交代の軍の編成を終えて、細かい書類を作成する彼女に、俺はあえて問いかけた。

「女には、何を送れば喜ぶのだろうか。」

あれほど彼女に愛されているイルヴァなら、女であるイルヴァならば、知っているのではないかと。

内心の微かな苛立ちや自嘲、醜い嫉妬を押し隠して問うた俺に。

「  
“陛下”からの贈り物であれば、なんであれ喜ぶでしょう、彼女は。」

返ったのは、淡々とした、臣下としての事務的な答え。

声の硬質さになどとくに気づいている。フレリアを迎えてより、俺がイルヴァを顧みる機会は眼に見えて減った。純粹にフレリアに心が傾いたのと同時に、そのフレリアが想うイルヴァに、俺を慕うイルヴァに、せめて子供の様な八つ当たりをしたくなかったからだ。彼女を傷つけたくない。

逆に言えば、距離をおかねば自分がどうしてしまつか分からないくらい、俺はイルヴァを疎ましくも思っていた。

「だから、困っているのではないか。」

金銀細工も、絹織物も、喜んでくれるが必ず『私には勿体ないものです』、と続けるのだぞ。私はただ彼女に笑ってほしいだけなの

に。」

フレイアの想いには、イルヴァはまったく気づいていないだろう。あの雪の原の呪いをえて以来、イルヴァがその眼に映すのはただ俺ひとりなのだから。

雪の娘イルヴァ。花の娘フレイア。

俺の愛を乞うイルヴァ。俺が愛を乞うフレイア。  
正反対の二人の少女。

「女性に贈るものと言えば、“花”ではありませんか？」

ぽつり、と落ちた呟きに、初めて俺は目の前の藍色に目を向けた。

「そうか…花か。失念していたな。」

「女性に贈るものと言ったら、真っ先に思い浮かぶものでしょうに。」

言って、茶化すように苦笑する。

その笑顔は、微かにぎこちなかった。相変わらずイルヴァは俺の前で素直すぎる。

「いや、当たり前すぎてだな。」

「そうか、花か…」

そう呟き、再び黙考する。

思い出すのは、あの日の花冠。幸せでたまらないと言った顔で笑っ

たフレイアの姿。

おそらく、あれはイルヴァが選んだものだから。  
けれど  
もしかしたら。

万一を求める心が暴走を始め、妄想を始める。

もし、笑ってくれたら。俺の手によるもので、彼女がああ笑みを見せってくれたら。

頭の冷えた所が囁く。「そんなことはあり得ない。」と。  
だが。

「お前は、花をもらえば嬉しいか？イルヴァ。」

珍しく浮き立つ心が、そんな一言を付け足させた。イルヴァの切れ長の瞳が丸く見開かれる。

「ッ、は、はい……。」

「そうか。……。」

そして再び思いに沈む。

あの日の、花冠の約束を忘れたわけではない。

もう、今更果たすこともできないが

：

微かに、礼を取る気配。藍色の姿が消えた後も、俺はしばらく少女達に贈る花について思いを巡らせていた。

【夏の愚者】 - 12 花と愚問（後書き）

まあこの後の展開はあれなわけですが。

【夏の愚者】 - 13 からっぽの掌

最悪だ。

俺と言う存在の全てはその一語に尽きた。

最低でも良いかもしれない。最低で、なおかつ最悪だ。自己嫌悪で埋まった脳内では、他の罵詈雑言を検索する余裕も見いだせない。

最悪。

受けて然るべき批判を、罵倒を、打擲を、得られない俺はせめて握りしめた掌を爪で突き破ることで、ちっぽけすぎる痛みを得た。

今日、俺がフレイアに捧げたのは一輪の薄紅色の花だった。

「お前に、よく似ていると思った。」  
考えて、考えて出てきたのがそんな着想と台詞だった。俺はつくづく頭が悪い。

だが、幾重にも淡い薄紅の花弁が重なり、殊更甘い香りのする花の一輪。その在り様は、あまりにも目の前の少女に似ていると思ったのだ。

柔らかな日差しの中で咲く花に、フレイアは目を見開いた。

「ありがとうございます、陛下。」

いつもと同じ微笑み。

それくらいで落胆はしなかった。けれど、フレイアが俺のその差し

出した手と花をそつと押し戻した時には流石に動揺した。

「けれど、わたしには勿体ないものです。」

そつと、眼を伏せ首を振る。幾度も繰り返された言葉。

それでも、俺から差し出されたものをあえて拒むのは、これが初めてだったはずだ。

「フレイア？」

微かに揺れる声の問いかけに、彼女は小さく息を吸うと、答えた。

「花は、いずれ枯れ朽ちるもの。」

それでも、ひとつの命をわたしなどのために手折り散らせることを、わたしは望みません。」

凜、とした声。

心優しい歌姫の言葉。

けれど、俺はその声の奥底に何か

苦々しい何かが渦巻い

ているのを、感じた。

気付いてしまった。

フレイアは、“花”を憎んでいる。

そしてまた、同じように一俺を厭わしく思っている《……………  
……………》。

理由は分らない。だが、それは俺を絶望に這い蹲らせるに足るほ

ど、確たるものだった。

「フレイア 本来に、お前は……  
姿や声だけでなく、心まで麗しいのだな。」

漸く花を引きもどし、俺は吐息と共に言った。

それは彼女に初めて向ける皮肉であったが それでも、俺  
は言い切った直後、眩しいものでも見るように眼を細めずにはい  
れなかった。

フレイアの笑みは、完璧だった。

その心に憎しみが存在すると知ろつとも、それはあまりにも慕わし  
いものだった。

愛される嘔吐き、フレイア。

嘘に塗れて産まれ、偽りで塗り固めた仮面を被る俺を、しかし同じ  
ように嘘に塗れた彼女は愛してくれはしない。

何故だ、と問う気などはない。

嘘に塗れても彼女は強く、そして俺はあまりにも卑屈だった。

「わかった。だが、私の中では真実お前に勝るものなどないのだ。  
何か、欲しいものはないのか？」

欲しいもの。

その答えなど分かり切っている。だが、刹那で良い、俺はこの期に  
及んで彼女の関心を買いたかった。

「ならば……その。」

わたし、イルヴァ様と、もっとお話ししてみたいです。」  
淡い唇が、予想通りの言葉を紡ぐ。

「イルヴァ……か。」

やはり、お前が想うのはあの藍色、ただ一人なのか。  
ふと、赤金の双眸を伏せた俺に

「駄目、ですか？陛下……。」

今まで何一つねだらなかったフレイアが、懇願するように言葉を重ねた。

初めて聞く声に、答えなど一つしかない。

「わかった、フレイア。」

お前の望みに応えよう。」

「ありがとうございます、陛下……！！」

頷いた俺に、微笑みを零し、抱きつかんばかりの歓喜と共にフレイアが言った。

イルヴァに向けられる微笑の、関心の、何百何千分の一か。

俺の得られる、それが今の精一杯だった。

…

だから、日の差す渡り廊下で銀の剣を携えたイルヴァを見た時、あまりの間の悪さに神と自分を呪ったのだ。  
そのまま、眼もあわせずすれ違えば良かった。  
だが、藍色の眼差しが、手の中の薄紅色の花をとらえた時。

俺の中の何かが、ぷつりと音をたてて切れた。

「お前にやろう、イルヴァ。」

そう言っただけで差し出したのは、薄紅色の花。  
藍の瞳が大きく見開かれる。映るのは、喜色、そしてそれ以上の困惑。

「ありがとうございます……アル？」  
躊躇いがちな声を遮る様に

「フレリアには、不要なものようだ。」

言い放った俺の言葉に、目の前のイルヴァが凍りついた。

「花は、いずれ枯れ朽ちるもの。それでも、ひとつの命を私などのために手折り散らせることを私は望みません」と。  
まったくあの慈悲の深さと優しさには感嘆させられるばかりだ。」

続ける、響きだけは柔らかい自分の声をどこか他人事のように聞いていた。これは皮肉で、復讐だ。意に染まぬ彼女らへの。それを知っていて、それでも俺の言葉は止まらない。

「だから、それはお前にやる。  
お前は、花をもらえば嬉しいのだろう？イルヴァ。」

知っている。本当は知っている。イルヴァが花を、と言ったのは純粹に花を美しいと思う故だと。

俺が拒まれたのは、純粹に俺が俺であるが故だと。  
それでも。

「陛下、下……」

微かに身じろぎしたイルヴァの腰で、剣帯に吊った剣がガチャリと揺れた。

俺の為にと、なんの躊躇いもなく幾つもの命を刈り取ってきた刃が。

それでも、知らなかっただろう、フレイア。

俺を拒むためのその言葉が、イルヴァという存在を否定する言葉になることなど。

俺は呆然とするイルヴァを置き去りに、そのまま王城の奥へと去って行った。

己の愚かさ、幼稚さ、吐き気がするほどの嫌悪、そして嫉妬を抱えて  
…

そして、俺はからっぽになった手のひらに爪を立てた。



【夏の愚者】 - 13 からっばの掌（後書き）

マ・ダ・オ！MA・DA・O！！

【夏の愚者】 - 14 春の呪い

その後、俺は「手折られる命が忍びないのなら」、と、王城の庭園を丸ごとフレイアに捧げた。

何も知らない振りをして、何も分らない振りをして。ああ、花祭の道化の仮面を取るのではなかった。思えばあの頃から、俺は彼女にとってあまりにも滑稽な存在であった。

相変わらずの微笑みで、フレイアはそれを受け入れた。というより、おそらく拒むほどのものでもなかったのだろう、彼女にとって。

北の国にあつて常に花の咲き乱れる王家自慢の庭園。かつてたった一人の藍色のみを受け入れた思い出の庭園。

そこで、俺は歌をきく。目の前には、花のような薄紅の色彩。閉ざされた庭園<sup>せかい</sup>に、二人きり。

相変わらず、その歌はたった一人のために 庭園の薄い扉一つを隔てた藍色のためだけに、歌われるものだったが。

それでも、俺はフレイアが愛しかった。

だから、俺を厭う彼女の願い通り、俺が王城を離れる時はイルヴァを傍に侍らせてやりもした。幾重もの侍女を置き、ヴェールで隠し、まさしく掌中の珠のごとく慈しんだ。

大切に、大切に。大切なものを今度こそ守り抜こうと。

そして、そんな俺を嘲笑うかの如く、フレイアは病に倒れた。

季節は、よりよって盛夏の折。緑が生い茂り、太陽が輝く生命の季節。

王たる俺を象徴する季節。

宮廷の典医はフレイアのその病を、癒すどころか特定することもできず、俺は即座に国中から医師や薬師達を狩り集めた。それらも皆役に立たないと分かると、一縷の望みをかけ流れの錬金術師や妖術師、下賤な異民族まで城に入れた。

フレイアの病を癒せる者であれば誰であれ良かった。乞われれば喜んで王冠すら授けただろう、フレイアの延命と引き換えに。

彼女を、失うわけにはいかない。失わせるわけにはいかない。守らなければならない。守ると誓ったのだ、今度こそ！！

俺の憤りを周囲の人間は悲嘆と受け取った様だったが。固く喰い締めた唇、祈る様に瞑目した瞳、それらは全て運命への、残酷な神への煮え滾るような怒りを押し隠すためのものだった。

短い夏はあっという間に去り、秋が訪れ実りを喜ぶ声もないまま気付けば冬も近い。

ただ焦燥だけがつのる日々に、ある時、檻褸を纏い骨片や錆びた鈴を巻き付けた異民族の老婆が訪れた。

歌姫の病を癒せるのであれば誰でも良い。魔女か化け物にしか見えない老婆は、見た目に反して手慣れた様子でフレイアを診ると、やがて人払いを望んだ。

危険だと洩る近衛を締め出した俺に、そして老婆は呪われた沼地に鳴く蛙のような声で、囁いた。

「毒を

…

胎の中の子を墮ろす毒を受けた女が、陥る病状によく似ている」

と。

一瞬、何を言われたのか良く分からなかった。

フレイアの胎に子はいない。

今まで何人もの医師達が彼女を診てきたが、そんな事はさらとも聞いていない。

常に数人の女官を侍らせ離宮を近衛に見張らせ、何よりフレイア自身<sup>オレ</sup>が男というものを拒んでいる。最大の庇護者であるこの王さえ。

ならば、フレイアはその毒をいつ飲んだ？いつ受けた？

出任せを、と口を開こうとした俺の前で、産婆であり娼館につとめたこともあるという老婆は、たどたどしく続けた。

「女の胎の中で、その毒を受けた子がもし死に損ない産まれてしまつたら

ああなるかもしれない。」

今度こそ俺は愕然とした。

他でもない、かつてフレイアが殺されようとしたという事実になつた。

そして、産まれる前に受けた悪意、そんなものが今更彼女を蝕んでいるという現実。

なんとかその毒を癒す手段はないのかと詰め寄る俺に、化け物のような老婆はゆるゆると首を振った。

「死ぬはずの子だったのだ。」

と。

目の前が怒りで真っ赤に染まった。  
と、思えばそれは老婆の噴きあげる血だった。気付けば俺は、その老婆を斬っていた。

イルヴァを介さず自身の手で人を斬ったのは、久方ぶりだった。  
熱い血潮はほんの断片だけだが、俺の怒りを昇華してくれた。手に残る、人を斬り殺した生々しい達成感。

騒ぐ近衛達を黙らせ、不吉な老婆の死骸は捨てさせた。八つ裂きにでもしてやりたかったが、今はそんなものに構う時間も惜しい。

湯を浴び血を流し衣を変えた俺に、首を傾げるでもなくフレイアは珍しく俺より先に口を開いた。

「先ほどの医師様　　老婦人は、どうなさいました？」

一瞬身が竦んだが、フレイアの双眸に責める色はない。ただ純粹なその疑問に、俺は微かに眼を伏せて答えた。

「やはり、今までの医師と同じだ。“この様な病は知らない、役に立てず申し訳ない”と去ってしまった。だが、何故だ？」

問い返せば、フレイアは珍しく逡巡したのち、微熱のせいでやや乾いた唇で、ぽつり、ぽつりと呟いた。

「いえ…いえ。あの方の付けていた鈴の飾りが、昔姉のように可愛がってくれた人がしていたのに似ていて。なんだか、少し懐かしくなっただけです。」

帰られてしまったのですね、と呟くフレイアを笑顔で慰めながら、俺は死体をイルヴァに拾わせてこなくてはと考えていた。

後日、老婆の鈴飾りに細工を加え、黄金で再現したそれに、フレイアは久方ぶりに顔を綻ばせた。

その微笑みに、無邪気に鈴を鳴らす様に、改めて思う。

フレイアの産まれなどどうでもいい。

それを言うならば俺は一体何なのか。単なる私生児だ。不義の子だ。王位の篡奪者だ。

大事なのは、彼女という存在。其処にあるだけで愛しいと思える芳しい少女。

彼女を、護る。たとえどれほど手を汚しても、何を犠牲にしても。俺は、その微笑みに改めて誓ったのだった。

【夏の愚者】 - 14 春の呪い（後書き）

病の真相

【夏の愚者】 - 15 二番目の願い

あの老婆以来、フレイアの“病”の元に気付く医師すらいないまま、瞬く間に秋は過ぎ無情な冬が来る。

身体の芯まで凍えさせるような厳しい冬。花祭の折には花に埋もれていた街が、冷淡な白一色に染まる。

冷たく澄みきった大気は肺に痛いほどだ。生物の存在を許さない酷薄さ故の清浄、それは俺が連れる藍色の少女の純粹さに通ずるものだ。

病に臥せて以来、流石に微笑みの陰りが増してゆくばかりのフレイアに、俺はついに見舞いにかこつけてイルヴァを引き合わせることにした。フレイアの目に触れさせるのは、実に約半年ぶりか。

「イルヴァ様……！」

フレイアがその藍の色彩を目にした瞬間零した笑顔は、本当に輝かしいものだった。

その一瞬で病など癒えてしまったのではないかと、馬鹿馬鹿しい願望を抱いてしまえるほど。

持たせた果物籠を手に、常の装った無表情で、それでも微かに沈痛に目を臥せるイルヴァ。

それにのみ目を注ぐフレイアの目を向けさせたくて、俺が求めてやまないものを得ながら淡々とした様子のイルヴァへ意趣返しをしたくて、そっと、フレイアの手を取った。

ミルクに一滴花の紅を落としたような色の、柔らかな手。

俺がその手を取ったのに、イルヴァに気を向けていたフレイアは一瞬反応が遅れた。

微かに見開かれた春の湖面のような瞳に、懇願する。

「具合はどうだ？フレイア。

寒くはないか？暑くはないか？喉が乾いてはいないか？苦しくはないか？」

何か、ひとつでも望むものは。俺に叶えられるものは。俺に求めてくれるものは。けれど。

「なりません、陛下。わたしは何によるものともつかぬ病を抱えた身。

うかつに触れて、陛下の御身にもしものことがあつては、わたしは……！」

返つて来たのは、そんな柔らかい言葉に包まれた拒絶。

一回り以上大きい手のひらから手が引き抜かれ、俺は何も残らない自身の掌に絶望した。

「フレイア……私は……！！」

空になった手のひらをギリリと握りしめる。  
言ってしまいたい。違うんだ、フレイア、お前の病は病などではな

い。墮胎の毒の所為だと、産まれる前の呪いの所為だと。だから、俺がお前に触れていけないことなど何一つないのだと。たった一つ、お前が俺を拒む心さえ除けば！

それら全てを辛うじて飲み込むと、俺は一つ苦しげな吐息をついた。

そして自身の後背に目をやる。それだけで、藍色の少女も、白銀の鎧姿も、姿を消す。  
飼い馴らす事の出来る聡明さをもった道具。

やがて、此处には、本当に二人きり。

「私は……無力だ。苦しむお前の、手を取ることすらできないのだから。」

我ながら悄然とした声で、顔で、俺は呟いた。  
実際、俺は打ちのめされていたのだ。運命と彼女の無情なことに。こんな様では同情さえも引けないかもしれない、そう思った時。

「いいえ、陛下。わたしは本当に陛下に良くしていただいています。心地よい寝台も、よく仕えてくれる侍女達も、気分の良くなる薬草達も、みんなみんな陛下の慈悲によるもの。」

あの、果物籠も　　本当に、嬉しゅうございます。」

ふわり、嬉しげにフレリアは微笑んだ。  
匂い立つような微笑。何より嬉しいのはイルヴァを伴って来た事だ  
ろうが、それでもその笑顔が嬉しくて、俺も苦笑混じりながら笑っ  
た。

「お前は本当に欲がないからな。

果実ぐらい、いくらでも持って来てやる。遠国のものでも、時季外  
れの物でも。

なんでもいい。

なにか欲しいものはないか？フレリア。」

皮肉を混ぜ込んだ柔らかな台詞を差し伸べ、けれど手を伸ばすこと  
はない。触れようとすることはない。フレリアが拒んだからだ。  
誠実さなどではない。自分が傷つくのが怖いだけ。

血が滲むほど手を握り込んだ俺に、数秒考え込むと、フレリアは予  
想だにせぬ凜とした声で、言った。

「“一番欲しいもの”は、決して人から与えてもらう事はできない

：

わたしの、姉…のように思っていた娘が言っておりまして。

それは、自身の手で掴まなければ意味がないから。」

自身の手で掴むことができなくても、他人から与えられたものでは  
意味がなから。

強い言葉。

嗚呼、彼女は諦めていないのだ。そんな身体で、こんな状況で。打ちのめされた俺とはあまりにも違う。彼女の美しさの根源。

思わず瞠目した俺は、その一瞬後、思わず微笑みを浮かべた。

「            ならば、私はいつかお前に、            “ お前が二番目に欲しいもの ” を捧げよう。

愛しいフレリア。」

そうだ。まだ終わらない。彼女は生を諦めていない。例えそれが俺以外の物へ向ける恋慕故のものだとしても。ならば俺も諦めない。いつか、俺が彼女の望む第一に成れるよう。

もしそれが叶わずとも、彼女が、欲して手に入れられなかったものを、俺のこの手で捧げられるよう。

微かな衣擦れの音と共に立ち上がる。花の香りのする鳥籠から、冬の匂いのする世界へ。

伸ばした背を、彼女が珍しくもいつまでも眺めていたのを、俺は感じていた。

その日から俺は変わった。

「次の冬は、越せないでしょう。」、怯えた藪医者言葉など知らぬ。

フレイアが諦めない限り、俺は諦めない。

治療の術を探し魔術師、魔女、異教徒をかり集め、一方で歌姫を呪詛したと囁かれた異民族の集落を滅ぼし。

遠く異国にまで兵を遣わし、医師達をさらった。ノルヴィークにならば他の地に求めれば良い。求めても応じない可能性があるのなら早々に自分のものにしてしまえば良い。謀略を張り巡らせ、隙を探り、挑発し、引きずり込む。

見かねてようやく訪れた南の国の使者を、俺は斬り捨てさせた。斬ったのは、俺の忠実な刃                   イルヴァ。

俺の為に寸秒の躊躇いなく人を斬ったイルヴァとは裏腹に、色めきたった重臣たちに、俺は肩を竦め「騒ぐな」と言い捨てた。愚か者は嫌いだ。俺が愚かであるが故に。

「向こうから仕掛けてくるなら好都合だろう？」

続けたそんな一言を皮切りに、あっさりエルスとの戦端は開かれた。堅固で閉ざされたこの国とは裏腹に、温暖で平野が続く穀倉地帯。それを手に入れることは先王の代からの密かな悲願。

直系の正統派と有能と名高かった傍系との争いの末、“何よりも尊く正しい血を引く者”が王位を得た南の国。血統至上、純血の王国。

温帯の豊富な薬種、そしてエルス王家に伝わるという、全ての病を治癒するという真珠の伝説。

春も終わらぬうちに、エルスは落ちた。

平穏と柔らかな日和に馴れた人々が、厳寒に鍛えられ狂王が策を弄し戦乙女が率いる軍勢に抗えるものか。

血に縛られた国は頭を潰すのが容易い。王の血族、嫡子の王子を筆頭に、その双子の妹王女を含めた全てを皆殺しに。

監理官を派遣しエルスの全てを支配下におき、されど城代の座はいささかの権限を付け無能と噂のエルスの新興貴族にくれてやった。恨みを買う役は、その国の人間にやらせれば良い。わざわざ自分たちが矢面に立つなど愚の骨頂だ。

“我らが賢王よ！！”と。

そんな礼賛と共に戦勝の酒に酔い痴れる者共。血の味も知らぬ者達が叫ぶ歓呼。

けれど、血を流して得た土地、財宝、勝利など何の意味ももたない。フレイアの病を癒す術、それ以外の物に価値などない。

まだ終わらない。

祝宴に浮かれ酔い痴れる重臣たちに、俺は顔色一つ変えず告げる。

「次は西だ。」

望むのは、教会総本山に収められているという聖杯、聖布、秘跡の品々。歌姫の病を癒す奇蹟。

聖都ラヴェスタ。かつてノルヴィークの王を、破門を盾に跪かせた仇敵。

私生児を悪魔の落とし子と呼び、不義を働いた女達や異民族を魔女と呼び火刑に処す、教会の総本山を戴く国。

「教皇冠を手に入れば、数百年ぶりに我らが正統の座を名乗ることができますな！」

そんな愚にもつかないことを捲<sup>まく</sup>し立てる大臣。この城にはこんなに愚者が多かっただろうか？だが、まあ都合がいい。

教皇派と旧教皇派、貴族連合を仲違いさせる策はすでに南を落とす前から弄<sup>もよほ</sup>していた。

イルヴァを、西へ向かわせる。

俺に忠実なる刃は、神や天使だとして俺の命令とあらば斬り捨てるだろう。信仰を盾に肥え太った、ただ人たる教皇ならばなおさらだ。

そして実際、イルヴァは教皇を捕らえ、“神の地上代理人”とまで呼ばれた男を跪かせて見せた。

苦し紛れの背教者の烙印、背神王の忌名。そんなものは笑いを誘うだけだった。

お前らがその名で俺を呼ぶずっと前から、私生<sup>オレ</sup>児は、誰が知らずともお前らに存在を根本から否定され貶められ続けてきたのだ。

そして、墮落しきつた聖都は火刑に処される。

結局、聖遺物などと呼ばれる教会の至宝は、そのどれもがフレイアの病に効を為さなかった。ペテン師や魔術師の巣窟など、焼かれて当然だ。今まで彼らが主張してきた教義の通りに。

今まで無視し続けてきた自身の中で燻ぶる世界への憎悪、それを誤魔化す為に、俺は祈る様に呟くようになった。

「あるはずだ、必ずどこかにあるはずだ、万病の秘薬、生命の秘宝、彼女を永らえさせるための術が……！」

…

「次は東だ。」

夏も過ぎ去り、矢継ぎ早に口にする。

その時になりようやく周囲は俺の抱える病的な焦燥に気付いたようだったが、俺のその狂気の前に逆らえる者など、誰一人として存在しなかった。

東国オースティン。ノルヴィークを始め、海の方この国とも交易を行う富に満ちた国。

勇猛な異民族を抱え込み外つ国からの武器を駆使し海を自在に駆け巡る船団を持つ。

王ではない王が治める地。  
師とも父とも慕った                      こうなりたい、と憧憬を向けた男の治める地。

自分で言つて、狂気の沙汰だと分かる。

内憂を抱えた二国とは違う。今までにない苦しい戦いになるだろう。もたもたしていても、南と西の残党にも付け入れられかねない。

何より、戦に勝てたとてその先の統治が何より難しい。王政に慣れ穏やかな気候の所為で農民商人に至るまで保守的なエルス。信仰という精神の支柱を破壊され骨抜きにされたラヴェスタ。

オースティンには、独立の気風を尊ぶ商人達がいる。飼い馴らせぬ異民族がいる。豪商が、宣教船司祭が、何より市民権を尊ぶ市井の人間が力を持っている。“これを壊せば”というものが存在しない。王殺しオストヴァルドの創りあげたそれは、“王国”とはあまりにも違いすぎた。この国の民の知る方法ではあの地は到底治めきれない。

冷え切った頭でそんな事を考えながら、そして俺は烈しい声で命じた。

「東の国を滅ぼせ！！」

先陣を切るのはお前だ、私の戦乙女、私の剣

イルヴァ

！！」

それが、なんなのか！！

後先の事など知らぬ。フレイアの命以外のものなど知らぬ。憧憬した師も、今は単なる邪魔者。

大事なことは、未だ彼女が生きているということ。俺は諦めない。

そして返る、澄みきった全肯定の言葉。

「　　畏まりました、我が王アルヴィド・マグヌス・ティセリウス陛下。」

イルヴァの剣は貴方と貴方の王国にのみ捧げられております。」

血に塗れ、滅ぼした国の民から、傷つき死んでいった兵たちから、“雪の魔女”の忌名で呼ばれるようになった少女。

かつて幼い自分が手を引き、護ろうと誓った存在を、容赦なく赤い惨劇の場へと追いやる。

愚かだ。愚かだ。俺はどうしようもない愚か者だ。

愚かな俺にさえ分かるほど。

嗚呼、だが、それならば愚かな俺を戒めない人々は、なんなのか？

“賢王陛下万歳！！”

賢王などという似合いもしない仮面をかなぐり捨て、それでも湧き上がる礼賛の声。

渦巻く不満も不安も、俺の前に形を成さない。何故だ。何故こんな愚か者に唯々諾々と従う。

教えてくれ、答えてくれ、正してくれ、世界よ！！

もし応えられないのなら、それは世界が俺以下の愚か者の寄せ集めということだ。

俺を裁く資格などあるものか！！

そして、オースティン陥落間近、最後にオースティン王から贈られた玉鋼の剣。

かつて東方領伯が禁を侵してまでオースティンに打たせた剣。伯の死の遠因。

『 Arvid Magnus Tiselius 北の果ての賢王 』

そう刻まれた銘の横には、幾度も書簡で見た癖のある書体で

『 世の果ての狂王 』

と刻まれていた。

一振りの剣と、かつてオースティン王と呼ばれた男の首を前に、俺は哄笑した。

【夏の愚者】 - 17 乞い歌

南、西、東。主だった国は全て滅びた。

ノルヴィーク、他三国合わせてどれほどの兵が、人々が死んだことか。傷ついたことか。血と涙を流したことか。

だが、重ねてそんなものに意味などない。

豊穡のエルス、聖都ラヴェスタ、豪放たるオースティン。

その全ての滅亡に、死んでいった人々に、結局意味はなかった。

この大陸のどこにも、フレイアの病を治す術はなかった。

何の救いも見いだせぬまま、しかし死人の冷気が地面から滲み出るように確実に厳寒の冬は歩み来る。

病ですでに弱り切ったフレイアを、蝕む氷の季節。

「っけふ…、か、は……ッ!!」

「フレイア……!!」

触れる事も許されず、俺はただ滑稽なまでにその名を繰り返した。  
北の大国の王、そして今やこの大陸全ての主、絶対の王、全能であるはずの王。

それでも、その俺が彼女の名を呼ぶだけでは彼女の病は止まらない。

華奢な身体はますます軽く、澄んだ瞳には熱が淀み、息をするのすら彼女にはとんでもない苦行になり果てたようだった。

「フレイア……」

乾いてもなお花の色を残す薄紅の唇。嗚呼、思い出すのは歌声の代わりに鮮血を吐き出したあの日の絶望。  
ふと、病苦に溺れるような唇が、小さく開いた。

「……っ、

雪、は……まだでしょうか……？」

哀れに掠れた声で、それでも久しぶりに発した言葉らしい言葉。  
ああ、死にゆく身体で、それでも彼女が思うのは、たった一人のことなのか。

「いや。いや、だが、すぐだ。

大気が冷たい。今日か明日には、必ず雪は降るだろう。

……雪が、好きなのか？」

雪に何を投影しているかなど、分かり切っている。俺があの雪の原に放り出し、そして手を引いた藍色の少女。

それでも、必死に何も知らない振りで言葉を継いだ俺に、フレイアは瞼を半ば閉じて答えた。

「ええ……とても、綺麗ですもの。」

純粹な憧憬。恋慕。恋慕すら越えて、地母神が抱くが如き愛情。  
眩く薄紅の髪の彼女こそ、俺には何よりも綺麗に見えた。何よりも  
愛しいものだった。

「雪が…見たいな…。」

ぽつり、零れただけの言葉に、思わず応えた。

「見えるさ、すぐにでも。」

その先、春の花が咲き乱れるのだって、すぐだ。」

そう、冬を越えて。春を眼にして。夏を通りぬけ、秋を歩み、そして  
またその先の冬まで                      俺が生きている限り、永遠に、この  
地上に！

強烈な願望をはらんだ声に、フレイアはゆっくりと首を横に振った。

「いいえ、春は見れなくて良いのです。」

…ただ、雪が見れば良い。」

彼女は春を忌んでいる。そして夏を厭い、秋に関心を示さず、冬だ  
けを強烈に愛していた。

雪が見たい。

春は見たくない。

彼女の、願い。

「フレイア……」

何度目か、彼女の名を呼んだ  
名を呼ぶことしか、俺には許  
されていないのだから  
俺は、数秒の沈思の後、ようやくそ  
の問いを口にした。

「お前が“一番欲しいモノ”は、その手に握めたか？」

自分が予想したよりも、数段穏やかな声。  
いつかの日の言葉。

彼女の美しさの根源。

嘔吐きな彼女が、初めて俺に答えた真実。

熱のためか、茫洋とした様子で  
それでも、数秒の後彼  
女は重たげな瞼を開き、はつきりと呟いた。

「いいえ。」

けれど、ひとつ、お願いがあります…陛下。」

「叶えよう。言うがいい。」

即答する。

ふわり、ほころんだ微笑に胸を高鳴らせる俺に、彼女は途切れ途切れの息で続けた。

「わたしに…付けてくださった、白銀の鎧の、兵士……

彼は、わたしに、本当によくしてくれました…

これ以上、こんな病身の元に引きとめておくのは、忍びないので  
す。」

白銀の兵士

ヴィクトール＝フォルクング。

武門の名門フォルクング家の跡取り。

元近衛副隊長、イルヴァから取り上げた腹心の部下。

俺が、これから演じる茶番劇に最適な人材だ。

「彼は、ただ臥せる事しかできないわたしとは違います。」

潤んだ瞳が、懇願を込めて俺を見る。

逆らうわけもなく、俺は確かに首を縦に振った。

「叶えよう、フレイア。お前の望みは、私が叶えうる限り全て

…」

叶えよう。お前が口にせぬもので、全て。

あの日俺は誓った。

『いつかお前に、“お前が二番目に欲しいもの”を捧げよう。』  
と。

俺がお前の望む唯一になれないのなら。

愛しいフレイア。

「ありがとうございます…」

ほう、と、安堵の吐息がその唇からもれた。  
そして、気付く。

たった数片の会話。けれど、こんなにも言葉を交わすのは　こ  
んなにもフレイアの声が続くのは、随分久方ぶりだと。緩やかに上  
下する胸。珍しく発作が起こる様子もない。

その事に、俺の方こそ安堵の吐息をつき、俺はひたすらフレイアに  
向けていた眼差しを、ふと、硝子一枚へだてた庭園へとやった。

厳寒の世界と硝子一枚へだて、咲き乱れる花々。  
叶うならば、俺もこの様にフレイアを護りたかった。

寒波からも、渴えからも、悪意からも、病からも　　この世の  
何物からも。

現実には、ただ命令一つで容易く幾千幾万の人を死に追いやった俺  
は、目の前のたった一人の命も救えない。

咲き乱れる花々。大切なものを、護ろうと必死に閉じ込めようとし  
た庭。

ふと、脳裏をよぎったのは、幼い藍色の少女。初めて俺がこの庭に  
招き入れた存在。

…  
もし。

もし、この庭園の花が雪に焦がれたとしたら、触れたいと願ったとしたら。それが叶えば、花は雪に触れた途端枯れ朽ちるだろう。それは、幸せなのか否か。

益体もない懊悩に、瞼を閉じかけた時。

響いた、高く澄んだ歌声。

瞬時に意識が眼前の少女に引き戻される。

詩を紡ぐ力もないのか、ただ“La”の一音だけで構成された声。それでも美しい歌声。

彼女の抱える発作を思い出し、咎めようと開いた口は、しかし何も発することなく閉じられた。

俺以外の誰であれ、止められるものか。この歌を、彼女の意志を。

歌。歌。歌。

意志と声と旋律。

彼女に触れられない俺が唯一触れられる彼女の欠片。

嘔吐きなフレイアの真実の欠片。

どんな叫びよりも涙よりも胸を打つ。

どうしようもなく恋うた、焦がれた、乞うた、ただの一度も俺のた

めに歌われた事のない歌。

花色の唇から零れる

溢れるほどの、愛の歌。

ただ一人、藍色の少女のためだけの。

（イルヴァ。

…フレリア。）

花のような彼女の微笑みを、一目見たかった。

あの春の湖面の様な眼差しに見つめられたい。

一言、あの透明な声が愛しげに俺の名を呼ぶのを聴きたい。

俺の眼前で、ただ正反対の藍色の色彩を想って歌う彼女に、俺はただ思っていた。

そして、それが叶わないのなら。

（ 叶えよう、フレリア。お前が二番目に望むもの。 ）

一人、天から降る雪に訴えかけるように歌うフレリアに背を向け、部屋を出た。  
繊細な蔦の文様を彫り込んだ扉の横には、音もなく控える白銀の兵士。

「ヴィクトール」folkung。

お前をフレリアの護衛の任から解く。ただちに近衛隊に復帰せよ。  
「はっ。」

唐突な言葉に、一筋の乱れもなく返る近衛式の最敬礼。

「明日、イルヴァが王都に帰還する。」

その言葉にも、彼は身じろぎ一つせず。

イルヴァが信頼しイルヴァを尊崇する文武に秀でた近衛副隊長。

ああ、まったく理想的な駒だ。

「雪が……降るな。」

ぽつり、呟いた言葉に、返る声はなかった。

【夏の愚者】 - 18 最後のぬくもり

多大な戦果とそれに倍する戦禍を引き連れ、帰ったイルヴァの目は何を見ただろうか。

活気が絶え、半死半生の病人のような王都。

家族を、友を、恋人を失った困惑と悲嘆と怨嗟を閉じ込めた街並み。尽くしたはずの俺のねぎらいの言葉もなく、城内には争いにより私腹を肥やした蛆虫どもが蔓延り、王都を囲む灰色の石壁には、錆びた赤い色。息子が全て先の戦で戦死した事を嘆いた女を、俺が見せしめに首をはねさせた。王の聖色たる“赤”は、もはや炎の色から血反吐の色へその意味合いを変えている。

フレリアがそのイルヴァを自室へ招き入れたと知って、俺はしばらくの後フレリアを訪ねた。

発作を起こされたのです、と言う侍女の言葉のわりには、安らかな寝息。

震える睫毛。流石に痩せた頬。薄紅の髪に埋もれ、まるで花の中にいるような白皙。

何か、夢を見ているのか                      どこか哀しげな面。その、頬につ、と涙が伝った時。

俺は、思わずその頬に手を伸ばしていた。

柔らかな感触。病をえて血の気の失せた、それでもすべらかな頬。  
拒まれ続けていた俺が、初めて触れる頬。

その感触に戸惑いながらも、俺はそのまま頬に伝った涙をぬぐった。  
温かい涙は、零れてしまえばすぐに冷たくなる。

ふ、と眉を寄せた少女。けれど、その瞼が開く事はなく。

安堵と残念な気持ちを同時に抱きつつ、俺はそっとその手を離れた。

初めて触れた温もり。最初で、おそらく最後になるだ  
ろう感触。

すう、と一際深い眠りへと堕ちてゆく少女。  
緩やかに上下する胸、微かな歌と雪の気配。

彼女が見ているのは、冬の夢だ。なんの根拠もなくそう思った。

【夏の愚者】 - 18 最後のぬくもり（後書き）

フレシア編の微妙な違和感とリンク。



「アル!？」

随分久しぶりに聞いた俺の愛称。一瞬幻聴だと思ったそれは、確かに目の前のオーク扉　俺は、いつの間にイルヴァの部屋の前に来ていたのか？　の奥から響いたものだった。

重いオーク櫪の扉が開く。そこにはたして藍色の色彩がいた。

雪の所為で仄かに明るい薄闇に、浮かびあがるような藍色の髪。常に俺だけを見つめる澄み過ぎるほど澄んだ藍色の瞳には、容易に俺を案じている様が見てとることができた。

「アル、どうぞ、中へ。」

俯いたままの俺。度重なる冷遇、酷使、非道な八つ当たりを受けたにもかかわらず、イルヴァは何の躊躇いもなくその一言と共に俺を部屋の中へいざなった。

ああ、やはり、イルヴァは俺を責めることがない。

それに俺は一抹の虚しさと、それを掻き消すほどの安堵を覚えた。

焦燥が、嫉妬が、狂気が、この残酷な世界への赫怒が、久方ぶりに宥められ凪ぐ心地。

暖炉へ火を灯そうと　気付けば、俺も彼女も、薄い夜着のままだ　俺に背を向けたのを遮るように、再び

「イルヴァ」

その名を呼んだ。

呼んだ、その声は自分で思ったよりも平坦なものだった。

なんの感情もこもらない……というより、どんな声をあげていいのか、自分でもわからない。

あまりにも無様な泣けない子供の声。

「はい、アル。私はここに。」

その声の意を、幼い頃からずっと俺の隣にあつた少女は違えずに汲み取った。

俺が掴みきれなかった、俺の真意まで。イルヴァは俺に比べればあまりにも聡明だった。

ただ、俺と言う存在に呪われ盲たことだけが彼女の不幸。

『ここにいます、あなたの傍に。あなたの手の届く傍に。』

何一つ掴めない、この手に残らない、そう絶望しかけた俺の心に、確かに聞こえる。そんな声。

イルヴァは俺に寄り添うと、木偶の坊のように突っ立っていた俺を柔らかな長椅子へ腰かけさせた。身体が沈み込む。頭ひとつ分あいてしまった身長も、座れば少しは差が縮まる。離れて久しい心の距離。

彼女は、一步も動かない俺をそれでもひたすら待っていてくれるようだった。

「……………」

無言。

身を切るような冷えた静謐。はらはら降る初雪の音すらきこえるような静寂の中で、イルヴァが微かに震えた、その時。

「フレイアに、会ったそうだな…」

ぽつり、口にした名にイルヴァは小さく頷いた。動揺は、ない。聡明な彼女なら分かり切っていた言葉だろう。

「はい。」

「あれは、なんと。」

「今もわたしがあるのは陛下のおかげです」と。

どこまでも透明なフレイアの歌声。惜しめない愛の歌を、たった一人のために紡ぐ歌姫。

そのどこまでも真っ直ぐな愛を受け、それでもただただ俺だけを映し、俺の為だけの言葉を紡ぐイルヴァ。

俺は吐息を抑えるように唇を噛み、瞑目した。

藍色の色彩が瞼に隠される。

狂気も、焦燥も、悲哀も、嫉妬も、同情も、懐古も、全て隠れてくれれば良い。

愚かだ。手に入らないと知ってなおもたった一人の愛を乞う愚か者俺も、フレイアも、目の前の藍色も、それに翻弄される世界も、全

てが全て愚かに過ぎる。逃避の暗闇に意識を溶かしかけた俺に

「……………変わりませんね。

彼女は            変わらず、美しいですね。」

ぼつり、と。

零れたのは、あまりにも無垢な言葉だった。

俺を盲信し、俺の愛を奪い、血塗れの忌名を受け、けれど変わらず少女は美しかった。

いつのまにか開いていた眼には、あまりにも見慣れた藍色。

ふ、と淡く笑う。たとえ多少苦みが混じっていたとしても、憐れみをたたえていたとしても、それは久方ぶりの穏やかな            イ  
ルヴァと眼を合わせて浮かべた、微笑だった。

「アル……………」

痩せて儚さを増した貌を見下ろす。冷えきった部屋の中。

今なら、今ならイルヴァの手を取ることできるかもしれない。かつて俺が彼女に差し出した頃のようにとはいかなくとも、それでも相変わらず従順な少女。あの雪の原の呪い。—イルヴァは決して俺を裏切らない《……………》。

俺はまだほんの少しの間、狂いきらずに済むかもしれない。

目の前に確かに在る、うつろい易い“愛”などよりよほど強固な絆。

「歌ってくれ、イルヴァ。」

ふと、そんな言葉が零れた。

特に、他意はなかった。俺の心を、ほんの少しなりとも癒してくれた澄んだ声。

もしそれが、穏やかな旋律を奏でてくれればどれほど慰められるか

…

そんな自分勝手なことを思っていた俺は、だからイルヴァの反応に気付くのが遅れた。

「……ア、ル」

「歌ってくれないか？イルヴァ。」

その凍りついたような声に、痛みに気付くことなんて到底できるはずがなかった。

「できません……」

ぱきり、凍った水面のように罅割れた声。

「イルヴァ？」

流石に困惑の声をあげた俺に、微かに身体まで震わせはじめた少女は、続けた。

「歌え、ません……私、わたし、は……」

初めての拒絶。

彼女と出会って十年間。初めて、俺の命令が聞き入れられない。俺を盲信し盲従し盲愛し、完全に俺の意のままになるはずの剣。

知らない。

俺は、愕然とした。

こんな少女を、俺は知らない。

「ごめん、なさい……！」

「イルヴァ。」

悲痛に掠れた声を、一言のもと遮った。

ぴたり、目の前の女が息を止める。見慣れた色彩の、けれど俺が知っていた少女とは別人のような眼の女。

そして、俺は絶望を吐き出した。

「もういい。」

もう、いい。それは俺が本当に全てを斬り捨てた瞬間であつたかもしれない。

どれほど暴虐を尽くそうとも、世界に向けて嘲笑しようとも、狂気の淵に身を沈めようとも、たった一筋残っていた甘え。――イルヴァは決して俺を裏切らない《……………》。

愚かだ。あまりにも愚かだ。

この世に、信ずるに足るものなど存在しない。その証明が、俺自身ではなかったのか。

先に裏切ったのは、俺だ。イルヴァの盲従を盲信していたのは、俺だ。

あまりにも身勝手に甘えた己の思考と、それでもどうしようもなく沸き上がってくるイルヴァの拒絶  
裏切りへの赫怒に、俺は  
手のひらを握りしめた。

傷が開き、血が滲む。何も掴めず、ただただ血腥いだけの手のひら。

それでも、もう良い。

国など知らない。民など知らない。俺の罪など知らない。

かつて守りたかったものなど、知らない。

「ッ、陛下!!」

立ち上がり、背を向ける。心には狂気と憤怒の猛火。背後から響く掠れた声は、荒れ狂う脳内に届かない。

「陛下、アルヴィド、待って……っ

ッ」  
『!!』

背後で、全てを断絶するような音をたて、扉が閉まった。

【夏の愚者】 - 19 初雪と裏切り（後書き）

クライマックスに向けてマダオっぷりも拍車がかかっていきます。

【夏の愚者】 - 20 春に捧げる道化劇

俺が全ての将官と重臣を招集したのはその日の昼だった。

石造りの広間に君臨する赤。

アルヴィド・マグヌス・ティセリウス。滑稽なまでに仰々しい俺の名。

偽りの王であるはずの俺は、北の宝冠を篡奪するだけでは飽き足らず、今や教皇の錫杖を持ち、南の真珠の鏤められた帯を纏い、東の玉鋼の剣を帯びている。

裏切りに薄汚れた宝冠、焼け跡から見出した錫杖、幼い王子と王女の血に濡れた真珠  
憎んだ血族、憧憬した男、二人が死に  
際に銘を刻んだ剣。

纏う王衣の真紅はもはや炎の色から血の色へ意味合いを変えている。  
紛れもない狂王の姿。

「南のエルス、西のラヴェスタ、東のオースティン。  
大陸の全ては私の前に膝を屈した。」

厳寒の大气に響き渡る言葉。

狂った熱を抱え、誰憚ることなく傲岸に宣する。

「次は外<sup>と</sup>つ国だ。」

“海の彼方へ。”

大陸中を巻きこむ大戦を引き起こし、なお人々に血と涙を求める。  
違えようもなく狂気の沙汰。弾劾されてしかるべき妄言。

その言葉に、流石に居並ぶ者達の間にはざわめきが走った。  
恐らく、高を括っていたのだろう。いくら拡大戦争が行われようと、  
それはこの大陸内で終わることだろうと。

俺を未だに“賢王”などと奉る凡愚どもには思いつきもなかった  
に違いない。海の彼方の事など。

奴らは侮った。俺の、フレイアへの想い。俺の中の激情を。

俺は、この恋のためなら、狂える。

「陛下、それはあまりにも無茶な……！」

言い掛けた父王の代からの重臣      かつて俺へ賢者の箴言を紐  
説いた者の一人であった老人は、しかし俺の一瞥のみで呼気<sup>こ</sup>と言  
葉を飲み込んだ。

他の者として同じようなものだ。それぞれ横に立つ者と囁き合えど、

誰も真つ向から俺に対して意見などできはしない。

俺は愚かだ。だが、そんな俺に唯々諾々と従う者達は、俺以上以下、と言った方が良いか？　　の愚か者だ。

そしてそのざわめきすら、すぐに俺の一言によって殺される。

「將軍。“青藍の戦乙女”よ。」

冷たい声で降す。その名さえ呼ばず、それと呼ぶ。

ただ一人、広間で沈黙を守ったままの藍色は俺の前に進み出で、跪いた。

「行け。此度も先陣を切るのは、お前だ。」

拒絶を許さぬ命令。それに

「はい、テイセリウス陛下。」

そう、声が返ることを、この期に及んで俺は半ば夢想した。それは、ほぼ無意識と言っても良い。道具と使い手、共依存、鏡合わせに刷り込まれた盲信。だから。

「いいえ、ティセリウス陛下。  
その御命令には従いかねます。」

俯いたまま、それでもはつきりと口にしたイルヴァに、思わぬ苦々しさが心中に漏れ出たのだ。

「……將軍。」

お前は、この三つの戦で最も功を立てた。だからこそ、一度は赦そう。

外つ国へ渡れ。彼の国を我が物とせよ。」

畳みかける。予想された応えに、用意した硬質さ。

周囲のざわめきすら消えてひたすら視線が俺達に向いているを感じる。ああ、鬱陶しい。

そして噴き出したいほど滑稽だ。

「あの歌姫の為にですか。」

「イルヴァ！！」

激昂。

微かに涙を堪えながらも、俯いたままの少女      どれほどの時  
がたとと、イルヴァは“少女”だった      は俺とは正反対に  
見える冷静さで続ける。

「お聞かせ下さい。海を越えた外つ国へ攻め入る理由。  
エルスのような豊かな土地もなく、ラヴェスタのような遺恨と威も

なく、オースティンのような利もない。ほとんど知りもしない国へ攻め入る理由を。

歌姫の延命の術を探すという理由以外で!!

『賢王アルヴィド』よ!!」

一瞬、脳裏を過去の情景がよぎった。

賢い王になると、全てを守れる者になると。花の咲き乱れる庭園で藍色の少女が微笑<sup>わら</sup>う。

『アル、わたしの王様。』

…  
だが。

「知れたことを…! フレイアの命以上に大切なものなど、あるものか!!」

一息で、俺は用意した台詞を、己の想いの丈を吐き出した。

俺はフレイアが愛しい。

懺悔と愛の歌を紡ぐ歌姫、愛される嘔吐き      そこにあるだけで

麗しいフレイア!!

跪いた藍色が、ぴしりと凍りついた。

「……で、しまった……っ」

零れ、落ちて割れる、無様に掠れた声。

「あなたは…狂われてしまったのですね…アルヴィド…  
あの、歌姫の所為で……ッ」

掠れ、痛々しいまでに真っ直ぐな声。

ああ、お前だけだ。俺を“狂った”と正面から言つてのける者は。

「ツフレイアを侮辱するか！！赦さんぞイルヴァー！！」

「歌姫フレイア            全てはあの娘が……ッ！！」

「イルヴァー！！」

凍えた怨嗟がこもった声に、烈火の如き怒りを露わにする。

玉座を蹴り倒さんばかりの勢いで立ち上がり、今にも抜剣しようとする俺を藍色の双眸にしっかりと映し            不可解なことに、彼女

は飛び退くでも抜剣するでもなく、ただ叫んだ。

『動くな！アルヴィド・マグヌス・ティセリウス！！』

「……ッ！？」

一瞬、身体が本当に凍りついたかと思った。

精神と肉体を支配する、逆らいようもない言霊。道具と使い手、その支配の関係が今完全に逆転する。

ああ、俺は知らなかった。俺の物だと何の疑いも持たず扱った彼女の、こんな異能！！

「化け、物……。おのれ、忌々しい、魔女め……。ッ！！」

氷漬けにされたような口で、怨嗟の言葉を紡ぐ。

俺は知らなかった、本当の彼女。イルヴァ

けれど、今はそんなことはどうでも良い。

続きを。早く進めなければ、“彼女”に捧げられたこの道化劇を。

「……………あなたにだけ、は、そう呼ばれなくなかったな。」

自嘲まじりの、あまりにも儚い少女じみた口調。

それでも、イルヴァは唇の端を無理矢理に吊りあげると、俺に背を向け抜剣した。

俺がイルヴァのためにあつらえた剣。

イルヴァが俺と俺の王国のためだけに捧げた剣。

今、“彼女”に捧げられるべき剣。

「歌姫に死を！！」

城中に響き渡るほどの号令を。

それを聞き届け、俺は抗うのをやめた。

言霊など使わずとも、イルヴァの行く先を阻む近衛など誰一人として存在しない。

フレイアの傍らにあの白銀の兵士はいない。それどころか、一人の兵士、侍女たりとも。

硝子の天蓋は退けられた。今、咲き乱れる花に雪が降る。

（お前が、二番目に望むものを。）

捧げよう、フレイア。愛しい青藍による死を。

【夏の愚者】 - 20 春に捧げる道化劇（後書き）

全ては筋書き通りに。

彼女は、この上もなく幸せそうに微笑んでいた。

花の色をした髪に、吹き込んだ雪の欠片を飾って。もはやその繊細な輝きが溶け消えることはない。花の様な彼女は、今や雪とまったく同じ冷やかさを湛えていた。

白磁の肌、薄紅を塗った唇、花色の髪、雪の飾り、夢見るように閉じられた瞼、淡い微笑。

ただ、真紅に染まったドレス、それだけがあまりにも不似合いだった。

彼女の血に染まった赤、俺を象徴する色。鮮烈すぎるそれはまるで彼女を火刑に処す不吉の業火にも見え。

思い知る。淡い花の色を纏った彼女を真に引き立てるのは、雪原の如き純白のみであつたと。

「フレイア…」

ぼつり、二度と応える声を持たない名を呼ぶ。

血が通っているうちに触れたのは、あの日、眠る彼女の頬の涙をぬぐった時だけ。

今はその時の微かな温もりもなく、ただただ白く冷たく硬質な肌は、まるで彼女が人形にでも変わってしまったかのようだ。

俺の書いた筋書き通り、フレイアをその剣で貫いた

イルヴァ。

何も知らぬ彼女を牢へ閉じ込め、俺はフレイアの亡骸を花を敷き詰めた庭園へ横たえた。

硝子の天蓋が外され、容赦なく雪が降り積もる庭園。この寒さならば、フレイアの亡骸が腐敗することはないだろう。箱庭の中で咲かせた花が、萎れる間もなくその色を残したまま氷漬けになるのも時間の問題。

兵達を取り囲んだ時イルヴァは、ただ血に染まったフレイアの亡骸を膝に、呆然と座りこんでいたと言う。

皮肉なことに、どれほど俺が彼女を裏切り、また彼女が俺に偽りを抱いていようと、イルヴァは結局俺の望みのままに動いた。

俺の望み。

もはや哀れな死以外の先を持たないフレイアに、愛した少女の手による死を。

愛が得られないのなら、せめて哀を。フレイアの二番目の望み。

憎い恋敵を殺し、愛しい相手に殺され、二人の少女は何を思ったのだろう。

ひたすらに幸せそうな微笑、永遠の幸福を唇に刻みつけたフレイア。  
俺には分からない。

愚かな俺にはわからない。目の前の亡骸に刻まれた微笑。

永遠に受け入れられないまま死んだと言うのに、何故こんなにも幸せそうなのか。

永遠に受け入れられない事を突きつけられた俺は、こんなにも辛いというのに。

憎いはずの女の血に塗れ、凍える牢の中嗚咽のような笑声を響かせるイルヴア。

俺には分かる。

愚かな俺にしかわからない。地下牢の魔女が撒き散らしているだろう哄笑。

永遠に許されない罪を負ってしまったえば、もう笑うしかない。

永遠に泣くことすら許されないのならば、もう笑うしかない。

「イルヴア。」

俺と鏡合わせの愚か者。似すぎているから、憎かった。俺の知らぬ部分があるのなら、それはそれで憎い。

呼びなれた少女の名を呟いて、俺はようやく二度と歌わない歌姫から身を離す事が出来た。

冷たい冷たい冷たい世界で  
沸き上がるのは、溢れるほどの憤怒。

それは俺を受け入れなかった女にか、俺を裏切った女にか、世界全てへか、あまりにも愚かな俺自身にか。

とにかくまだだ。まだ終わっていない。道化<sup>オレ</sup>は退場していない。

道化劇の幕を降ろさなければならぬ。冷えた手を取っていた、冷えた手を握りしめる。

「ッ……！！」

…… 怒りさえあれば、ほんの少しでもこの冷たさを耐え抜ける気がした。

【夏の愚者】 - 21 罪人達（後書き）

次回、アルヴィド編【夏の愚者】は完結です。

【夏の愚者】 - 終 赤金の血の愚者は乞う

そして一面真っ白い雪の中、全てを臨み俺は座す。

雪が降っていた。止むことなど知らぬような深々たる雪。

真っ白い光景に真っ白い装束、真っ白い氷が降る中で、イルヴァの  
藍色の色彩はさぞ鮮やかに映えるに違いない。

ノルヴィーク  
巨人の涙から産まれたような娘。

ただフレイアの延命を望み大陸中を戦禍に巻き込んだ俺は、イルヴァの気を引きたいがためにその俺を止めなかったフレイアを除けばこの場にいる誰よりも罪深い愚か者だ。畢竟、生者の世に限れば、今、俺こそが全ての罪過の頂点。

だがこの場では、その災厄の元を消し、狂王たる俺に齒向かったイルヴァだけが、魔女と呼ばれ殺されようとしている。

最低の俺はこうして玉座に座し、最悪の彼女は教皇冠を得た俺によって聖別され、よりによって“聖女”などと呼ばれているというのに。

狂った世界。

これを『かくあれかし“amen”』などと呼ぶのは痴愚の神だけだ。

俺を俺として産みおとし、こんな悲惨な滑稽劇を紡いだ神だけだ。

道化劇は終わらねばならない。

狂った世界は修正されねばならない。

選んだ駒は、後背に立つ白銀の兵士。

設えられた処刑台に、裸足の少女が立つ。

俺がかつて雪の原で手を引き、今再び雪原に追いやった少女。何より雪の冷たさを厭っていたイルヴァ。

生憎、処刑台の上に薪や藁は積み上げられていない。斬首の台。火刑では台が高すぎる。

「これより“魔女イルヴァ”。

忌まわしい異能の者、王に刃向かい歌姫を弑した大逆人の処刑を執り行う。」

金細工の鎧を付けた巨漢が宣言する。教皇領にあったという、聖別された鎧。

“魔女”である女を殺すのだから、とわざわざ理由をつけて引つ張り出してきたそれ。

それが必要とされた真の理由は、ただそれが珍しい頭部全てを覆う顔がまったく見えなくなる作りをしていたからだろう。

中には、処刑人ではなくヴィクトールⅡフォルクングの息のかかった者が入っているはずだ。

釈明の一言もなく、イルヴァは歩を進める。

白銀の剣　やはり聖印が刻まれている　を携えた処刑人の前、処刑台の中央へ。

俺が最もよく見える位置へ。

白一色の世界で、やはり彼女の藍は鮮やかに映えた。

思い出すのはあの日の光景。白く埋もれた雪の原で、それよりもなお凍えた色彩。涙の色。

刹那、処刑台を取り囲む兵も、ざわめく民衆も、みな雪の白に埋もれる。

在るのは、ただ、彼女の藍。

： 初めて愛を手に入れたと思った それは刷り込みに過ぎないと知った 傷付かないために、手放せない

のを誤魔化す為に、彼女をただの道具と呼んだ。

信じた。意志持たぬものなら、逃げないと。

愛を持たないものなら、裏切らないと。

藍の双眸が真っ直ぐに俺を、ただ俺だけを見る。やはり、あの日の呪われた雪の原の再現。

俺は玉座より立ちあがると、歩を進め、バルコニーの手摺に近づいた。

さあ、この滑稽な道化芝居に幕を降ろそう。

俺が産まれた時より続く過ちを断とう。

「魔女に死を！！」

叫んだ言葉。振り下ろされる、白銀の刃。

胸を貫く灼熱、飛沫く血は、白く染まった世界の中赤金に輝いて見えた。

兵士達から一斉に上がる怒号のような関の声。

俺の身体に刃を突き立てた白銀の兵士、忠勇たるヴィクトールが叫ぶ。

「狂王に死を！！」

ああ、世界が揺れる、正される。

この場で最も死の報いを受けるべき俺。

王位を篡奪し、女に狂い、狂気に墜ち、政道を外れ、世界への憤怒のまま三度の大戦を引き起こし、ひたすらに健気な少女を憎み傷つけ、殺そうとした。

一度のみならず、彼女を雪の原へ放りだした。

満ち満ちる弾劾、俺への罵詈雑言。  
最初に白銀の兵が口にした真実の言葉は、大合唱になり、街中に響いていた。

「死を！！」 「狂王に死を！！」 「狂える王に死を！！」  
「彼こそ真の罪人だ！！」

ああ、これこそ相応しい。

本来、俺に向けられるのはこのようなものばかりであつたはずだ。  
悪意、敵意、嘲笑、唾棄すべき存在。

賢き者になどなれるはずがなかった。己を知ったその瞬間にその事に気付かなかつた、それこそ俺の愚かさの証明の一つ。

数々の賢者の箴言。そんなもの、無意味だ。愚者は愚者であり続けるからこそ愚者である。例え、どのような賢哲や聖者に触れようとも。

白い雪と人々の中、もがく藍色が見える。俺の愚かさの二重三重の犠牲。

鎖は取り払われるだろう、白銀の兵士は彼女を庇護するだろう、彼女は生きるだろう。

そう簡単に、ひとりだけ幸せそうに逝ってしまった女の元にわざわざ彼女を届けてやるものか。信じもしない聖別さえして引き裂いた二人の間。死した聖女、生きる魔女。触れようもない距離。

笑声が爆発しそうになったその時、首を、鋭い剣風がかすめた。  
と思えば、すでに俺の首から下は消失し            いや、首から下が  
首を消失したのか？

あまりの寒波に血管が閉じたのか、首だけになった俺には、数秒の  
意識があつた。

白い白い光景、ざわめく人々、立ち尽くす藍。  
掲げられる首<sup>オレ</sup>。

それにまで届く、イルヴァの叫び。

「ア、    あ、ああ、アア嗚呼ああアアアアアア…ッ!」

イルヴァが泣く。俺が孤独にした少女、俺の傀儡だった少女、俺が  
死ねば自由になれると思つた少女。  
イルヴァが泣く。子供のように泣く。

最後の最後。どうしようもないほど最期に、唐突に、俺は悟つた。  
ああ、俺は間違っていた。愚かだった。  
愛を疑うな、貴方の言は正しかった、ノルヴィーク王。父様。

死の極限にある状況で泣けるのなら、自身を殺しかけた男のために泣けるのなら、それは刷り込みであれ呪いであれ思いこみであれ紛れもない愛ではないか。

求めて求めて一度失ったと思い諦めた愛は、最初から最期まで俺の元にあつたはずなのに！！

全てを覆いつくすような吹雪。

雪の原で少女が泣く

あの時あの手を取らなかったなら

いいや、あの時あの手を離さなかったなら

もう一度、と願うにはもう遅すぎた。

斬り飛ばされた首。<sup>いしき</sup>差し出す手はもはやない。

雪が吹雪く。雪が覆う。

俺の罪を覆ってゆく。

決して裁かれない俺は、決して許されない。

これは、呪いか

（誰に赦しを乞えばいい。どうやって愛を乞えばいい。

どうして許しを乞わねばならない。乞わねば愛は手に入らぬのか！！

叫んだ。足掻いた。偽った。からっぽの手を握りしめ怒り狂った。

愛されるはずもないと知って分かってそれでも乞った愚か者。

手にしていた愛にさえ気付かなかった愚か者の  
その、末

路。）

俺の傷は、俺の孤独は

俺の罪は、癒えない。

N &  
e  
x t E  
n d  
『秋の子ら』

【夏の愚者】 - 終 赤金の血の愚者はどう（後書き）

【読み飛ばし推奨】

えー、とりあえず真っ先に言うべきはあれですかね。流石陛下、全部わかってたんすね、パネエっす！！でも全部わかってながら打つ手打つ手すべてがなんか間違ってます！やっぱパネエっす！！（やけくそ）

そんなわけで長々と、長々と続きましたマダオ陛下もといアルヴィド編…当初は三人の中で一番短くなるはずだったのに何故だ。

いえ、まあ分かってるんですけれどもね。ノルヴィーク始祖伝とかイルヴァの村とフレイアの病の真相とか脇役色々とか伏線回収とか入れて遊んだ所為だと。

そして何より陛下の愚かさポイントが多すぎた所為だと！！

愚かさポイントというかもうヴァカポイントが多すぎるんで整理しきれません！とりあえず

？自分の出自に悩み過ぎて村一つ滅ぼすあたりおヴァカさん  
？イルヴァの思いを“全て”擦り込みだと思いこむあたりおヴァカ

さん

？賢者の箴言とか紐説く割に解釈が賢くないあたりおヴァカさん

？勝ち目皆無の恋なのに諦めきれないあたりおヴァカさん

？イルヴァは悪くないとわかってるのに八つ当たりするあたりおヴァカさん

アカさん

？報われないとわかっていて国滅ぼすあたりおヴァカさん

？死ねばすむと思ってるあたりおヴァカさん

？一度手放した手を最後にとろうとするあたりおヴァカさん

？自分がヴァカだと分かっているのに行動があまり伴わないあたり果てしなくおヴァカさん。

…まだあるような気がするけれどとりあえずこんなもので。

とりあえず“冬の娘”からこのかた、ある意味全ての根源となったイルヴァの愛を懷疑し否定していた陛下。それはあながち間違ってもいないっていうかぶっちゃけ刷り込み要素はかなりありますが、でも『それだけではないだろう』、って自分で言っているのに刷り込みオンリーだと思いつ込んでるあたりおバカさんですね。あるいは『刷り込みでもいいじゃない愛だもの！』くらいおヴァカさんになれば幸せだったものを。いやむしろこの開き直りは頭良い類？わたくし自分が果てしなくお馬鹿さんなものでよくわかりません。ネヴァーエンディング・ヴァカ。

あと自分が馬鹿だと自分で思っている割りにあんま行動が伴わないあたりがもう。まあこれはある意味仕方ない…か？

馬鹿だと悟って、まあ仕方ないか俺馬鹿だしと開き直れたら凡人の一生を送れたろうに、よりによって王位とかもってるもんだから（しかもよりによって“聡明”の女神の王家）開き直すこともできず。“賢君”という幻想に縛られコンプレックスを抱え込んだまま突っ走ったあげくがこれだよ！！

はたからみてるのと突っ込みどころ満載。陛下は考え過ぎて自滅するタイプ。

頭悪いなら訊けばいい学べば良いって言うけれど、頭悪い人はまず訊く相手を間違えると思うんですね。というか正しい事を聞いても自分解釈で歪めると思うんだよね！結局頭悪いことから逃げられないぜひゃっはー！！

私です（真顔）。

全方位に実にすみませんorz

あとあれだ、心中の一人称が常に“俺”なあたり、子供時代から変わってないんですねこの人。上辺は“私”とか取り繕ってるけど、それだけ。

イルヴァとフレイアがひたすら自分以外の、自分が好きになった相手の為だけに動いているために実にシンプルに話が進んだのに比べ、この人基本自分中心なので国滅ぼすのに何気にがつり私怨入ったりフレイアもイルヴァも諦めきれなかったりふらふらして本筋が追いつらいです。人として軸がぶれている。ある意味個性。

ちなみに最後、イルヴァを想っているように見えて別にフレイアからイルヴァに鞍替えしたわけでもなく、愛されていたならとりあえずそれを手に取りたかったと言っただけというか…いや、解説まで長すぎですね。大蛇足ですね。作者は作品だけで語れという話ですがとにかく。

唯一、主要登場人物の（おおよその）想いに気付いていた陛下。でも頭良さそうに見えて決定的なところで選択間違ってる陛下。

そんなまるでダメな王様、略してマダオのお話でした。

本編は次回【秋の子ら】と終章で完結。

【秋の子ら】 黄金色の髪の吟遊詩人は語った

歌い踊れ、杯を交わせ、産めよ増えよ実れよ笑え。  
宴は刹那、生など寸隙、死した全ては我らが喜樂。  
いざや語らむ、哀れで愛しい人の物語。  
彼らの死は語り継がれる。我らの生が続く限り。

秋収：黄金色の髪の吟遊詩人は語った

『語られるべき これは残酷な愛と哀の物語

…』

余韻を引いて、物悲しい弦楽と朗々たる唄声が大気から消え去ると、  
吟遊詩人の青年はぺこりと一礼した。

からん、とつばひろの帽子に乗った鐘が鳴り、それが合図でもあつたかのように人々は吐息を思い出し、広場には元のざわめきが満ちていった。

「いや、良い声だった！

陽気な歌も良いが、詩人の語る悲劇はまた格別だな。」

「まったく、歌ってる時のお前は別人だよ、詩人様。」

「良いものを聞かせてもらったよ。やっぱり祭にはあんたの歌がな  
くちな。」

「しじん、すごい！」

やがて、ざわめきはやんややんやの大喝采へ。讃嘆の言葉と共に差  
し出される杯を、これ幸いと片端から干しながら、詩人の青年もま  
た笑った。

「哀しい話だったわねえ……」

「うん。おひめさまを殺して国まで凍らせるなんて、魔女は悪い奴  
だね。」

「うん？一番悪いのは王様だろう？歌姫一人の為に、無関係の人間  
を大勢殺したんだから。」

「それを言うなら、その王様を止めなかった歌姫も悪いんじゃない？  
というか、ある意味諸悪の根源はそれよ。」

「魔女は王様を好きだったのにね。」

「歌姫は最後に何故微笑んだのかしら？」

「結局この王様は賢くはいられなかったのね。」

「恋は人を愚かにするってね。  
けど、狂うほどの愛かあ。ちよつと、そこまで想われてみたい気も  
するけどね」

めいめい好き勝手に話し出す人々に楽しげに目を細めながら杯を傾  
ける詩人に、数人の子供がまわりついた。

「すつげーじゃんしじん！！」

とにかくなんかすげえ！！なあ、その王様の国ってどこにあんの？」

「凍ったお城って、ロートヴィークの雪山みたいな感じ？」

「ああ、確かにあそこは春でも夏でも雪が積もってるよな」

「魔女って、まだいるの？怖い……」

「ねえねえ、私も歌が上手ければお城に住めるかな！」

きやいきやいと無邪気に纏わり付く子供達に、零さないように杯を干した

零さないよう卓に置く、という選択肢は青年にはない

詩人は、もっともらしく腕を組んだ。

「いやあ、私がこの歌を知ったのは、それはそれは厳しい旅の果てだったからねえ。」

ああ、凍る草原を越え、厳しい霜の山脈を越え、雪と塩しかない呪われた地、北の果てへ！！

これはお話さ。遠い遠い国のお話さ。歌姫の歌も王様の軍も魔女の呪いも、ここには届かない。」

そして怖がる女の子の頭をひとつ撫で、歌が得意な女の子には

「ああ、セシリアぐらい可愛くて歌が上手なら、お城にだって住めるさ。」

今度知り合いの王子様に紹介しておこう。」

そんなとぼけた事を言いながら微笑みかける。

「しじんが言うとうさんくせー。」

「うそくせー。」

「っていうか、存在自体がうさんくせー。」

「あ、それ同意。」

子供達の実に厳しい意見とからかいに、「これは手厳しい。」と詩人の青年は肩を竦めた。困りきったような顔がなんとも言えず愛嬌がある。

やがて、わいわいと主に詩人の青年の変人つぷりと胡散臭さつぷり、歌物語の国とお城について内輪で話し始めた子供達に、青年は空の杯を満たす為にこっそりと立ち上がった。

すっかり日も沈み、けれど今日はオレンジ色のランプや篝火で照らされ続ける広場を、金の鐘を帽子に載せた青年が行く。  
心地よいばかりの人々の声、芳醇な葡萄酒の香り。

うきうきと水差しの一つから己の杯に紅色の酒を注ぐとした青年の背後から、ふと硬質な声がかかった。

「おい。」

「おつとと……!!」

ああ、アルヴィン。どうしたんだい？」

振り返った青年の前には、橙色の光に照らされ、葡萄酒のような紅色の髪をした男の子が立っていた。

「さっきの、歌の話。」

雪に覆われた北の国は、どこにある。」

どこかつつけんどんな物言い。やや鋭い目つき。だが、それは彼が詩人の青年を軽んじているからではなく、真剣に向き合っているが故だ。

だから、青年は逆に目元を柔らかくして、答えた。

「遠い、遠い国さ。言っただろう？北に真っ直ぐ、氷の森を抜けて、

凍った川を登って」

「凍る草原、霜の山脈だった。」

「あれはまあ……道程をはしよったのさ。とにかく此处からずつとずつと北へ。」

「気が遠くなるくらい、遠くの話さ。」

「でも、お前は行って戻って来た。」

子供の純粋な瞳が、真っ向から掴み所のない詩人の瞳を見た。

「どこにある。」

問い詰めるような口調に、己の胸にも満たないほどの背丈の子供に眼を合わせたまま　　やはり、穏やかな風のような口調で、青年は逆に問うた。

「知って、どうするつもりだい？」

動揺の気配。少年の意志の強そうな瞳が、幾度かぱちぱちと見開かれ　　それでも、逡巡したのは数秒のことだった。

「

…

魔女は、まだ泣いている？」

返ったのは、答えでなく問いかけ。

それも気にせず、青年は微笑んだ。

「さて、私が見た城は未だに雪に閉ざされていた。

魔女の呪いは解けていない。ということは魔女の涙は溶けない。彼女が泣いていたとしたら、君はどうする？」

やはり、末尾に付け加えられた疑問符。

それに、言葉を迷い選びながら、それでも少年ははっきり答えた。

「わからない

ただ、可哀そうだ。」

雪の中に一人なんて、と。

その言葉に静かに微笑むと、青年はちょうどからっぽになった水差しを卓に置いた。

「北の国はどこにある。」

「ああ、ちょうどワインが切れてしまったな。

アルヴィン、悪いけどちょっとあの辺の樽から水差しに汲んで来てくれ。」

「おい!!」

「一番上等なワインを選んでくれたまえ。

ついでに、来年、君が本当に今日の歌を憶えていたら、北の国への行き方を教えてあげよう。」

おどけるように杯に口付けた青年の、その眼の真摯な光に、何事かいいかけた少年は口を噤まざるを得なかった。

そのまま、無言でからっぽになった水差しを取る。

「それにしても、すっかり者の君が私の歌を信じるなんてねえ…。」  
水差しを手に大股で去りかけた少年の背に、ぽろり、といった感じに零れた言葉に。



「…元王都ロートヴィーク。万年雪の丘。  
爺さんの、そのまた親父くらいの世代だったか？でっかい戦があったのは。」

この村も、一応ノル…なんだったかな？とりあえず、北の国の地図の端っこにのってる村だったっていうけどな。」

遠い目をしながら葡萄酒を煽る男に、バルドは素直に頷いた。

「ああ、まあそのくらいだね。」

ちよつど、私の曾祖母が作った歌のようだから。」

「そうそうそれぞれ。」

俺もうつすらそんな昔話があったなー、とは思っていたが、そんな歌で残ってたんだな。

良い歌だった。楽しいとは言えないが、酒が深くなる。」

「それは有り難いお言葉だ。」

そう、私の曾祖母は一族の中でも抜きんでて歌の上手い人でね

…」

眼を細め語ろうとした時、澄んだ子供の声がその続きを掻き消した。

「あー！こんなとこにいた、しじんー！」

「まったく、手間かけさせんなよなー。」

「ほら、あたしの言ったとおりでしょ、一番手近な酒のあるところにいるってー！」

「しじんさんしじんさん、お願いがあるの。」

再びわらわらと集まって来た子供らに、バルドと酒場の主人は顔を見合わせた。

いかつい肩を器用に竦め、酒場の主人が一步下がり子供らにスペースを明け渡してやる。

「そうそう、さっき話してて気づいてさ!!」

元気よく捲し立てる男の子の、その茶色の髪に挿された麦の穂が落ちそうなのに気付いて、中々の長身であるバルドは軽く身をかめた。

篝火に、麦の穂色の髪と、帽子に載せられた鐘が黄金に光る。

「そう、その帽子! その鐘、きれいだねって!!」

男の子の髪に伸ばされた手にしがみついて、花冠の女の子が興奮気味に言った。

「ねー。」

「ねー。音も、なるよね。からん、ってきれいな音。」

「なにそれ? しじんだから?」

口々に言う子供らに、帽子に手をやり、ああ、とバルドは笑った。

「そう、今、ちょうどその話をしようとしていたんだよ。」

これは、私の一族に代々伝わるお守りの一種だね。鈴とか、鐘とか、とにかく音のなるものさ。歌ったり踊ったりするために使うんだ。

私のものは、曾祖母　おじいちゃんのお母さんのものをもらった。その歌声にあやかれるようにね。」

からん、古びれど錆びた様子を見せない鐘が、百数十年前と同じ音色で鳴る。

「カティア                    器量はそこまで良いわけではないけれど、とにかく踊りと歌が上手な人だったと聞いているよ。」

へえ、と神妙な子供らの吐息。その好奇心に輝く瞳に、バルドは笑うと頭上の帽子を麦の穂の取れた少年の頭にかぶせてやった。

「うわ、意外とでつけー!!」

「しじんのあたまでつかちー!!」

「ばかね、あんたらがちびなのよ。」

きやいきやいと、時に怒り声まじりの、泣き声まじりの、それでもひたすらに楽しそうな光景。

その賑やかさにつられたか、どこからか声が上がった。

「やあ、詩人様! まだまだ祭は始まったばかりだぞ、もっと歌っておくれよー!!」

「さっきのあれはいーい歌だった。」

もう一つ二つ、珍しい物語を聞きたいねえ。」

「その後は、今度はみんなで歌えるものもいい。」

「私は皆で踊れるような曲がいいわー!!」

笑いさんざめきながら、詩人バルドの歌を期待する人々。

それに、ひどく嬉しそうな笑みを浮かべて、バルドは一気に杯の中身を干した。

「やれやれ、詩人冥利に尽きると言うものだねえ。」

傍らには、明るい顔をした青年が詩人の弦楽器キタラを手に捧げ持っていた。

それを恋人でも抱きあげるように受け取って、バルドは卓の上に腰かけた。

「はてさて、次は何を物語りましょう。」

数奇な運命の双子の物語、奴隸から王に成り上がった男の物語、白銀の兵士の裏切りと忠誠の物語、火刑台の上で歌を歌った娘の物語

：

わたくしの樂と声に乗せまして、めでたき祝いの日の音の酒を、愉快な祭りと愛すべき皆様に最高の余興を！

愛も過ちも哀しみも、全て今日の日の歡樂の為に！！」

朗々たる声を上げた青年は、一瞬ばかり、と酒場の主人に向かって片目をつぶった。

全ては物語  
と。  
そうでしょう？

「まあ、違いねえ。」

歌姫が現れようと魔女が呪おうと王が死のうと、俺らにや関係ない

ねえ。」

苦笑しながらも杯を掲げた男に、集う人々に、青年はまさに歓楽を体現したかの如き微笑みで宣した。

「さあ、語ろう、私の声をもって古の詩を。  
我らの生をもって彼らの死を！」

びいん、弦が鳴く。

全てを非日常へ引きずり込む妙なる調べ。  
吟遊詩人の青年の髪が、秋の実りとまったく同じ黄金色に輝く。

「全ては余興、全ては娯楽！  
さあ、杯をかがげよう。

歌姫が魔女が現れようが、王が死のうが、他人事。

この麦の穂が実る限り、我らは生き続ける！！」

人々の歓声。突き出される杯、血の代わりに大地を濡らす葡萄酒、  
さざめく笑い声。

たった一日、刹那の祭は、それでもまだまだ終りそうにない

：

N  
e  
x  
t

『刻残りの季節』

【秋の子ら】 黄金色の髪の吟遊詩人は語った（後書き）

ここまできたらもうほぼ無事完結いたしました、『Cruel g  
arden』刻残りの季節』。あとはもう短いエピソードとアホ  
なネタを残すのみ。

ここまで長い話を書いたのは個人的に初めてです。まあ長いと言っ  
ても視点違いなだけですが。「他の人視点からだとは後味がまったく  
変わる話って素敵じゃね？」というちよつとした気持ちから10万  
字オーバーの話ができるとは…人生何があるかわからない。

冒頭部分は秋の子らが一番気に入っています。

なんとなく、最後に微妙にフラグ立ってた気がする赤毛のアル（ア  
ルヴィン）が、数年後バルドと共に雪の王都を訪れて過去の色々、  
主にイルヴァを解放する 二人（+邪魔者）でとりあえず旅に出て  
ツンツンデレな亡霊魔女イルヴァが徐々にアルにデレていくとかい  
う話が漠然とあるのですがちよつと書けそうにありません半年は。  
ヴィート君他三国の外伝話とかも無駄にあるんですがちよつとこれ  
からパソコン持ち込み不可の場所に飛ばされるので（刑務所とかで  
はありません）

おのれ…！まあさほど需要はないでしょうが（苦笑）

とにかかくにも、次回で本編完結。

【終章】 Cruel garden 刻残りの季節

巡る、巡る、時の中で

春は冬を追いやり

夏は春に触れられず

秋は夏を打ち倒し

冬は秋を殺し尽くす

自身の喜悦にのみ咲く春の傲慢と

自身の噴怒のまま世界を焼き焦がす夏の暗愚と

自身の歡樂のみに目を向ける秋の無情と

自身の悲哀のまま世界を凍てつかせる冬の酷薄と

∴ 一番“残刻”な季節はいつ？

一番残酷なのは誰？

C  
r  
u  
e  
l  
  
g  
a  
r  
d  
e  
n  
...

刻残りの季節

それは、残酷な神の箱庭の物語。

E  
n  
d

【終章】 Cruel garden 刻残りの季節（後書き）

とても短いエピソードですがとにかく本編これにて終了。

なかなか長いお話になりました、お付き合いくださいました方本当にありがとうございました。

とりあえずタイトルは、“残酷”と“残刻”って漢字どっちでもオツケーなんだよと電子辞書さんが言ってたのであんな感じに。

残酷な世界の、残酷な季節。誰が一番残酷か？というお話でした。

喜怒哀楽と春夏秋冬。

とにかく自分のために生きまくった酷い人々のお話でした。秋だけバルドくん含めて民衆で複数形ですが、とりあえず彼らも自分が一番。誰だって自分が主人公。

そんなわけで、まるでダメな男とまるでダメな女のある意味マダオーズストーリーでした。

…実はこの後、さらにダメさっぷりに拍車のかかったくらんなネタが幾つかありますが…まあ色々壊れているのでシリアス以外は苦手という人にはお勧めできません。

【くるえる がでん！〜念残りの異説〜】

「 という劇の台本を考えたんだが、どうかな。」

どこかすつとぼけたような雰囲気的男子生徒が、隣の同じ学生服の少年に言った。

ちなみに、台本がどうのこうの言う割にその手にはギターが握られている。

「舞台劇、か…」

粗筋しか書かれていないのか、やけにぺらい冊子を容赦なく斜め読みした、やや硬質な印象を与える少年は、軽く嘆息した。

「まあ内容は百歩譲ってどうでも良いとして…」

これを、あのキャストで？」

「うん」

じや〜ん、と無駄にギターを掻き鳴らして、男子生徒は頷いた。

誰かにいじられたのか、無造作に結った肩を越すぐらいの髪に、三つ編みが混じっている。

それから遠く、逃げさせた少年の視線の先には。

「好きだあああああッ春花！！」

同じ墓に入る事を前提に付き合ってくれ！！！！」

「いやだつつつてるでしょおおおおお暑苦しいッ！！」

男は嫌いッ！むさい男は特に嫌いッ！！あんたは一番嫌いよっ、王城！！

わたしは冬子さんが好きなのッ！！！！」

「あつ、あのつ、そのつ、そんなに抱き付かないでっ、唄川さん……っ！！」

夏雄も、落ち着いて？ねっ？ねっ！？」

熱い想いをシャウトする男と、激しく百合な想いをシャウトする少女と、その少女にどさくさ紛れにぎゅうぎゅうと抱きしめられつつ慌てる大人しそうな眼鏡の少女。

「ちなみにコレはあの三人から着想を得たのさ！！」

もうどうしようもない、と遠い眼をさらに遠い遙かへ飛ばそうとする少年に、べべんっ、と確実にギターでは出ないような音と共に男子生徒が言った。

「冗談は存在だけにしろ。」

「あ、ひどい。」

でもさー、三人とも見てくれただけは良いじゃん。」

「御剣部長は見た目だけじゃない。訂正しろ。後の二人はどうでも良い。」

「あー、はいはい。ほんと冬子さんの事好きだねえ兵部副部長くん。」

ショートカットの大人しげな、眼鏡の少女は剣道部の部長を務めているらしい。

ちなみに彼女に抱き付く、ふわふわとした長い髪がトレードマークの少女、言動を抜きにすれば掛け値なしの美少女と断じてても良い彼女は、コーラス部期待の星である。

そして、その彼女に求愛する、殴られ流れた鼻血すらもなんか凛々しい少年は、この学園の生徒会長であった。誰もが思うはずだ、生徒会選挙前に壇上にいた彼は決してこのような残念イケメンではなかったはずだと。

「ほらっ、あっち行こ、冬子さん！」

そうそうわたしお菓子焼いてきたの。中庭の温室でお茶しようよ。百合の花咲き乱れる中で……」

「あのっ、でも、夏雄が血を噴いてて……」

「やっぱり私、保健室に……」

「もううう……ッ！」

「なんで、冬子さんはこいつの事が好きなの……!？」

「踏まれようが喜ぶような変態なのにッ……!」

「げしっ！げしげしいッ……!」

「っふ、良い蹴りだ春花……流石俺が惚れた女。GJ……!!」

「いやあああああキモいいいい……!!」

涙目になったふわふわ髪美少女 唄川春花とは裏腹に、ぽっ、

と雪白の頬を染め、ショートカットの少女 御剣冬子は、呟

いた。

「でも……でも、私は、そんなアグレッシヴで熱血で無駄に余りすぎた血を噴いてるような夏雄が好き……」

「なんでえええええええ……ッ……!？」

思わず頭を抱える春花。うっとり頬に手をやる冬子。自身の（鼻）血の海にイイ顔で沈む生徒会長。

「っは、血……?もしかして、血が冬子さんの萌えポイント……!？」

「だったらちよっと待って、なんとか美しく吐血してみせるからっ……!」

まあ、わたし、冬子さんとの色々を考えるだけで鼻血くらいだったから簡単に出せるけどね

真性というかヤバイ発言をしながら必死に咳払いをする春花に、ふと、呆れた様子の女性の声がかかった。

「やめなさい、春花。コンクール一ヶ月後でしょ。」

「うううっ、だってだって、酷いんですよっ、鈴子先輩いっッ!!」

そばかすを薄く残した、中高一貫の学園の高等部の制服を纏った女生徒に、春花は盛大に泣きついた。

「酷いって、その生徒会長以上に酷い状態のがこの学校にいるの？」

「アレはあの馬鹿のほぼデフォルトですもの。」

「ああ、夏雄、血の海で必死に平泳ぎするあなたも素敵……」

「……っな、眺めてる暇があるなら、手を貸してくれ、冬子……ッ」  
ちなみに彼ら夏冬コンビは幼馴染同士である。

「それにしても、今日はどうしたんです？風間先輩。」

冬子の手を取りかけた生徒会長の手をぐりぐり踏みながら、春花は小首を傾げた。

あまりにも可憐だ。その踵へのすさまじいまでの重心のかけ具合を見なければ。

「ああ、バカ弟がなんかやらかしたらしくってね。」

「こら秋実、なんなのコレは。」

「あ、見てくれた？姉さん。」

ばじょらじょーん、と、もはや楽器の元型がわからない怪音をつま弾きつつ、ギター弾きの少年 風間秋実は、ぱあっと顔を輝かせた。

「見たけどなに、これ文化祭で本気でやるの。」

「っていうか何であたしが普通にキャストに入ってるのよ。おかし

いでしょ。」

「いや。せつかだから。」

腰に手を当てて慣れた様子で詰め寄る姉と、それをへらへらといなす弟。

「待て。文化祭でやるのか？コレを？」

台本（概要）を持たされたままだった鋭い眼の少年が、流石に声をあげた。

もともと無愛想な表情が、片眉を軽く上げただけで尋問中の警察官かなにかでもあるような威圧感を纏う。

それに、踏みつぶされても一向に堪えない麦の穂の如き飄々さで、秋実は頷いた。

「うん。ちなみに君の配役もあるよ。」

兵部士朗しろうだから、ほらこれ。白ね。グイート

「やるとは言っていない。」

「あれー？これ、結構美味しいよね？」

冬子さんの腹心の部下だよ？冬子さんの敵を討つ役だよ？」

思わず黙り込む少年 士朗。

硬派で生真面目な副部長の秘めた想いなど、軟派を通り越してゲル状な浸透率のギター弾き：放送研究部兼演劇部兼文芸部員にして町内餅すすり名人大会優勝者の秋実の眼には丸わかりだ。

「まあ、このまま劇の中みたいに報われないままで終わるかは君しだいかな？」

謡うように言い、べしょんつ、と最後にギターを掻き鳴らした。決まった……といった表情で眼を閉じた変人の額に、見事なチョップが決まった。

「ッどうおおおおお……痛いッ……！」

「痛いと言えるだけいいだろう、あそこのもはや声もでない馬鹿生

徒会長と違つて。」

「えええ…ッ？」

はっ、アレは幻の関節技…！！？春花くん、どんどん強くなるな

あ。あ、会長痙攣してる。」

「歌姫でなく狂戦士<sup>バサカ</sup>あたりにした方がいいんじゃないか。」

「せめてアマゾネスって言つてあげなよ。確かに病気とかしそうにないんだよね、皆勤賞だし。」

冬子くんだって、処刑されそうになったらおめおめと一人で死なず無理心中の一つでもかましそうだし。」

「不吉な事を言うな。それから“御剣さん”と呼べ。」

「痛い痛い痛いアイアンクロー痛い！！剣道部員の握力酷い！！  
ううっ、そ、それに、何よりの違いは……」

「ああ。あれだな。」

「うん、王城君、オーブンバカだもんねえ。」

「バカであることを開き直っているからな。」

「成績は良いんだけどね。バカだよな。」

「バカね。」

「大馬鹿よっ！」

「夏雄がバカであることは、確かに否定できません…でもそこも（略）。」

二人だけだった会話に、次々加わるバカの唱和。

その、中心人物、個性の強い面々の心を完全に一致させた偉大なる馬鹿は、がばりと血の海から身体を起こすと、吼えた。

「馬鹿で何が悪いっ！！バカならバカなりにバカらしく生きてゆく  
しかないだろう！！」

フォーエバーヴァカ！俺よ永遠なれ！あと春花は俺の嫁なれ！！  
「こんつのバカちゃんがああああッ！！」

「あっ、春花くん、その体勢での蹴りだとパンツ見えるよ！！？」

「なんですって……！？夏雄のふけっツ！！」

「ちょ、まさかの合体攻撃……！？それは流石にぎゃあああああああ  
ああ……ッ……！！？」

再び、血の海に沈む馬鹿。

それに、

「冬子さんと一緒に協力蹴りできちゃった」

と幸せを噛み締める馬鹿。

「夏雄っ、なんでそんな酷い出血に……！！？まさか、唄川さんのパ  
ンツ効果……！！？」

夏雄のバカアツ……！！」

とさらなる誤解を重ねる馬鹿。

「駄目だ御剣さん、その角度では貴方のぱん……下着が見えかねない  
……！！」

そう言つて、自ら馬鹿の輪の中に入りに行く馬鹿。

ずぎやらぎやらぎよぉん

「まったく、みんな楽しそうだなあ」

最初からなんか実にアレな馬鹿。

「あんたに言われちゃ世話ないわねえ。」

そして、バカ騒ぎを楽しむことを知る馬鹿。

「これ、やっぱギャグにでも改訂した方がいいんじゃない？」

「でも、それだとあまりにも日常すぎるんだよねえ。」

「ま、確かに。」

語りあう姉弟。

彼らの手には、『Cruel garden（刻残りの季節）』と  
題された小冊子が乗っていた  
：

【The garden of fools】

END：ある平凡な学園の日常とバカ達

「くるえる がでん」念残りの異説」（後書き）

言い訳

「幸せになりたかったのッ！」（殺人の動機を名探偵に聞かれた犯人の女（inn崖の上）風）

幸せじゃなくて、馬鹿になつてるうん…まあそれも一興。とりあえずやってみたかったんだ。現代版で、演劇才子。

ちなみに名前と部活は

・ コーラス部	唄川 <small>うたがわ</small>	春花 <small>はるか</small>	（フレイア）
・ 生徒会長	王城 <small>おうじょう</small>	夏雄 <small>なつお</small>	（アルヴィド）
・ 放送・演劇・文芸	風間 <small>かざま</small>	秋実 <small>あきさね</small>	（バルド）
・ 剣道部部长	御剣 <small>みつるぎ</small>	冬子 <small>ふゆこ</small>	（イルヴァ）
・ 剣道部副部长	兵部 <small>ひょうぶ</small>	士朗 <small>しろう</small>	（ヴィート）
・ コーラス部前部長	風間 <small>かざま</small>	鈴子 <small>りんこ</small>	（カティア）

語感より字面を重視してみました。

こちらの皆さんは潔いまでの残念っぷりです。皆が皆酷いなんかバルドもとい秋実くんの生き生きっぷりったらないです。輝け変人。ヴィートくんこと士朗くんも大概だが。主要三人？そんなのどうしようもないよ？  
いつそのぐらいアグレッシヴに生きられていたら…！！（話すすまねーよ！！）

でもまあ、楽しんで書けました。自己満自己満。

あと二つ、ネタはありますが時間が無い。

【くるえる がでん!】 The garden of Lily (前書き)

露骨ではありませんが百合要素薔薇要素(?)が苦手な方はご注意ください。

【くるえる がでん!】 The garden of Lily

冬の長い国で、常に花の咲き乱れる王城自慢の庭園。

そこは、まさに賛美されるべき楽園だった。

咲き誇る香り高き花、柔らかな緑、可憐な鳥の歌

何より、

麗しい乙女たちの楽しいな囁き声。

くすくすと、密やかな笑い声をたて睦みあう二人の乙女。

氷よりも澄んだ藍色、花よりも柔らかい薄紅。纏う色彩は違えど、

互いに抱く親愛 あるいは、それ以上の 情は同じ。

絡み合う手と手、重なる眼差し。微かなもどかしさとそれを掻き消すほどの幸福と愛と美しさに満たされた空間。穢れなき乙女の花園。

そこは、確かに楽園だった。

そして 楽園から一步、一步だけ外れた其処は、ある意味地獄以下の虚しさだった。

その証明の一端をお見せするならば以下。

.....

「何をなさっているのです、陛下。」

「いや、久方ぶりに庭で憩おうとしたら『男子禁制です』と叩き出されてな。」

「はあ。」

「　　ッいつからこの庭はそんな秘密の花園と化したというの

だ！？というかこの庭の、城の持ち主は私だろう！？

私は何者か、言ってみろ、近衛騎士ヴィクトール！！」

「おっしゃる通りでございます、ノルヴィーク国王アルヴィド・マ  
グヌス・ティセリウス、庭園の柵に覗き魔の如くへばりついている  
我らが賢王陛下。」

ですから少し落ち着いて下さい。」

「ああ、俺は霜の山脈のように冷静だとも……！！」

くっ、何故だ、何故なのだフレリア……『むさい男子は嫌い』などと  
言うが、俺はむささとは対極の王子様系イケメンフェイスだと自負  
しておるぞ！？というか実際王子だったしな。」

「はあ。（……まあ、間違っちゃいないが自分で言つと碌でもないな）

「イルヴァー！！お前も……お前も、変わってしまった……！！」

あの澄んだ眼差しは何処に！？今お前から感じるのは、あたかも“  
思春期の娘が駄目親父に向ける冷たい視線” チツクなものばかり！

「はあ。（確かに駄目っぽいのは確かだ、この男）」

「ああっ、見たかヴィクトール！？フレリアがイルヴァにスフレを  
『はい、あ〜ん』とかやったぞ！？受け入れるイルヴァ！そして  
囁き！頬を染めるフレリア、笑みを浮かべるイルヴァ。

多分『間接キスですね』『イ、イルヴァ様……』とかそんな展開があ  
ったのだろうとこの才気煥発聡明叡智たる賢王は推測する……！！」

「はあ。（駄目っぽいつていうか駄目だこいつ）」

「くっ、混ざりたい……ッ……！！」

「駄目だこいつ。」

「声に出ているぞヴィクトール。」

くっ、しかしこうなったら、“女体化の秘薬”を求めるしかない  
か……！！」

「はあ……？」

「俺がつ、俺が穢れなき乙女、処女王“アルヴァ・マグノリア・セイセーリア”あたりであればあの百合な花園に混ぜてもらえるのだろっ！？ならば何を躊躇うことがあるっか！！」

南の国に攻め入り、西の国を焼き、東の国を滅ぼしても良い！！俺は求める、俺は乞う、女体化の秘薬、女体化の術！！何を犠牲にしよう、この冷遇より俺を救う一筋の光を！！

行け、先陣を切るのはお前だ、白銀の無口ヴィクトール！！」

「お待ちください、陛下！？それはいくらなんでも無茶というも」

「さもなければ俺と貴様が薔薇<sup>バラ</sup>るかだ。」

「この身に代えましてもかならずや！！」

「うむ、その即答っぷりが返って心地よいかもしれん。

安心しろ、見事秘薬を手に入れた暁には、お前にも女体化の栄誉を…」

「狂王に死を！！」

ザシュッ！

「…な、何故だ…」

「いや何故だてあんた。」

「ヴィクトール…」

「……………」

「……………“ヴィクトリカ”と、“ヴィクトリッセ”、どっちが好みだ…？」

「狂王に以下略！！」  
ズブシャアッ！！

冬の長い国で、常に花の咲き乱れる王城自慢の庭園。

そこは、まさに賛美されるべき楽園だった。

誰もが謳い、憧れるそれは、白銀の兵士により守り通され

…

そして、二人の乙女はきゃっきゃうふふといつまでも幸せに暮らしましたとき。

【The garden of Lily】

END：百合の花咲く庭で、貴女と

言い訳

去勢すればいいよ、というのが今までで一番の意見です。

…えー、シリアスキャンセラーを目指してみましたが、とりあえず王さまひでえ。(色々な意味で)

いや、その、色々幸せにしたかったんだ!でもとりあず三人いつぺんに幸せになるのは無理だったんだ!!それで、ひとまず王様とヴィート君に犠牲になってもらおうと思ったたら犠牲の大きさが相当だった!!

そして追い討ちをかけるような狂王と白銀の無口その後

「とりあえず女装から入ったらなんとかなるだろうか。」

「知るかボケ。」

「毛皮でも流行らすか。体型隠せそうだし。」

「聞けよバカ。」

「なに、いきなりフリフリすけすけ上腕二等筋から背中丸見えのドレスに挑戦するつもりか!!?」

いや、賢王と称された俺から言わせてもらうに、流石にガチガチの剣術使いのお前がいきなりそれ着るのはきついと思うぞ。やめておけ。」

「誰が着るか!!?」

「なんだかんだで仲が良いよな、陛下とフォルクング隊長。」

「ああ、なんだかんだでな。」

「オレ、隊長には意外とメイド服が似合うと思う。」

そして城内に響き渡る血を吐くような絶叫。

「こんな国滅ぼしてやる！！！！！」

それは、（ある意味）残酷な箱庭の物語……

完！！

あとは歌姫と魔女逆転阿呆話がひとつ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2663k/>

---

Cruel garden ～刻残りの季節～

2010年10月11日13時36分発行